KAN―SENは指揮官が急にオープンスケベとなってムラムラしているようです

ねんころり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はいつの間にか男女の貞操観念が逆転した世界へと迷い込んでいたらしい。

あれ？　これって冷静に考えてみればウハウハじゃね？　セクハラし放題じゃんやったぜ。

アズールレーンで貞操逆転作品を読みたいと探してみたら全然見当たらなかった。仕方が無いので自給自足することにした。

男子中学生みたいに性欲を持て余したＫＡＮ―ＳＥＮばかりなので、綺麗なＫＡＮ―ＳＥＮが見たい人は今すぐブラウザバック！

目次

01 1
02 11
03 21
04 34
05 46
06 62
07 76
08 88
09 112
10 121
11 136
12 152

13 165
14 174
15 188
16 203
17 221
18 233

01

ジリリリリリリリーン！

「んん……うるせえなぁ……」

相変わらず耳障りな目覚ましの音に鼓膜を揺さぶられ、俺は渋々目を覚ます。ただでさえ暑くて寝苦しいってのに、朝早く起きなきゃならないなんて勘弁して欲しいぜ全く。

よりによって、このクソ暑い時期にエアコンが壊れるとはなぁ……扇風機が無ければ俺達全員熱中症でお陀仏だったところだ。

しかし俺は母港で勤務する指揮官である以上、朝寝坊なんて許される立場では無い。そんなことをすれば一部のＫＡＮ―ＳＥＮ達から大目玉を喰らってしまう。

「はいはい、起きりゃ良いんでしょ起きりゃ……っと」

寝ぼけ眼を擦りつつベッドから這い出る。あぁダメだ。昨夜遅くまで仕事してたせいでまだ眠い。いや、暑さで仕事が捗らなかった俺の自業自得だけどさ。

心の中で呟きながら、俺はいつも通りテレビのリモコンのスイッチを入れる。すると、ダラダラ身支度を整えていた俺の耳に変なニュースが入ってくる。

『男性にわいせつな行為をしたとして、無職の女性（３０）を強制わいせつの罪で逮捕……』

「わいせつって……そいつ馬鹿だな。目先の欲望の為に人生を棒に振るとか……ん？」

ちょっと待て。今、女が男にわいせつ行為をしたとか言ってなかったか？　いやまさか、女が男を襲うなんてレアケースが身近に存在する訳……きっと俺の聞き間違いだな。

寝不足だったからうっかり勘違いしたんだろう。それこそ薄い本に描かれているような出来事が、そんな当たり前のようにニュースで流れるとは考えにくいし。

『それにしても、男性専用車両のお陰で痴漢被害が減ったのは良いことですね』

「……だ、男性専用車両？」

ダメだ。俺の頭と耳は本格的にバグっているらしい。たかが一日寝不足なだけでここまでになるか？　よし、今日は出来るだけ早く寝よう。流石にこんな状態が続くのはヤバい。

それにしても暑いな……どうせ視察なんてしばらく来ないし、今日も上はシャツ一枚で良いか。一々上着まで羽織ってたら汗だくになるし熱中症で死ぬわ。

コンコンコン……

「ん？」

『綾波です。入っても良い、ですか？』
「あぁ。大丈夫だ」
ガチャ……
「失礼するです。指揮官、そろそろ朝食の……」
「……綾波？」
綾波が入って来たと思ったら、急に動きを止めた。まるで信じられない物を見たかのように体を震えさせている。どうしたんだ？　綾波も暑さにやられたか？
「お～い、綾波～？」
「……し、失礼したですっ!!」
バタンッ！
「へ？」
綾波の顔を覗き込んだら、それはもうゆでだこのように顔を真っ赤に染めながらダッシュで部屋を出て行った。本当にどうしたんだよ？　俺、何か気に障るようなこと言ったか？
『し、指揮官……き、ききっ、着替えているなら、そう言って下さい……！』
「あ、そうか。悪い、配慮が足りなかったな……」
言われてみればそうだった。俺はいつもシャツ一で行動しているが、流石に上半身裸

なのは不味かったかもしれない。いくら男の裸とは言え、このご時世ではセクハラと訴えられてもおかしくないもんな。

いや、それにしても反応が大袈裟だな。別に男がシャツを脱いだくらいで、そこまで慌てることは無いと思うが……ハッ！　まさか信じられないほど汗臭かったとか？　だとしたらヘコむな……

『はぁっ、はぁっ……！』

（て、てっきり着替え終えたと思っていたら……まさか、とととトップレスだったなんて……！　こんなの、予想してないです……！　うう、指揮官の胸が頭から離れないです……！

朝からとんでもないものを見てしまったです……！　指揮官の胸……胸……うぅっ、思い出しちゃダメ……！　あぁでもっ、脳が勝手にさっきの光景をリピートして……）

『……』

「綾波ー！　さっきは悪かった！　もう大丈夫！　ちゃんと着たから！」

『ほ、本当ですか……？』

ガチャ……

「ほら。これで良いだろ？」

いつも通りちゃんとシャツを羽織ったぞ？　これなら文句無いだろう。

「……」
「……綾波？」
あっ、綾波が鼻血出した。やっぱり暑さで参ってるのか？
「……す」
「す？」

「少しトイレ行って来るですッ!!」

バタンッ！　ズダダダダダッ！
「お、おい。綾波……行っちまった」
急にもよおしたのか？　しかし女の子が堂々と「トイレ行く！」か……綾波なら遠回しな表現で言うと思っていたが、意外と直球なのな。
さて、俺はぽつんと一人になってしまった訳だが。このまま綾波を待っても良いけ

ど、遅刻したらうるさく言われそうだしな……悪いが先に食堂へ行ってるぞ？

「あっあっあぁぁぁぁっ♡　し、指揮官のおっぱいっ♡　おっぱいが見られるなんてっ♡　それに、ち、乳首っ！　乳首が出ててっ♡　今まで妄想ばかりだったのにっ♡　まさか本物が……んあっ♡　それにっ、着替えたと言っておいて……シャツ一枚だなんてっ♡　んぅっ♡　胸ポチがっ、汗で胸ポチがぁっ♡　透け乳首エロ過ぎですっ♡　折角昨日抜いたのにっ♡　またムラムラって……っあ♡　い、いつも以上に気持ち良いですっ♡　胸、むしゃぶりつきたいですっ♡　揉み尽くして吸い尽くしたいですっ♡　あっあっ♡　ダメっ♡　もうイくっ♡　イくですっ♡　ま、まだオナっていたいの

にっ♡　さっきの光景が頭に焼き付いてっ♡
　んきゅううううっ♡　し、指揮官っ♡　指揮官指揮官指揮官っ♡　あっあっあっ♡　イくっ、んうううううううううううっ♡
……ふぅ。スッキリした、です。しばらくはオカズに困らないのです……♡」

湧き出る汗を手でぬぐいながら、俺は食堂へと向かう。相変わらず真面目なＫＡＮ―ＳＥＮばかりだな……俺が来る頃には、ほぼ全員が食卓に並んでいるときた。
この場にいないのは、さっきトイレへ走って行った綾波とロング・アイランドくらいか？　出撃組はともかく、非番なら朝飯抜いて寝転がっていたとしても別に死にはしな

いのになぁ。
「おはよ～。今日も暑いな……後数日でエアコンの修理業者が来るから、それまでの辛抱だ」
「「「「「「……」」」」」」
「……ん？　どした？」
　各々好きに喋っていたＫＡＮ―ＳＥＮ達が、俺の声に気がついて顔を向けた瞬間……まるで時間が止まったかのように空気が凍り付いた。え、何だこの状況。
「し、指揮官……？　えっと、あの……」
「お、エンタープライズか。顔が赤いぞ？　確かにこの暑さなら無理も無いが」
「……」
（まさか、無自覚なのか……？　ただでさえ汗を流した指揮官はそそられると言うのに、挙句の果てに下着で現れるだなんて……！　え、エロい！　エロ過ぎる……っ！）
（指揮官様!?　まさか暑さで痴漢になられたというの!?　で、でも、凄く眼福ですわ……♡）
（こ、こんな女だらけの場所でそんな破廉恥な恰好をするだなんて……もしかして、お姉さんを誘ってるの？　ただでさえやらしくてムラムラするのに追い打ちをかけてくるの!?）

（指揮官の肉まん、美味しそう……♡　あぁっ、出来ることなら今すぐ食べたい……♡
むしゃぶりつきたぁい……♡）
（おっ、おおおおお兄ちゃん!?　ダメだよ!?　そんな、エッチな恰好で来るなんて……
うぅ、見ちゃダメなのに、目が勝手に……♡）
（こ、これは……股間に悪い！　悪すぎるっ！　どうしたのだ閣下!?　まさか私の意識
を駆逐艦から遠ざけようと、色仕掛けをしてきたのか……!?）
（い、インディちゃんの薄い本と同じくらいの破壊力が……いや、もしかしたらそれ以上
……?　いや、私にはインディちゃんが……でもっ、目の前のエッチな指揮官も……ご
くっ♡）
「……?」
　お、おい。どうして全員が俺から目を離さないんだ?　それに視線が妙にねっとりし
ているような……まさか、本当にみんな暑さでやられたのか?　出撃中止した方が良い
のか?
（……今夜のオカズは確定だな♡）
（あっ、と、殿様のシャツから胸が……も、もう少しで見え……見え……はうぅ……）
（誇らしき……いえ、いやらしきご主人様……まさか、いつも夜な夜な一人で慰めている
私の為に自ら体を張って……?）

（か、カメラカメラカメラ!?　あぁもうっ！　こんなの想定外だよっ！　部屋に置いて来ちゃった！　せめて、せめて脳に焼き付けておかないと……！）
（よ、良かった。私、まだ枯れて……いやいやいや!?　何を考えているんだ私は!?　私はまだ若い！　だからこそ私はこうして指揮官の卑猥な姿に興奮して……）
（いけませんベルファスト！　私はご主人様に全てを捧げると誓ったメイドです！　それなのに、このような劣情を抱くなんて……で、でも、少し眺めるくらいなら、良いですよね……？）
「……」
この時、俺はまだ気がついていなかったんだ。まさか俺が、貞操観念が逆転した世界へ迷い込んでしまっていただなんて……

02

あれから俺はＫＡＮ―ＳＥＮ達からの妙にねっとりした視線に違和感を覚えながら朝食を取った。そういや途中から綾波が遅れて食堂に来たな。さっきとは違って何かをやり遂げたような顔だったが。

理由を聞いても顔を赤くしながら「な、ナニです！　あっ、違、何でも無いです！」としか言ってくれないし……まぁ女の子には色々と話しにくいことだってあるだろうし、詮索するのはやめておいた。

「やっぱここの飯は上手いわ。昼飯が待ち遠しいな」

「し、指揮官……」

「ん？　何？」

「その、いつまでその格好でいるのですか？」

（さっき抜いたばかりなのに、またムラムラしてきちゃうです……）

「いつまでって、今更何言ってんだ？　俺、ここ最近はいつもこんな感じじゃん」

「嘘ですッ!!!」

「うおっ!?　急に大声出すなよ!?」

切羽詰まった顔で「嘘ですッ!!!」だなんて叫ばれたらビビるじゃないか！　というかそれどっちかっつーと赤城の台詞じゃね？　あっちは「嘘だッ!!!」だけど。
「昨日までしっかり上着を羽織っていたじゃないですか！　それで時々ハンカチで汗をぬぐう姿がエロ……」
「ん？」
「あわわっ、その、とにかくっ！　その恰好じゃいつか痴女に襲われるです！　ただでさえここは女の人で一杯なのに……」
「いやいや何で男が薄着で女に襲われるんだよ。普通逆じゃん」
「……」
あれ？　綾波が「何言ってんだこいつ」みたいな顔で俺を見てくるんだけど。俺おかしいこと言ったか？
「指揮官、まさか暑さで頭がサンディエゴになってしまったのですか……？」
「とりあえずサンディエゴに謝……らなくて良いか。そんなこと無いって。俺はむしろ綾波の方がおかしいと思うぞ」
「とにかく！　暑いとは思いますけど、ちゃんと上着を着て下さい！　ナニかあってからじゃ遅いです！」
（目の保養が無くなるのは惜しいですけど、指揮官がどこの誰かも分からない馬の骨に

レ〇プされる方が大問題です！）

うわっ、綾波の目がマジだ。これは素直に言うことを聞いておいた方が良いか。マジモードの綾波を拗ねさせると、すぐに引き篭もって可愛いストライキ起こすからな……

「分かった分かった。部屋に戻ったらちゃんと着るから」

「約束です。でないと……我慢出来ず襲いたくなっちゃうのです……」

「ん？」

「な、何でも無いです」

「あづい……やっぱり上着なんて寒い時期以外着るもんじゃないな……」

俺は現在、エアコンがぶっ壊れた部屋で上着を羽織りつつ汗だくで書類仕事をしている。もはや何度タオルで汗を拭いたか分からない。一応扇風機は付けているが、この暑さでは焼け石に水だ。

しかしＫＡＮ―ＳＥＮ達はこの程度では済まない。この炎天下の中、クッソ重い艤装を背負って海へ出向き、直射日光に晒されながらセイレーンと戦わなければならない訳だ。うん、そっちの方が辛いな。

だから俺は暑い暑いと愚痴をこぼしつつも、せめて仕事はサボらずにやろうと心がけている。ただし俺の決心は豆腐より柔らかいので、あまりに暑いと決心を全力で投げ捨ててダラけてしまうのだが。

コンコンコン……

「んぁ？　どうぞ～」

時間的に委託組か。この暑さで遠方まで出向かせるのは申し訳無いよなぁ……サボると上から怒られる以上仕方ないんだけどさ。

ガチャッ……

「指揮官さ～ん……今回も無事成功しましたよぉ……」どたぷ～んっ！
「はぁ～……汗が止まらないわ……」どたぷ～んっ！
「みんなだらしないなぁ～！　こういう時こそ元気にいかないと～！」どたぷ～んっ！
「とか言いつつ貴女も脱いでるじゃないの！」たぷんっ！
「そりゃ昨日より最高気温高いからな～」たぷんっ！
「すみません、指揮官様……どうしても暑くて……」たぷんっ！
「どぅわあああああああああああああああああああああああッ!?」
「ひゃあっ!?　ど、どうしたんですか指揮官さん!?」
「どうしたもこうしたもあるかぁッ!!　お前らなんつーカッコしてんだよッ!?」
　ドアが開いた瞬間あまりの衝撃に目ん玉が飛び出しそうになったわッ!!　だってサフォークとセントルイスと寧海が上着脱いでブラジャー丸見えの状態なんだぞ!?

しかもサンディエゴと夕立と荒潮に至ってはおっぱい丸出しじゃねえか!!　いくら暑いからってお前らが脱ぐか!?　人がいない海上だからって普通脱ぐか!?
羞恥心どこいったんだよ!?　マジで頭が暑さでオーバーヒートしたのか!?　いや百歩譲って海上で脱いだとしても、そのままの恰好で俺の所に来るか普通!?
「何慌ててるのよ指揮官くん。私達、この前からずっとこんな感じじゃない。ただでさえ暑くて上着羽織ってるのも辛いのよ」
この前からだと!?　俺の記憶が正しければお前らは昨日まで暑い中でもしっかり服を着て任務こなしてたじゃんか!!
「し、指揮官には言われたくないよ!?　指揮官だって、さっき食堂に来た時……その、上着脱いでたでしょ？　あまりの暑さに頭が私みたいになっちゃったのかと思ったもん！　エロ過ぎて今でも思い出しちゃうくらいだよ……」
「いやいや男が上着脱いでるのは普通だろ!!　むしろ女がブラ丸出しやトップレスでいる方が遥かにヤバいわ!!」
今だっておっぱいガン見したい欲求を必死に抑えて全力で目をそらしてるんだぞ!?
後でセクハラだと訴えられたら俺の人生が一瞬にして粉々になっちまう!!
実を言うと一瞬だけたわわな果実とかピンク色の乳首とか見えたけどノーカン！
不意打ちでじっくり眺める暇すら無かったからノーカン！　誰が何と言おうがノーカ

ン!!

「えっ、何言ってるの？　別に女の人が上を脱いでいても、せいぜい『暑いのかな？』だとか『筋トレ中かな？』と思われるだけでしょ？」

「……は？」

「逆に男性の方が、その……胸部を露出していたら、女性の方に襲われかねません……」

「いや、えっ……？」

「指揮官、本当に大丈夫か？　朝から様子がおかしいぞ？」

「……」

サフォーク達から目を逸らしつつ考える。言われてみれば、ＫＡＮ―ＳＥＮ達の態度がおかしくなったのは今朝からだ。綾波は鼻血出しながらトイレへ駆け込むし、食堂ではどいつもこいつも俺をガン見するし……

こいつらは男の俺に対しても平気で胸を見せつけてくるし、それを恥ずかしがっている様子も無い。むしろ俺が説得しようとすればするほど、俺がおかしいことを言っていると指摘されてしまう。

これだけならＫＡＮ―ＳＥＮ達が総出でドッキリか何かを仕掛けて、俺をからかっていると強引に結論付けることも出来る。だが今朝のニュースの内容を考えれば、ドッキリの可能性は無いと断言して良いだろう。

流石にテレビで放送している内容まで弄ることは出来ないはず……出来ないよな？　まさかテレビ局にコネ持ってるＫＡＮ―ＳＥＮはいないよな？　……いないと信じよう。うん。

そこまで頭を巡らせていると、俺の中にある一つの仮説が浮かび上がる。それこそ現実的にあり得ないような、とてつもなく都合の良い仮説が……いや待て。まだ俺が寝ぼけてるだけの可能性もあるだろ。

「……すまん。誰でも良いから、俺の頬を思いっきりつねってくれないか？」

「つねれば良いの？　オッケー！　えいっ！」

「いだだだっ!?」

「あっ……ご、ごめんね!?　思いきりって言われたから、つい……」

「ちょっとサンディエゴ！　男の人の顔に傷を付けるとか何考えてるのよ!?」

「だ、だって指揮官がつねってって言うから……」

「……」

たった今サンディエゴに頬が千切れるかと思うくらいつねられて理解した。これは恐らく夢じゃない。となると、いよいよ俺の仮説が現実味を帯びてくる。

いや我ながら何考えてるんだと思わなくもないが、今朝からの出来事を思い出したらそうとしか考えられないんだよ。現にサフォーク達はおっぱいやブラ丸出しでも平然

としてる訳で……

「指揮官さん？」

「指揮官くん？」

「「指揮官？」」

「指揮官様？」

「……あー、うん。暑い中任務ご苦労さん。さっきは取り乱して悪かったな。今日はもう非番だし早く自室へ帰って休んどけ」

仮説が正しいならまだしも、間違ってたら洒落にならないんだよこの状況。後で訴えるとかマジでやめてくれよ？

「何だか、指揮官さんが急に落ち着きを取り戻しました～」どたぷ～んっ！

「さっきまであんなに慌てていて可愛かったのに」どたぷ～んっ！

「何か変な物でも食べたんじゃない？　あ、朝から下着で食堂に来るほどだし……♡」どたぷ～んっ！

「さ、サンディエゴ……！」たぷんっ！

（あ、あれは凄かったな～……飯食べてる間ずっとガン見しちゃった……♡）たぷんっ！

（……あの刺激的な光景は、しばらく忘れられそうにありません。今でも鮮明に……♡）たぷんっ！

「……」

ごめんやっぱ取り消し。もうちょっとだけ帰らないで。この際だからチラチラ見て脳内におっぱい焼き付けとくから。もしかすると二度と見られない光景かもしれないし。

訴えられるのは怖いけど俺だって男なんだよ。性欲には勝てないんだよ。目の前に美少女達の綺麗なおっぱいがあるんだぞ？　たゆんたゆんしてんだぞ！　我慢するなんて無理だろ!!

03

「生おっぱい、初めて見たわ……」

サフォーク達が部屋へ戻った後、俺は一人おっぱいの余韻に浸っていた。あれだけの美少女達から無防備におっぱいをさらけ出されてガン無視出来る奴は男じゃないと思う。いやマジで。

だが、同時におかしいとも思う。昨日まで普通に羞恥心を持っていたはずのＫＡＮ―ＳＥＮ達が、たった一日で男の前でおっぱいを丸出しにしながら平然としていられる痴女になるとは考えにくい。

俺が夢を見ていたり寝ぼけている可能性はサンディエゴに否定してもらった（かなり痛かったが）。となると、やはりさっき頭に浮かんだ仮説が正しいとしか考えられない。

「……ここは男女の貞操観念が逆になってる世界なのか？」

そう。俺が昔読んだ薄い本の内容と全く同じ状況が繰り広げられているのだ。女が男の裸に興奮し、男はそんな女達をみっともないと感じる。そして女は平気で胸を出し、男は人前で肌を見せない。

思えば上半身裸の俺を見た綾波の反応は初心（うぶ）な少年のそれだったし、食堂でのＫＡＮ

―ＳＥＮ達のねっとりした視線はまさしく男がエロい目で女を見るそれと同じだった。
つまりＫＡＮ―ＳＥＮ達は俺の体を見て欲情していたことになる。いや我ながら気持ち悪いことを考えている自覚はあるが、実際に綾波達は俺に「男がそんな恰好（トップレス）でいたら女に襲われる」と言ってきた訳で……
「う～ん……少し試してみるか？」
ここであれこれ思考を巡らせていても仕方がない。現状では仮説の域を出ない以上、実際に確かめてみるしかないのだ。もっとも、一歩間違えれば俺の人生がその場でクラッシュしてしまいかねない。
だからこそ、試す相手は慎重に選ばないといけない。具体的には優しくて思いやりがあってセクハラまがいのことをしてもこちらが謝ったり冗談だと言えば許してくれそうな子が良い。
「でも、そんないかにも男の理想を体現したようなＫＡＮ―ＳＥＮは流石に……」

「指揮官。急に呼び出してどうしたの？　あてに何か相談事？」
「いたあああああああああああああああああああああッ!!」
「ひゃあっ!?」
　いたよ！　ピッタリ当てはまる子がいたよ！　優しくて思いやりがあってセクハラまがいのことをしてもこちらが謝ったり冗談だと言えば許してくれそうなＫＡＮ―ＳＥＮがいたよ!!
「長良！　君がナンバーワンだ！　君がいてくれて本当に良かった!!」
「えっ、あ、うん……ありがとう……？」
（し、指揮官……顔近いよ……もう少し近づいたら、き、キス出来ちゃう距離だよ……？
　あっ、指揮官の唇……柔らかそう……♡）
　長良なら今から俺が変態極まる発言や行動をしたとしても許してくれるはずだ！
何せ失望状態になっても辛辣な言葉をかけるどころか、俺（プレイヤー）のことを心配してくれる天使だからな!!

「長良……」
「な、なぁに……？」
「ちょっと暑くなってきたから上着脱いで良いか？」
「ふぇっ!?　だ、ダメだよ～！　あてがいるんだよ!?」
「……それは男の俺が女の長良の前で肌を晒すのがまずいからか？」
「当たり前でしょ～！」
（本音を言うと、指揮官の下着姿は凄く見たいけど……いやいやっ！　何考えてるのあて!?）
「……」
　長良が嘘をついているようにも見えないし、嘘をつくような性格とも思わない。それだけじゃなく、長良の反応は綾波達の発言とも一致する。
　ここまでは良い……問題は次だ。この行動で俺の仮説が正しいかどうかが決まる。
長良、今から俺はトチ狂ったようなことを言うが、どうか広い心で許して欲しい。
「……分かった。じゃあ長良、その代わり……」
「う、うん……」

「おっぱい揉ませて☆」
「え？　い、いきなりどうしたの？　別に良いけど……」
　マジか!!　二つ返事でＯＫ出されるとは……いや待て。万が一、長良が持ち前の優しさのせいで俺の頼みを断れないだけだったとしたら？　最後の最後まで確かめないと。
「……それは恥ずかしいのを我慢していたりとか、俺の命令だから逆らえないという訳では無いよな？」
「う、うん……別に、胸を触られるくらいで恥ずかしいとは思わないよ？」
（女の子の胸を触りたいだなんて珍しいなぁ。あてはむしろ指揮官のおっぱいが……だ～か～らぁ～っ！　変なこと考えちゃダメだってば～！）
「……」
　どうやら俺の仮説は正しかったようだ。ここは本当に男女の貞操観念が逆転した世界なのか！　俺がいつ、どうしてこの世界に迷い込んだのかは気になるが、そんなことどうだって良い！
　さっき広い心で許してとか考えてたけど、本人からＯＫ貰ったんだから……良いよな？　その大きなおっぱいを思う存分揉みしだいても良いよな？

現実世界で言えば女が男の胸板をスリスリするようなもんだし、遠慮なくガバッといっちゃって良いよな!?　俺だってさっきおっぱい見せつけられたせいでムラムラしてるんだ！　ちょっとくらい触ってもバチ当たらないよな!?
「……じゃ、じゃあ、触るぞ？」
「あ、服ははだけた方が良い？」
「お願いします」
俺は決め顔でそう言った。
「分かった。よいしょっと」ぷるんっ！
うおーーーーーーーっ!!　生おっぱいだ！　生おっぱいが目の前にいーーーーーーーっ!!　しかも今度はチラチラ見るだけじゃなくて堂々と触れるんだぜ!?　イヤッホォーーーーーーーウ!!
「そ、それじゃあ失礼して……」
むにゅん♡
「んっ……♡」
うわっ、柔らけぇ……薄い本やエロ画像で見た時から柔らかそうだとは思ってたけど、本物はこんなにもあったかくてフワッフワだったのか……！
むにゅんむにゅん♡　むにゅむにゅっ♡

「あっ……♡」

揉めば揉むほどおっぱいの魅力に惹きこまれていく。だってさ、手で掴もうとすると指が沈み込むんだぜ？　そんでもって鷲掴みにすれば、それに合わせておっぱいがグニュって形を変えるんだぜ!?

こんなの病み付きになるに決まってんだろ！　いい加減にしろ！　まして長良の場合は大きさ良し形良しの美乳なんだぞ!?　これに勝てる男なんざいねえよ!!　いたとしたらゲイだよ!!　いや別にゲイが悪いとかそういう訳じゃないけど!!

「し、指揮官って……物好きだね……♡」

「物好き?」

もにゅもにゅもにゅっ♡

「んぅっ♡　だ、だってっ……女の子の胸を触ろうとする男の人って、筋肉フェチくらいしか思いつかないから……」

「筋肉フェチ?」

むにゅむにゅむにゅっ♡　ぐにゅぐにゅっ♡

「んぁっ♡」

（指揮官、手つきがいやらしいよぉ……♡　ただ胸を触られてるだけなのに、何だかムラムラしてきちゃった……♡）

そうか。俺が長良のおっぱいを揉んでいる状況は、現実世界で言えば「女が男の胸板を触っているようなもの」ということは理解していたが……長良は俺がそういう趣味の人間だと思ったのか。

確かに、俺の認識でも男の胸を触る女と言えば筋肉フェチしか思い浮かばないな。だとしたらやっぱりＫＡＮ―ＳＥＮ達のおっぱい揉み放題ってことじゃね!?　いくら胸触っても筋肉フェチとしか思われないなんて最高じゃねえか!!

もにゅっもにゅっ♡　ぐにぐにっ♡　ぐにゅうっ♡

「んっ、ううっ♡　あっ♡」

正直揉むだけじゃ物足りない。今すぐむしゃぶりつきたい。綺麗な桜色の乳首に吸い付きたいし、何なら顔を思いっきりうずめてぱふぱふしてもらいたい。

でも長良にはあくまでも「揉ませて」って言っただけだしなぁ……流石にこれ以上を求めたら長良でも怒り出しそうだし、そろそろ自重した方が良いか？

でもまだ揉み足りない！　折角おっぱいを揉みまくれるチャンスがやって来たんだ！　すまん長良！　俺はまだまだお前のおっぱいを揉む！　もっと楽しませてもらう!!

もにゅんもにゅんっ♡　むにゅうううっ♡

「はぁっ……♡　やっ♡　あっ……くうっ♡」

（し、しきかぁん……♡　もしかして、誘ってるのぉ……？　だって、こんなエッチな触り方するんだもん……♡　あて、もう我慢出来なくなっちゃう……♡）

「長良姉～」
「うおっ!?」
「きゃっ!?」
い、今の声は阿武隈か？　くっ、良いところで邪魔が入るとは！　後三十分くらい揉み揉みしたかったのに……！
「魚雷天ぷら作ったから、一緒に食べ……長良姉、何してるの？　指揮官に胸なんか見せて」
「いや、これはだな……」
「……」
（あ、阿武隈ちゃん……どうしてこのタイミングで……！　上手くいけば、このまま指揮官とエッチ出来るかもって思ったのに……！　これじゃ生殺しだよぉ……！）

「……あ」
「あ？」
「阿武隈ちゃんの馬鹿ぁ～っ！」
ズダダダダダッ！
「えっ!?　な、長良姉!?　待って……！」
「……」
おのれ阿武隈め……！　次に顔を合わせた時、今日の邪魔をした罰としてお前のおっぱいと尻を揉みまくってやるからな……！
「……中断させられたのは残念だが、これで確信した。この世界にいる限り、俺はＫＡＮ―ＳＥＮ達にセクハラし放題ってことだ!!」
その気になればスキンシップだとか筋肉フェチで胸が気になるだとか適当に言い訳すればＫＡＮ―ＳＥＮ達のおっぱいが揉み放題！　ついでに尻も偶然を装えば揉み放題!!
この世界なら余程ヤバいセクハラかまさない限りはウハウハじゃねえか！　ここは天国だ！　パラダイスだ!!　おっぱい触りまくれるとか最高だぜ!!
「これからは今まで我慢してた分セクハラ三昧の日々を過ごせる！　堂々とπタッチも出来る！　イヤッホォーーーーーーーーーーーーウッ!!」

「あっあっ♡　指揮官っ♡　指揮官指揮官指揮かぁんっ♡　あての胸っ♡　あんなエッチな手つきで触られたらっ♡　ムラムラするぅっ♡　自分で抜く以上に感じてっ♡　指揮官の手ですっごく感じちゃってぇっ♡

んうっ♡　乳首っ、いつもより硬くなってるっ♡　んきゅぅっ♡　だ、ダメっ♡　手が止まらないっ♡　触って♡　もっと触ってぇっ♡　あての胸、揉みしだいてっ♡　千切れるくらいに鷲掴みしてぇっ♡

はぁっ♡　く、くるっ♡　もうきちゃうっ♡　指揮官に弄られたと思うとっ♡　すっごく興奮してっ♡　んあっ♡　こ、こんなんじゃないっ♡　指揮官はもっと強く掴ん

でっ♡　潰れるくらいに浸かんでぇっ♡
　あぁっ♡　イ、イくぅっ♡　ふわあああああああああああああああああああああああっ♡
　はぁ～っ、はぁ～っ……♡　い、いつも以上に気持ち良かったぁ……♡　今朝の下着姿の指揮官と、さっき胸を触られた感触……これだけで何回でもイけちゃうよぉ♡
あっ、またムラムラしてきちゃった♡　んんっ……♡」

「……」
（長良姉、遅いなぁ……いきなり逃げ出したかと思ったら、そのままトイレに入っちゃっ

て……もう一時間は経ってる。魚雷天ぷら、冷めちゃった……）

０４

「いや～長良のおっぱい最高だったなぁ～」
　あの柔らかくてフワフワな感触がまだ手に残っている。昨夜はそれ思い出しながら抜いたらすっげえ濃いのが出た。人生で一番最高のオナニーだったわ。いや～気持ち良かった！
　だが人間は欲求が叶うと次の欲求が湧き上がってくるものだ。長良の美乳を揉んだばかりだというのに、俺の脳と下半身は早速「次は誰にセクハラしよう」と考えてしまっていた。
　ぶっちゃけ抜き終わってスッキリした後は布団の中でずっとそーゆーこと考えてました（小声）。仕方ねーじゃん男なんてみんな変態なんだから。そこで明日の予定が非番のＫＡＮ―ＳＥＮに絞ってセクハラ相手を真剣に選んだ結果……
「見事エンタープライズに決定しました」
「決定？」
「いやこっちの話。今日はよろしくな」
「あ、あぁ。任されたからには、あなたの期待に応えてみせる」

（今日は下着じゃないのか……いやいや！　朝から何を考えているんだ私は!?　せっかく合法的に指揮官のそばにいられるのに、エロい目で見てセクハラだと訴えられたら私の艦生が終わってしまう！）

見た目良しスタイル良し性格良し。セクハラするにはうってつけの相手だ。長良の時とは違い、今はもう「ここが貞操逆転世界だ」という確信が得られたからな。昨日みたいに警戒する必要は無い！

「いつも出撃で忙しい中、非番なのに引き受けてくれて悪いな」

ぽにゅぽにゅっ♡

「んっ……気にしないでくれ。私とあなたの仲じゃないか」

うほっ良い乳！　上司が部下の肩を叩きながら激励する感じで、俺は堂々とエンタープライズの胸を触る。長良とはまた違う、張りがあって弾むおっぱいだなぁ……ずっと揉んでても飽きねえわ。

「珍しいな。指揮官がボディタッチしてくるなんて」

「うっ、そ、そうか？」

えっ、何か怪しまれてるような……いやいや落ち着け！　この世界の女は男に胸を触られても別に恥ずかしくないはず！　昨日の長良の発言を信じろ！

「だって今まで私達に対して至近距離まで近づくことは無かったじゃないか」

「……」

あーなるほど。この世界のエンタープライズにとっては、俺が近くまで寄って来てスキンシップ（という名のセクハラ）するという行動そのものが意外だったのか。

一昨日までの俺ってどんな奴だったんだ……？　いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない。とりあえずここは上手く話を合わせておいた方が良いな……

「……えっと、まぁ、俺達は共にセイレーンと戦う運命共同体みたいなもんだし、やっぱり体を使ったコミュニケーションも大事だと思ってさ」

「か、体を使った……」

「ん？　どした？」

「い、いやっ、何でもない！」

（指揮官……そんなエロい表現を使わないでくれ。思わずあなたが体を使って迫ってくる光景を想像しちゃったじゃないか……よ、よし。今夜はこの妄想で……♡）

「ふぃ～っ。ようやく半分終わった……」
「お疲れ様。終わった書類は私が整理しておく……ブフッ!?」
「助かる。いや～それにしても暑い……早くエアコン修理して欲しいぜ全く……」
　相変わらず扇風機だけでは全くと言っていいほど暑さをしのげていない。お陰で俺達は汗だくだし、エンタープライズは暑さのせいか顔を真っ赤にしている。
　それでも文句一つ言わず仕事を手伝ってくれるエンプラさんマジ良い人。だがセクハラはやめない！　最低？　鬼畜？　何とでも言え！　こんなパラダイスな世界で我慢なんて出来るか!!
「……お、おい。指揮官」
「何だ？　喉が渇いてるなら酸素コーラがそこに……」
「いや、そうじゃなくてだな。えっと……」
（い、言って良いのか？　しかし黙っているままでは私が眼福……♡　じゃなくてっ！　指揮官が恥をかいてしまう……）

「お～い？　エンプラさ～ん？」
「……せ、セクハラじゃないからな？　今から私があなたに話すことはセクハラじゃないからな!?」
「お、おう」
　急に慌ててどうしたんだよ。まるで昨日の綾波みたいな反応だな……ん？　綾波みたいな反応？　それって……
「……汗のせいで、下着が透けて見えている」
「……」
　……はは～ぁ、そういうことか。確かに俺は汗だくだし、そんな状態なら汗で上着が濡れてシャツ透けてても…おかしくないよな。つまりエンタープライズの立場で言えば、汗だくの女が透けブラで仕事してる状態な訳で。
　さっきからエンタープライズの顔が赤かったのは、暑さのせいじゃなくて俺のシャツを見てムラムラしてたからか。でもまぁ気持ちは分かる。俺だってエンプラさんのブラ見えてたらめっちゃ興奮するもん。
「いや～すまんすまん。言われるまで気づかなかった」
「その、出来れば上着を変えて欲しいのだが……あっ、き、着替えるなら退室する！」
「そうは言うけどな？　この暑さじゃ汗臭くなった上着が量産されるだけだぜ？　着替

えるだけ無駄無駄」

　これは半分嘘で半分本当。実際に上着を変えてもこの暑さじゃ洗濯物が増えるだけだしな。そんでもって赤面して慌ててるエンプラさん可愛い。珍しいからもう少しこのまま眺めていたい。

「そ、それはそうかもしれないが……うぅ……」

（ただでさえ汗ばんだ指揮官の破壊力は凄まじいというのに、それに透け下着が加わっている状態なんだぞ!?　指揮官は私にこの生殺し状態を耐えろと言うのか!?　新手の拷問だろうそれは!?）

「ぶっちゃけ着替えるより脱ぎたい」

「う〝ぇっ!?　いいいいいや流石にそれは」

「どうしてもダメか？」

　実際に汗でベタついた服ってすっげえ気持ち悪いんだよ。それに一昨日までシャツ一枚で過ごしてたし、今更ずっと上着羽織っての生活とか耐えらんない。

「あ、あうぅ……」

「なんならエンタープライズも脱げばいいじゃん。さっきから服が汗でベタベタして気持ち悪くないか？　俺の前だからと気を遣うことは無いぞ？」

　そうすれば堂々とエンプラさんの豊満なお胸とブラジャーを拝むことが出来るしな

！

「いや、その心遣いはありがたいが……私が脱ぐのはともかく、あなたが脱ぐのは……」

「あーもう我慢出来ん！　俺は脱ぐ!!」

「あっ!?」

ふはぁ～！　やっぱ暑い季節はシャツ一枚に限るな！　ん？　そういえばこれってセクハラならぬ逆セクハラになるのか？　いやでも俺なら女の子が脱げば大喜びするし大丈夫だよな。我ながらすっげえガバガバ理論だけど。

「……ごくっ♡」

（おぉ……下着姿の指揮官が目の前に……って何をガン見しているんだ私は!?　目をそらせ！　鋼の意志で耐えなければ！）

「ほらほら～エンタープライズも脱げよ～。こんなに汗で湿ってるぞ～？」

むにゅんむにゅんっ♡

さっきも触ったけどやっぱ柔らけえ～！　どうしてＫＡＮ―ＳＥＮ達はこうも素晴らしいおっぱいをお持ちなんだ!?　え？　貧乳組？　大丈夫！　俺は巨乳から貧乳までバッチコイだから！

「あっ……た、確かにそうだが……って指揮官！　その姿で近づくのは……その……」

（あ、あわわわっ!?　指揮官が、下着姿の指揮官が……よく見ると乳首が透けて……だか

らどうしてそっち方向のことばかり考えるんだ私の脳はッ!!）

「脱ぎなって～」

「わ、分かったっ！　分かったからその恰好で迫らないでくれ……！」

（私の鋼の意志が壊れるからぁッ!!）

「やっぱ脱ぐとだいぶ違うよな～」

「そ、そうだな……」

（指揮官を直視出来ない……え、エロ過ぎて……）

俺とエンタープライズはそれぞれシャツ、ブラ丸出しの状態で残りの仕事を片付けて

いる。いや～眼福眼福！　エンプラさん意外と可愛いブラしてるんすね～。
「な、なぁ指揮官。そろそろ上着を着ないか？　もう乾いたと思うが……」
「まだ脱いで十五分も経ってないんですがそれは」
「うぅ……」
（ただでさえ暑くて頭が回らないのに、隣には汗で肌を濡らす下着の指揮官……く、くぅっ……ムラムラする……♡）
　うろたえてるエンプラさん可愛いなぁマジ萌えるわぁ。でもそれだけで満足する俺じゃない。さっきからブラ丸見えのエンプラさんが隣にいるせいで俺もムラムラしてるんだわ。という訳で早速……
「にしてもそのブラ可愛いな」
　むにゅんっ♡
「んっ……そうか？　あなたは本当に珍しい人だな……女の下着に興味を抱くなんて」
　えーっと、現実世界で言えば男の下着に興味を持つ女ってところか。珍しい……のかね？　彼女いない歴イコール年齢の俺にはイマイチよく分からないが。
「それに胸もいい感じじゃないか。やっぱり鍛えてる女は違うな！」
　もにゅもにゅもにゅっ♡
「あっ……♡」

（な、何だか手つきがいやらしいような……んっ♡）
うっひょーっ！　やっぱ服越しで触るより生おっぱいが一番だ！　ブラの感触が少し邪魔だがそんなの関係ない！　おっぱいサイコー!!
「やっぱり日頃の鍛錬の賜物なのか～？」
むにゅんむにゅん♡　ぐにぐにっ♡
「はぁっ……♡」
（も、もしかして指揮官は誘っているのか？　さっきから下着姿で誘惑してくるし、今だって妙にねっとりしたボディタッチを……♡　こ、これはそういうことか？　そういう意味だと取っていいのか!?
いや、そうに違いない!!　でないと、わざわざ女の前で服を脱ぐようなことはしないはず♡　絶対に誘っているんだ……♡　据え膳食わぬは女の恥と言うし、ここまでさせておいて誘いに乗らない方が失礼だよな……♡）
「……し、指揮官っ！」
「うおっ!?」
い、いきなりエンタープライズに押し倒された!?　まさかおっぱい揉み過ぎて怪しまれたか!?　それとも「気安く触り過ぎだ」と怒ったか!?
「え、エンタープライズ……？」

「はぁっはぁっ……♡　し、指揮官……♡」
「……ゑ？」
あ、あれれ～？　何だかエンプラさんの目がハートになってるような～？　ま、まさか俺……エンプラさんをその気にさせちゃった？
「あなたが悪いんだからな……♡　あなたから誘ってきたんだからな……♡」
えっと、もしかして俺ヤバい？　貞操の危機!?　処女喪失ならぬ童貞喪失の危機なのか!?

バッチコイだぜ!!　むしろエンプラさんのような美人とセックス出来るとかご褒美

だろ!!　来いよ!!　カモンッ!!

０５

「本当にすまなかった指揮官っ!!」

「へあっ!?」

現在、俺はエンタープライズから土下座されている。それはもう綺麗に顔と両手を床にピッタリくっ付けた土下座をされている。

ここまで美しく整った土下座は見たことが無い。これでエンタープライズの姿がトップレスでパンツを穿いていないことさえ除けば完璧と言っていいだろう。ついでに俺もほぼ全裸の状態だ。

え？　どうしてこんなことになってるかって？　というか一番大事なシーンをさっさと見せろって？　分かった分かった。俺がエンタープライズに押し倒された直後まで遡ること数十分前……

「はぁはぁはぁはぁ♡」
うおっ!?　エンプラさん思った以上にすげえ力だ!?　元から抵抗する気は無いけど、仮に振りほどこうとしても無理だろ！　ＫＡＮ―ＳＥＮって艤装付けてない時は見た目通り女性並の力しか出せないんじゃなかったのかよ!?
「指揮官……ちゅっ♡」
「んむっ!?」
「ちゅううっ♡　ちゅぷっ、じゅるっ♡　ちゅるるるっ♡　れろれろ……♡」
うおおっ！　俺エンプラさんにディープキスされてる!!　しかも初っ端から強引に舌ねじ込んで来た!?　あっ、エンプラさんの柔らかい舌気持ちいい……
「ちゅるっ♡　んむぅっ♡　じゅるじゅるっ♡」
（いきなりキスして口内を攻めても抵抗しないなんて……これはもう合意の上だよな♡
完全に和姦だよな♡）

「じゅううううっ♡　んくっ、んむぅっ♡　れろれろっ♡　じゅるっ♡」
（指揮官の舌、すっごく柔らかい……♡　それに唾液も美味しい……♡　あぁ私、指揮官とこんな深い口づけを……♡）
うあぁっ、舌吸われて……！　しかもさっきから歯茎とか口の中を乱暴に舐められまくってるし、それどころか俺の唾液さえ飲み干そうとしてくる……！
それだけじゃない！　舌をねっとり絡められて、そのせいでエンタープライズの唾液が口の中に流れ込んできて……ヤバいただでさえ興奮してたのに余計ムラムラしてきた!!
「ぷはっ♡」
あ、やめちゃったのか。もっと続けたかっ……
「はぁはぁ……♡」
カチャカチャカチャ……ズルゥッ!!
っておーーーーい！　キス終わったかと思ったら躊躇（ちゅうちょ）なく俺のズボンをパンツごと降ろしやがった!?　エンプラさんマジで俺を食う（性的な意味で）ことしか考えてないだろこれ!?
「こ、これが指揮官の……♡　大きくなっているということは、私のキスで興奮したのか……？」

ザッツライ!!
「じゃ、じゃあ準備はいらないな……もう我慢出来ないっ♡」
準備？　現実世界で言う濡らすことか？　そりゃ俺のマイサンは既にバッキバキだから準備なんていらないが……
いやちょっと待て。エンプラさんって処女……違った。この世界では童貞か。どっちにしても初めてだよな？　いきなり突っ込んだら痛いんじゃ……
「んぅっ!!」
ずぷぅっ♡　ぬぷぷぷ……♡
うおぉぉぉっ!?　一気に奥までいったあぁぁぁっ!?
「はぁっ……♡　わ、私……指揮官と繋がってるっ♡　一つになってるぅっ♡」
「え、エンタープライズ？　大丈夫か？　痛くないか!?」
「指揮官指揮官指揮官っ♡」
ずぷっずぷっ♡　ずちゅずちゅずちゅっ♡
「全然聞いてないしぃーーーーーーーっ!!」
「あっあっあっ♡　指揮官っ♡　好きっ♡　しゅきぃっ♡」
ぐちゅぐちゅっ♡　ごちゅごちゅごちゅっ♡
「くぅっ……!」

う、うぁ……っ！　エンタープライズの膣内（ナカ）、すっげぇ……っ！　ヌルヌルしてて、あったかくて、俺から精を絞り出そうとグニュグニュ蠢（うごめ）いて……！　オナニーとは全然違う……！

そ、そうか！　これだけヌルヌルだから処女卒業の痛みが半減されたのか!?　確か入念に濡らしたり準備したら余り痛くないとかそんな話があったような……このグチョグチョ具合なら納得だわ!!

ぱんぱんぱんぱんっ♡　ずっちゅずっちゅずっちゅずっちゅ♡

「はぁはぁっ♡　し、指揮官のがっ♡　私の中で暴れてぇ……っ♡」

「え、エンタープライズ……もうちょっと手加減して……！」

「んっあっ♡　指揮官指揮官指揮官っ♡」

ぐりぐりぐりっ♡　ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡

「だから人の話を……っぐ！」

や、ヤバい！　これヤバすぎるっ！　子宮口にグリグリ押し込んできて……っ！

「あっ、だ、ダメっ♡　もうイくっ♡　イっちゃうっ♡　ふわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ♡♡♡」

「は？」

「はぁっ、はぁっ……♡」

（さ、最高だったぁ……♡）

「……」

え、何？　どゆこと？　俺まだイってないんだけど？　もしかしてエンプラさん一人でイっちゃった？

「し、しきかぁん……♡」

いや「しきかぁん♡」じゃないから。てっきり俺の方が搾り取られると思ったのにエンプラさんが勝手にイって満足するのは想定外なんスけど。

ひょっとしてあれか？　童貞だから相手のペースが分からず自分だけ盛って先に果てたパターンか？　それともエンプラさんが早漏……流石にそれは無いか。

女の子には絶頂の限界が無いという話を聞いたことがあるし……まさか、これも貞操逆転世界の影響か？　女の方が先に限界がきて、男の方が長続きするってことか？

そういや俺、昨日オナった後もスッキリはしたけどすぐに次のセクハラ相手のこと考えてたもんな……いつもならそのまま賢者になってぐっすり寝るのに。あれってそういうことだったのか？

「……」

何にせよ、俺はまだ満足出来てないんだ。という訳でエンプラさん、満足そうな笑みを浮かべているところ申し訳無いが……

「……ふんっ！」
　ずぷぅっ♡
「ひうっ♡　し、指揮官!?」
　俺がイくまで付き合ってもらうからな！
　じゅぷじゅぷじゅぷっ♡　ずちゅずちゅずちゅっ♡
「ひあああっ!?　や、やめっ♡　私っ、イったばかりっ♡　イったばかりだからぁっ♡」
「うるさい！　自分だけ勝手に満足するな！　俺はまだイってないんだよ!!」
　ずぷずぷずぷっ♡　ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡
「ああぁぁぁっ♡　そこグリュグリュするのダメぇぇぇっ♡」
（い、イったばかりなのにこんなことされたらっ♡　おかしくなるっ♡♡　頭おかしくなるからぁっ♡♡）
　ごちゅっ♡　ごちゅっ♡　ごちゅっ♡
「あぁっ♡　お、奥っ♡　奥にゴリゴリってぇっ♡♡　む、無理っ♡　もう無理ぃっ♡♡」
　さっきので萎えかけたけど、俺のマイサンはすぐに硬さと大きさを取り戻してくれた。だってエンプラさんの膣内（ナカ）名器すぎんだろぉっ!?　突くたびにちんこから脳に快

感が飛び込んでくる!!　ヤバい勝手に腰が動くぅっ!!
　ぐちゅっぐちゅっ♡　じゅぷっじゅぷっ♡
「あっあっあっあっ♡♡　し、しきひゃんっ♡　しひひゃぁんっ♡」
　エンプラさんのアへ顔いただきましたぁっ！　でも、俺もそろそろイきそう……！
「え、エンタープライズっ！　膣内(ナカ)に出すぞっ！」
「ふやぁっ♡　あぁっ♡　んあぁっ♡　あああぁぁっ♡」
　全然聞いちゃいねぇーっ！　もはや目線が定まってないし涎垂らしまくってる！
ヤバいすっげえ興奮する!!
「くあああああぁぁぁ……っ!!」
　ビュクビュクビュクッ！　ビュルルルルッ！　ドプドプゥッ！
「ふやあああああああぁぁぁぁっ♡♡　で、でへるっ♡　しひひゃんの精子(へーひ)でふぇるぅぅぅぅっ♡♡♡」

「……」
「……」
や、やっちまったあああああああああああああああッ!!　思わず膣内出ししてしまったあああああああああああああああああッ!!
やべえよ……これはガチでやべえよ……！　エンプラさんとの汗だっクスに夢中で、後のことまで考えてなかった……！
（わ、私は……なんてことをしてしまったんだ……ッ！　己の欲に負けて、指揮官を……今まで互いに信頼を築き上げてきた指揮官を、襲ってしまうなんて……ッ!!）
「……え、エンタープライズ。その、すま……」
「本当にすまなかった指揮官っ!!」
「へあっ!?」
……こうして冒頭へと戻る訳だ。俺が思いっきり膣内出ししてしまったのに、あろうことかエンタープライズの方から謝ってきたんだ。綺麗な土下座付きで。

「指揮官……私は女として、人として……決して許されないことをしてしまった。こんなことで罪を償えるとは思っていないが、それでも謝罪させてくれ。本当にすまなかった……！」
「いや、あの……」
「私はもうＫＡＮ―ＳＥＮではいられない。あなたの信頼を裏切った以上、ここに残ることも許されないだろう」
「え、エンプラさん？　ちょっと……」
「今からヨークタウン姉さんとホーネットに私が犯してしまった罪を話しに行く己の罪を身内に隠しておく等ということが許されるはずが無いいやそれだけじゃダメだ全ＫＡＮ―ＳＥＮにも話しておかなければその上で然るべき機関によって罪を裁いてもらうどんな刑であろうと私は受け止めるそれだけのことをしてしまった自覚はある出来ることならあなたのご家族にも謝罪させて欲しいが今の私はそんな贅沢を言える立場では無い指揮官本当にすまなかった謝って許してもらおう等とは思っていない幸い今日は安全日だから妊娠することは無いだろうが念の為にアフターピルを飲んでおく避妊すらしなかった私は本当に救いようが無いでも安心してほしいあなたにこれ以上の負担をかけるつもりは無いもし私を許せないというなら今すぐ憎しみをぶつけて欲しい私はそれを受け止めるむしろ受け止めて当然だそれだけのことをしてしまったのだ

から終戦しても付いていこうと心に決めていた人を強姦する等言語道断だ私は自分が許せない欲望に負けて大切な人を傷つけてしまっただなんてそれもこんな最低なことをしてしまったあなたが私を秘書艦に選んでくれたのに私はその信頼に応えられなかったきっとヨークタウン姉さんとホーネットからも責められるだろうでも言い訳はしないたとえ姉さん達に叩かれたり失望されたとしてもそれを受け止める覚悟は出来ているいや全ＫＡＮ―ＳＥＮからも罵詈雑言の嵐だと思うでもそれが私の罪なんだ自分で自分を殴りたいと思うほどに許されない罪」

「落ち着けエンタープライズッ!!」

「……指揮官？」

　ハイライトを消した目で息つぎすることなく延々と喋り続けるのやめて！　すげえ怖いから！　下手なホラー映画よりよっぽど怖いから!!　いやそんなことより!!

「俺の方こそ後先考えず膣内（ナカ）出ししてすまなかった！」

「そ、そんな!?　どうしてあなたが謝るんだ!?　悪いのはどう考えても私じゃないか!!」

「いや、あんな誘惑するようなことすれば誰だってムラムラするだろ？　明らかに俺が原因じゃん」

　冷静に思い返してみれば、さっきまでの俺は調子に乗っていたこともあってエンタープライズに襲われる可能性を全く考慮していなかった。

現実世界で言えば女が脱いで男にちょっかいかけたようなもんだからな。そりゃ襲われても文句言えんわ。

「だが、それでも女が男を襲ってしまった時点で……」

うん。エンタープライズならそう考えると思った。しかし俺としてはむしろ役得で、膣内（ナカ）出ししてしまったこと以外は本当に気にしてないんだが……ここは俺から提案を出してみよう。出来る限りお互いＷｉｎ―Ｗｉｎな感じの。

「……分かった。じゃあノーカンだ」

「え？」

「今回のことはノーカンだ。最悪、妊娠さえしなければ何も問題無い訳だ。俺は別にエンタープライズを訴えるつもりは無いし、さっきのことも気にしない。だからノーカンだ！」

「の、ノーカンって……」

「実際、俺も気持ち良かったしさ」

「ひゃうっ♡　み、耳……♡」

耳元でささやくように話しかける。こうなったら自分の立場を最大限利用しよう。こういう状況の場合、現実世界なら男より女の方が優位になるが……この世界ならまさしく俺の方が優位に立てる。

だから俺が気にしないなら、エンタープライズがやったことは問題にならない。むしろ合意の上での行為となる。原因を作った俺が許す立場ってのもアレだが、この際そんなこと言っていられない。
「あ、でもピルだけは飲んでおいて欲しい。流石に妊娠したらノーカンどころの騒ぎじゃなくなるからな」
「そ、それは当然だが……」
「……今度はちゃんと避妊した上で、またヤらないか？」
「ふえっ!?」
「お互い戦いばかりの毎日だと溜まるだろ？　だからさ、もしエンタープライズが良ければ……な？」
「……」
（し、指揮官……それは性にだらしないと思われても仕方ない発言だぞ？　し、しかし、いつでも指揮官の体を味わえるというのも……ごくっ♡）
「……本当に、良いのか？」
「ん？」
「そ、そんなことを言われてしまったら……歯止めが効かなくなるぞ？　悲しいことに私は女である以上どうしても性欲が溜まりやすい。あなたがそんな風に言ってくれる

なら……その好意に甘えてしまうぞ……？」

「だから気にすんなって。その代わり、俺が別のＫＡＮ―ＳＥＮとヤってても気にしないで欲しい。エンタープライズ以外にも性欲を溜めたＫＡＮ―ＳＥＮは沢山いるだろうからな。

仮に他のＫＡＮ―ＳＥＮが俺に対してエンタープライズと似たようなことをしてきたり、そういう雰囲気になったとしても……俺は拒絶しないつもりだ。指揮官という立場である以上、一人だけをえこひいきする訳にはいかないからな」

……あぁ、たった今ビッチの気持ちが分かったわ。それっぽい言い方で誤魔化してるつもりだったけど、自分で言っててビッチ臭半端ない発言だと思ったもん。

でも仕方ないだろ！　せっかくこんな世界に飛ばされたんだ！　まだまだ他のＫＡＮ―ＳＥＮにセクハラとかしてみたいんだよ!!

どうせ誓いの指輪だって一人に限らず複数のＫＡＮ―ＳＥＮに渡してもＯＫと認められてるし、ちょっとくらいハメを外したって良いじゃないか!!

「……」

（つまりセックスフレンドのような関係になってくれということか。欲を言えばもっと強い絆で結ばれた仲が良かったが、今の私は贅沢を言える立場では無い。

むしろ私が強姦したことを許してくれた上に、定期的に体を重ねることを許可してく

れたと喜ぶべきか。普通なら私は即座に逮捕されていてもおかしくないからな……）
「……分かった。その、これからは……私が溜まった時、お願いしても良いか？」
（結局、私は性欲に勝てない変態なのか……でも仕方ないじゃないか。周りに女しかいない状況で、一人だけ男がいれば……どうしてもそういう目で見てしまうんだ。情けないことだが……）
「あぁ。逆に俺が溜まった時はよろしく頼むわ」
（それはむしろご褒美……♡　い、いけないっ！　さっきあんなことをしてしまったばかりだというのに、少しは反省しろ私っ!!）
　まさかエンタープライズに襲われたお陰で、彼女といつでもセックス出来る関係まで持ち込めることになるとは……やっぱこの世界最高だわ！　この調子で他のＫＡＮ―ＳＥＮ達とも……あ、あれ……？
「……うっ」
（きゅ、急に頭がフラフラして……）
「……エンプラさん。そういや俺達……一時間近く、汗だくでセックスしてたよな……クソ暑い部屋で、それも水分補給無しで……」
「……あぁ」
「なんかフラフラするんだけど……これって、まさか……」

「……脱水症状、だな」

「「うう……」」

……この後滅茶苦茶スポーツドリンク飲んだ。汗だっクスをする時は必ず水分補給を忘れずに。危うくぶっ倒れるところだったお兄さんとお姉さんとの約束だ。

ちなみにスポーツドリンクは偶然近くを通りかかったベルファストに持って来てもらった。もちろん流石に全裸ではなく汗でベタベタの服を着直して応対したが。

０６

「う～む……」

俺は倉庫にしまっておいたメンタルキューブと向き合っている。我ながら結構溜め込んでいたんだなと改めて思った。いつもキューブを拾っては数を数えず倉庫に突っ込んでたからな。

それにしても保有する資材の量は元の世界と比べて全く変わっていないのか。以前の俺も、この俺と同じようにいつの間にか資材を溜め込むタイプだったのだろうか。

いや、下手に燃料と資金が激減していて大騒ぎするよりは遥かに良いんだけどさ。え？　ＫＡＮ―ＳＥＮへのセクハラはどうしたんだって？　さっき上から「新たな建造を行い戦力を強化せよ」という命令が来たんだよ。

全く、こういう時に限って……ちょっとは空気読んでくれよな～。でもまぁ建造すりゃ良いだけだしすぐ終わるだろ。パパッと適当にこなしてＫＡＮ―ＳＥＮ達にセクハラを……何ッ!?

「足りない、だと……!?」

俺は衝撃の事実に気がついてしまった。通達書に記載されているノルマと照らし合

わせたら、俺が持っているキューブの量では足りないことが判明してしまったのだ。

嘘だろ……!?　命令を無視する訳にはいかないし、かといってキューブが足りないんじゃ建造出来ない……畜生!!　どうしてこのタイミングでこんな命令出してくるんだよ!!

「……仕方ない。明石の店に行くか」

幸い、ダイヤもそれなりに溜め込んである。これだけあるなら何とかノルマを達成するだけのキューブは確保出来る……はずだ。あぁ、貴重なダイヤが……せっかく溜めておいたダイヤがぁ……!

「いらっしゃいませにゃ～」
「……おう」
「ど、どうしたにゃ指揮官？　随分と元気が無いにゃ」
（あ、汗だくの指揮官……くぅっ！　エロいにゃ！　今すぐその汗をペロペロさせて欲しいにゃ……って何考えてるにゃ私！　目の前に指揮官がいるのに！　男は女の視線に敏感と聞くし、自重するにゃ私!!）
　元気なんか出る訳無いだろ。しばらく倉庫にいたせいで汗が止まらないわ、ＫＡＮ―ＳＥＮにセクハラする時間が無くなるわ、ダイヤが羽根を生やして飛んでいくわ……既に俺のコンディションは真っ赤だよ。上に対する好感度が失望に変わったとこだよ。
「……キューブを売ってくれ。ついでに高速建造材も」
「あ、う、うん。どれくらい？」
「まずはキューブが……それで建造材は……」
「う～ん……それだと、ダイヤはこれだけ貰わないといけないにゃ」
「うぐっ、やっぱ高いな……」
　明石から提示されたダイヤの量を見て、俺はますますテンションが下がる。値引き交渉したいところだが、明石がその手の相談に応じてくれたことは一度も無い。
　無駄にゴネて時間を無駄にするくらいなら、ここは諦めてさっさとダイヤを支払った

方が良いだろう。でないとますますセクハラする時間が無くなる。
　いや別にセクハラくらいいつでも出来るのだが、どうせなら時間の許す限り色々なＫＡＮ―ＳＥＮのおっぱいとか尻を堪能したいだろ？　男なら分かるだろこの気持ち!!
「……」
（指揮官、露骨に顔をしかめてるにゃ……こっちも商売とはいえ、男の人の悲しげな顔を見るのは罪悪感が……そ、それなら……）
「……割引して欲しいにゃ？」
「当たり前だろ」
「じゃ、じゃあ……胸を触らせてくれたら十パーセントオフに……」
「……は？」
「……あっ、ち、違っ」
（な、何をトチ狂ったこと言ってるにゃ私は!?　暑さで頭がおかしくなったのかにゃ!?
　これって完全にセクハラだにゃ!!）
　いきなり明石が変なことをのたまい出した。俺の胸を触りたいってお前……いや待てよ？　ここは貞操逆転世界。言わば女が男に対してムラムラしまくっている世界だ。
　実際に昨日、俺がシャツ一枚でいたらエンタープライズに襲われたくらいだし断言しても良いだろう。この状況、上手く利用出来ないか？　女の武器ならぬ男の武器を使う

感じで。
「ご、ごめんなさいにゃ！　今のはほんの冗談で……」
「別に良いぞ」
「許して欲しいにゃ！　どうか訴えるのだけは……へ？　今、何て言ったにゃ？」
「だから別に良いぞ。割引してくれるならな」
「……指揮官。あの、本気で言ってる……？」
「あぁ。別に減るもんじゃないし」
うわぁ俺ビッチだ。マジでビッチだわぁ。でも上がこのタイミングでめんどくさい命令出してくるのが悪いからね。俺は悪くないこれっぽっちも悪くない、うん。
仮にエンプラさんの時みたく明石に襲われたとしても俺にとっては役得だし無問題（モウマンタイ）。むしろ大歓迎ですはい。
「……」
（えっ？　もしかして千載一遇のチャンス？　誰もが憧れた指揮官のおっぱい触れるチャンスにゃ!?　で、でもっ、私が触った瞬間に慰謝料を請求してきたりしないかにゃ……？）
「……さ、触った後で怒らない？」
「怒らない。信用出来ないなら誓約書でも何でも書くし、ボイスレコーダーで俺の発言

を証拠として録音しておいても良いけど」
「……ごくっ♡」
（ど、どうやら指揮官は本気みたいだにゃ……だって、冗談ならそこまで言わないだろうし……）
「えっと、じゃあ……失礼しますにゃ」
　さすっ……
「ん……」
「あっ……♡」
（さ、触ってる……私、指揮官のおっぱい触ってるにゃ……♡　少し湿った汗と、男らしい胸板の感触が……♡）
　さすさすっ……
　女の子みたいに喘ぐようなことは無いが、こうもいやらしい手つきで触られると……ちょっとくすぐったいな。
「はぁはぁ……♡」
　さすさすっ……さすさすっ……
（服越しとはいえ、指揮官のおっぱいが明石の手に……♡　今まで妄想するしか無かったけど、まさか本当に触れる日がくるだなんて……♡）

「あ、もっと割引してくれるなら直接触っても良いぞ？」
「にゃっ!?」
（し、ししししし指揮官!?　マジで言ってるにゃ!?　服の上からでもエロいのに、直に触れるだなんて……!!）
「……に、二十パーセントオフでどうにゃ？」
「もう一声欲しいかなぁ～？」
　自分で言うのもアレだが何か援交臭くなってきたな。でも全てはダイヤ節約の為！
　ついでに明石のムラムラを発散させてやる為だ！
「うぎゅぅ……だ、だったら五十パーセントオフでどうにゃ!?」
「よしのった！」
　半額とか随分と太っ腹じゃないか！　どうぞ思う存分揉みまくってくれ！　そう考えながら俺は明石の前でシャツを思いっきりまくってやった。
「あっ……♡」
（お、おっぱいっ！　指揮官の生おっぱいにゃ!!）
「ほらほら。触らないのか～？」
「……にゃ、にゃあっ！」
　ぐわしっ！

「うおっ!?」
「はぁはぁはぁはぁっ♡」
（服越しでは分からなかった地肌の感触が……♡　こ、これが男の人のおっぱい……♡）
　ぐにぐにぐにぐにっ！
　こ、こいつ力任せに鷲掴みにしてきたぞ!?　どんだけ俺の胸に夢中なんだよ……って俺も長良やエンプラさんのおっぱい揉みしだいてたし人のこと言えねえわ。
「おっぱい……♡　指揮官のおっぱいっ……♡」
　むにむにむにむにっ！
（女の胸とは違う、この硬さ……♡　あぁっ、エロ過ぎて鼻血出ちゃいそうだにゃ……♡
　そ、それにっ、お腹の奥がキュンキュンして……♡）
　ぐにっぐにっぐにっ！
（あぁっ♡　興奮してきちゃったにゃ……♡　これで一発抜いたら凄く気持ち良さそうだにゃぁ……♡）
「ね、ねぇ指揮官……♡」
「ん？」
「その……半額とは言わず、無料（タダ）にするから……抜いてくれないかにゃ？　……ハッ!?」
（い、今、私とんでもないこと言わなかったかにゃ!?　おっぱいのエロさでムラムラし過

ぎて洒落にならないことを口に出さなかったかにゃ!?　ど、どうしよう!?　流石に今のは指揮官にドン引きされ……）

「良いぞ」

「」

（えっ、明石の耳おかしくなっちゃったのかにゃ？　指揮官がオッケーって言ってくれたような幻聴が……）

「無料（タダ）にしてくれるんだよな？　そういうことならお安い御用だ！」

（幻聴じゃなかったにゃーーーーーーーっ!?）

　まさか明石の口から「抜いてくれ」という言葉が飛び出してくるとは思わなかった。俺でさえ流石にそれは自重したというのに……え？　セクハラしてる時点で全然自重出来てない？　アーアーキコエナーイ。

「……本当に良いの？」

「男に二言は無い」

「本当の本当の本当に!?」

「本当だって。なんなら希望も聞くぞ？　手で抜くか？　それとも口で抜くか？」

「……」

「……明石？」

「……手でお願いします、にゃ♡」

なんだ。てっきり「どうせ抜いてくれるなら本番がいい！」とか言い出すと思ったのに。肝心なところでヘタレだなぁ明石は。

「最初っからビショビショだな。そんなに俺の胸で興奮してたのか～？」

ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

「にゃあああっ♡　し、指揮官っ♡　激しっ♡」

（あっあっあっ♡　指揮官に手マンっ♡　手マンされてるにゃあっ♡）

じゅぷじゅぷじゅぷっ♡　ぬちゃぬちゃっ♡

「あああぁぁっ♡　そ、そんなかき乱すようにぃ……♡」
「だってスッキリしたいんだろ～？　ほれほれ～」
　ぐりぐりっ♡　ぐりぐりっ♡
「ふにゃあああああっ♡♡　そこっ、敏感♡♡　敏感なところだからぁっ♡♡」
　指でクリトリスを少しグリグリしてやっただけでこの乱れっぷりだもんな。男で言うなら亀頭を弄くり回されてるような感じか？
「んぅっ♡　あぁっ、にゃあっ♡　はぁっ♡」
「あ～あ、涎まで出しちゃって。見た目はちんまいのに表情と股の濡れ具合は立派なオトナだもんなぁ」
　ぐちゅっぐちゅっ♡　ずぷずぷずぷっ♡
「いぅっ♡♡　しひひゃんっ♡　もうダメっ♡　これ以上激しくしゃれるとぉ……っ♡」
「ん？　イきそうなのか？」
「んひゅぅっ♡」
　必死に首を上下に振る明石。言葉のろれつも回ってないみたいだし、本当にイく寸前なんだろう。だったらお望み通りイかせてやらないとな！
「そうか。ならそのままイっちまえ！」

ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡　ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡

「ひにゃあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ♡♡♡」

プシャッ！　プシャアアアアアアアッ！

うわっ、すげえ潮吹き！　女の子のリアル潮吹きとか初めて見たわ！　クッソエロい!!　エンタープライズの時はお互い汗だっクスでじっくり観察する余裕が無かっただけに新鮮!!

「はぁ～っ♡　はぁ～っ♡」

「お～い。大丈夫か～？」

「……しゅ、しゅごかったにゃあ♡」

（自分でスるのとは全然違うにゃ……♡　指揮官に手で抜いてもらえる状況だけでも凄く興奮するのに、あそこまで激しくかき回されるなんて……♡）

「そりゃ良かった。じゃあ約束通り、無料（タダ）でキューブと建造材を貰っていくぞ？」

「ど、どうぞにゃあ……♡」

「サンキュー！　あ、そうだ。今回は割引してもらう為だったが、そんなこと関係無しに……」

「……？」

「抜いて欲しかったらいつでも言ってくれよ？」

「はにゃっ……♡」

エンタープライズにやった時と同じように、明石の耳元でボソリとささやく。なんかもうビッチ通り越して慰安婦じゃねこれ？　いや男だから男娼か？　なんにせよＫＡＮ―ＳＥＮ達とヤりまくれるなら大歓迎だけどな!!

「じゃあな～」

あーエロかった。あんな乱れた姿見せられたお陰で俺のマイサンもバッキバキだわ。後でエンプラさんに連絡して……おっと。その前にスポーツドリンクとゴム買って来ないとな。

「……」

「ねぇ明石。少しは夕張の話を……ダメだ全然聞いてない。不知火、明石は一体どうしたんだ？　さっきからずっとあの調子なんだけど……」

「妾にもうされましても。いよいよ本物の大うつけとなったのでございましょうか……」

「……」

（指揮官の、さっきの発言って……そういうことにゃ？　いつでも明石のことを抜いてくれるってことかにゃ……？）

「……ふにゃあ♡」

（こ、今度また指揮官が来店した時も……♡　いや、むしろ私の方からダイヤを持って行って……♡）

０７

「あづいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ!!」

いきなり男の見苦しい叫びを聞かせてしまいどうもすみません。でもさぁ本当に暑いんだよ。未だにエアコンの修理業者が来てくれないんだよ。

何でもエアコンがぶっ壊れたのはうちだけじゃなく電話が殺到しているらしい。後数日で来るっつー連絡は嘘だったのかよ！　いつになったらこの暑さから解放されるんだよ!!

「……あっ!?　書類に汗が垂れた!!　また書き直しじゃねえか畜生ッ!!」

ダメだ暑さでイライラして仕事どころじゃねえ。こんな状況がまだ続くとか耐えらんねえ。書類仕事どころかＫＡＮ―ＳＥＮ達の指示にも影響が出てしまう。

つうかＫＡＮ―ＳＥＮ達もあまりの暑さでダウンしてる奴が大勢いるんだよな。非番の奴はまだマシだが委託組や出撃組はかなり参っているらしい。いくら注意してもおっぱい丸出しで帰って来る奴が大半だ。

しかしここが貞操逆転世界だと気づいてからは「服を着ろ」と注意はしない。俺としても眼福だしこのクソ暑い状況で上着羽織れとか拷問に近いもんな。仕事とはいえ毎

日外へ出てもらってほんと申し訳無い。
「もはや上着どころかズボンさえ汗でベチョベチョだ……夜飯まで時間あるしシャワーで汗を流そうかね」
　このままグショグショの服で仕事とか気持ち悪くて無理だ。一旦シャワーでも浴びてサッパリするか。いつもなら夜飯食ってから風呂に入るが今日の暑さは半端じゃない。こんな状態で夜まで待てるか！

「今は饅頭達が風呂の準備をしてくれてる時間帯だし、俺の他に誰もいないだろ」
　普段なら時間帯によってＫＡＮ―ＳＥＮ達が入浴する『女湯』の時間と、俺が入浴す

る『男湯』の時間が明確に決まっている。しかし今は饅頭達による『準備中』の時間帯だ。

浴槽には湯が張られていないだろうがシャワーでサッパリするだけなら準備中でも問題無い。饅頭達の邪魔をするつもりは一切無いし、少しの間だけ隅でシャワーを浴びさせてもらうだけだからな。

俺は光の速さで服を脱ぎ、ズカズカと浴場に入った。そのままシャワーを浴びるつもりだったが、湯船を見ると何故か湯が張られている。あれ？　おかしいな……この時間帯なら湯船は空っぽのはずなんだが。

「もしかして、饅頭達が気を遣ってくれたのか……？　ま、何でもいいや！　湯が張ってあるなら遠慮なく浸からせてもらうぜ！」

そのままルンルン気分で湯船に入る。お～相変わらず温度調節が完璧だな。この熱過ぎずヌル過ぎない絶妙な湯加減が……

「はぁ～っ♪」

「……ん？」

何だ今の脳がとろけるような可愛い声は。思い当たるのは二人しかいないが……いやそれより今は浴場に俺一人しかいないはず。何故に女の子の声が……湯気でよく見えないな。確か向こうから聞こえて……

「やっと汗を流せたよ～！　これで隣に指揮官がいてくれたら最高なんだけど……」
「へ？」
「……ふぇ？」
　おっと湯気が晴れたと思ったら目の前に全裸の美少女が現れたぞぉ。一体こりゃどういうことなんだぁ？　俺ついに美少女を召喚する能力でも身に付けたのか……
　ってんな訳ねえだろ!?　伊１９!?　伊１９じゃないか!?　どうして伊１９がここにいるんだ!?　しかも素っ裸だし!?　おいおい今は準備中じゃなかったのかよ!?
「し、ししっ、指揮官っ!?　なんで……はうっ!?」
（はわっ、はわわわっ!?　は、裸の指揮官が目の前に……お、おっぱいがっ！　それにタオル巻いてないから……あうっ）
「……あ、鼻血出して倒れた。俺の裸を見たからか、それとも単にのぼせたか……多分前者だろうけど」
　綾波と同じ初心（うぶ）なタイプか……いや冷静に分析してる場合じゃない。いつからここにいたかは知らないが、このまま放置するのは流石にまずいな。
「事情は後で聞くとして、ひとまず外で涼ませた方がいいか……ちょっと背負うぞ？　んしょっと」
「んぅ……」

むにゅうっ♡

おほっ柔らかいおっぱいが背中に当たってる！　正直今すぐ揉みまくりたいが今は堪(こら)えて浴場の外に出る。

伊１９をゆっくり寝かせ、扇風機を近づけて涼しい風が当たるようにして……よし、こんなもんか。後は目が覚めるのを待つしかない。それにしても、まさか伊１９が先に入っていたとは思わなかったな。

この状況、現実世界なら俺が捕まってるところだ。ここが貞操逆転世界で助かったぜ……この手のハプニングは、現実世界だと冗談抜きで俺の人生が終了しかねないからなぁ……

「ん、んぅ……」

「お、気がついたか？」

一応ズボンとシャツを着直しつつ十五分ほど待っていると伊１９が目を覚ました。まだ意識が朦朧(もうろう)としているのか、辺りを見回している。

「……指揮官？　それにここって……はぅっ!?」
　伊１９の顔が真っ赤に染まりだした。どうやらさっきの出来事を思い出したらしい。
「ご、ごごごごめんなさい指揮官っ！　私、えっと、あのっ……ごめんなさいっ！」
（わ、私……なんてことしちゃったの!?　指揮官の、は、裸を見ちゃうなんて……！）
「慌てる気持ちは分かるが落ち着け。俺なら気にしてないから」
「で、でもっ！　嫌っ！　お願い！　許して！　嫌わないで！　指揮官に嫌われちゃったら、私……わたしぃ……！」
「あー泣くな泣くな。本当に気にしてないからな？」
　みるみる内に涙目になっていく伊１９の頭を優しく撫でる。傍から見れば事案だよなこれ。ラフな格好の男がタオル一枚で半泣きになってる美少女を宥めるとかさぁ。
　いやまぁこの世界の基準に当てはめれば、泣くのを我慢してる少年を優しく慰めるお姉さんみたいな感じに見えてるはずだからセーフだと思う。多分。
「ぐすっ……許してくれるの……？」
「あぁ。だからそんな悲しそうな顔するなって」
「……しきかぁん」
　伊１９が俺にすり寄って来た。おぉっタオル一枚だから豊満なお胸が当たる当たる！　すっげえエロいしセクハラかましたくなるけど、先に聞きたいことがある。

「どうして風呂に入ってたんだ？　いつもならこの時間帯って準備中だろ？　いやシャワー浴びに来た俺が言えたことじゃないけどさ」
「え、えっとね？　あまりに暑くてお風呂入ろうとしたんだけど、まだ準備中だったから……饅頭（ヒョコ）さん達にお願いして、いつもより早くお湯を入れてもらったの……」
「ははぁ。それで気持ち良く浸かってたら俺がやって来て大慌てしたのか」
「……うん」
　要するに俺も伊１９もお互いほぼ同じことを考えたが故に起こったハプニングという訳だ。気持ちは痛いほど分かるぞ伊１９。この暑さじゃすぐにでも風呂で汗を流したくなるよな。
「よし。そういうことなら一緒に入り直すか？」
「……え？」
「さっきやっと汗を流せたって言ってたし、体はまだ洗ってないんだよな？　俺もいい加減汗流してサッパリしたいし」
　何より伊１９のような巨乳美少女と混浴出来るチャンスを逃す訳無いだろ！　いい加減にしろ!!
「ふえええっ!?　そ、それって混浴ってこと!?」
「あ、すまん。嫌だったか？　それなら伊１９が風呂から上がるまで一旦部屋に戻るけ

ど」
「嫌な訳ないよ！　むしろ嬉し……じゃなくてっ！　私、女の子だよ？　指揮官は私と一緒にお風呂入るの、恥ずかしくないの？」
（指揮官のおっぱいとか、もっと恥ずかしいところが丸見えなんだよ!?　全部私に見えちゃうんだよ!?）
「別に平気だぞ？　ほら、裸の付き合いは大事って言うじゃん」
（は、裸の突き合い……♡　って何想像してるの私っ！　あぁでもっ、指揮官とお風呂に入れるチャンス……もしかすると、これっきりかもしれないし……♡）
「……良いの？」
「あぁ。それにこの時間帯なら他のＫＡＮ―ＳＥＮ達はここに来ないはずだから、俺達の貸し切り状態だぞ？」
「貸し切り……」
（つまり指揮官と二人っきりでお風呂に入れるってこと……？　そ、それなら、他の人に見つかってややこしいことになったりしないよね？　大丈夫だよね……？）
「……じゃ、じゃあ……その、一緒に入ろ……？」
「おう！」
バスタオル一枚の美少女から上目遣いで混浴を頼まれて断れる男がいるだろうか。

いやいない（反語）。まぁ言いだしっぺは俺なんだけどな！

「あ～極楽極楽～」
「……」
俺と伊１９は隣り合って湯船に浸かっている。ただし先程とは違い今はお互いにタオルを巻いている。正直、タオルで隠してる方が興奮するのは俺だけか？
ただし伊１９はタオルを腰にしか巻いておらず、幼い外見とは裏腹に大きなおっぱいは隠されているどころか堂々と自己主張している。
最初は驚いたが、ここは貞操逆転世界であることを考えると納得した。恐らくこの世界では女は下半身だけを隠し、男は全身を隠すのだろう。
あれ？　それならプールに行けば素晴らしい光景が待っているということか？
だって女の子はみんな海パン姿でおっぱい丸出しなんだろ!?　よし今度絶対行ってみよ!!
「このだだっ広い浴場を二人で独占……中々の贅沢だよなぁ」

「う、うん……」
（ば、バスタオル一枚の指揮官……♡　いやそれよりどうしておっぱい隠さないの!?　下半身だけ隠すなんて……あぅ、どうしてもおっぱいに目がいっちゃう……♡）
　さっきから俺の胸をチラチラ見てるな。伊１９はバレてないと考えてるかもしれないが、見られてる方には丸分かりなんだな～これが。ようしそんなイケナイ子にはセクハラしてやる！
「それにしても大きい胸だな。周りから何か言われたりしないか？」
　もにゅっ♡
「んっ……♡　べ、別に何も言われないよ？　それに周りからどう思われてようと関係無いもん。私には指揮官さえいてくれれば良いから！」
「……」
　セクハラしたつもりが複雑な気持ちになった。そうだよな。伊１９ってそういうとこあるよな。なんつーか、俺以外のことはどうでもいいみたいな感じでさ。
　これって俺に依存してるのか？　赤城や大鳳みたいな露骨にやべー奴と違って、伊１９は伊１９でそこはかとなく闇を感じるというか……でも可愛いからつい甘やかしちゃう！
「そうかそうか！　いや～伊１９は良い子だなぁ！」

むにゅむにゅっ♡
「あっ……♡　えへへっ、本当？　もっと褒めて～！」
「もちろんだ！　伊１９は良い子！　偉い子！　可愛い子！」
もにゅもにゅもにゅっ♡
「はぁっ……♡　う、嬉しいなぁ……！　でも、指揮官……んっ♡　どうして胸ばっかり触るの……？」
「いや立派なものをお持ちだなと思って」
外見はちっこいのにおっぱいは凄くデカいもんなぁ。やっぱロリ巨乳って最高だわ！　長良やエンタープライズには無い背徳感がたまんねぇ!!
（それなら指揮官のおっぱいの方が……♡　だからダメだってば！　こうして一緒にお風呂に入ってくれてるだけでもありがたいと思わないと……！）
むにっむにっ♡
「やっ♡　あっ、んぅっ……♡」
（て、手つきがいやらしいような……♡　もちろん、指揮官なら何されても良いけど……♡）
女の子のおっぱいって中毒性高過ぎ。いくら触っても飽きないどころか触れば触るほどもっと触りたくなるもん。けどこれ以上セクハラし続けてると、お互いのぼせそう

だからここでストップ。

だがそのまま平和に終わらせる俺じゃないぞ！　一緒に湯に浸かるだけが混浴じゃない。他にも色々なイベントがあるじゃないか！　まぁ実際には俺が強引にイベントを起こす訳だが。

「……よし、一旦上がって体洗うか。長風呂して汗かいたら本末転倒だしな」

「う、うん……♡」

「でもただ体を洗うだけってのも味気ないし、ここはお互い洗いっこしないか？　せっかく混浴してるんだし」

「……えっ？」

「まずは俺が伊１９の体を洗うよ。普段から頑張ってもらってる分のお返しも兼ねてさ」

「ふ、ふえええええええええええっ!?」

混浴と言えば洗いっこでしょ！　それを抜きにしてもお世話になってる人の背中を流すことは大事だからな、うん。ただし思う存分セクハラするけど！

……なんか「慰安婦の次はソープ嬢かよ」とかいう突っ込みが聞こえてきそうだが無視。何と言われようが無視!!

０８

「じゃあ洗うぞ？　痛かったらすぐ言ってくれよ？」
「う、うん……」
（指揮官に体を洗ってもらえるなんて……！　ゆ、夢じゃないよね？　現実だよね……!?）
　濡らしたタオルにボディソープをたっぷり付ける。女の子の肌を傷つける訳にはいかないからな。しっかり泡立てておかないと……よし、こんなもんか。
「まずは背中から洗いま～す」
　ゴシゴシ……
「んっ……」
「どうだ？」
「えへへ……気持ちいいよ」
「なら良かった」
　伊１９の小さな体を改めて見る。こんな幼い少女にしか見えない子達が、海の上でドンパチやってんだもんな……その為に生み出された存在とはいえ、いつも戦ってもらっ

ているのが申し訳ない。
　それだけじゃない。元があの四角い箱（メンタルキューブ）と言われても信じられないほど、どこからどう見ても人間で……少なくとも、俺には兵器ではなく可愛い女の子としか思えない。
　だからこそ欲情するんだけどな。いやほんとどうしようもねえな俺。もちろん一人の人間として尊重したいという気持ちも本物だが。
　ゴシゴシ……
「んっ……ちょっとくすぐったい……」
「こんな綺麗な肌だからな。丁寧に洗わないと」
（それって、普通は男の人に対する台詞じゃないかな……？　でも、指揮官に綺麗な肌って褒めてもらえた……えへへっ♪）
「……よし、こんなもんか」
「ありがとう指揮官。じゃあ交代……」
「次は前だな」
「え？　前も洗うの!?」
「当たり前じゃないか。背中だけじゃ中途半端だろ？」
　何よりまだおっぱい洗えてないし。おっぱい洗えてないし!!　どうして二回言ったのかって？　大事なことだからに決まってるじゃないか。

「でも……」
「あ、無理強いはしないぞ？　嫌なら遠慮なく言ってくれ」
「そうじゃなくて……男の人に女の子の体を洗わせるのは……」
「俺は気にしない」
　だってすっごい役得だもん。むしろ俺の方から洗わせて下さいお願いしますと頼み込んででも洗いたいレベル。
（し、指揮官……急にどうしちゃったの？　この前まで、私達には一歩距離を置いて接してたのに……だけど、私にとっては今の積極的な指揮官の方が……♡）
「……じゃ、じゃあ、洗って……くれる？」
「任せろ！」
　むにゅっ♡
「ひゃっ♡」
「あ、悪い。痛かったか？」
「う、ううん！　大丈夫！　ちょっと驚いただけだから！」
「そうか。じゃあこれくらいの力加減で……」
　もにゅもにゅっ♡
「んっ……♡」

（こ、これじゃいかがわしいお店みたいだよぉ……♡　でも、優しく洗ってもらうの……気持ちいいかも……♡）

あ～やっぱ柔らかいなぁ～伊１９のおっぱい。さっきも触ったけど、今は余すところなく洗ってるからな。手から伝わる感触はそれはもう極上の味わいですよ。

長良やエンタープライズに勝るとも劣らない、マシュマロのように柔らかくてフワッフワな手触り……強く握ると手が沈む沈む！　これは男のハートを鷲掴みですわ。

ぐにぐにっ♡　ぐにぐにっ♡

「はぁっ……♡」

「お客さ～ん。こんなに大きいと肩がこりませんか～？」

「んぁっ♡　う、うん。ちょっと……」

もにゅっもにゅっ♡

「あっ……♡」

（さっきから、凄く丁寧に洗ってくれてる……でも、男の人のおっぱいならともかく、女の子の胸をこんなにしっかり洗う人がいたなんて……）

さて、おっぱいの感触は十分堪能したし、次は……

「……ふえっ!?　し、指揮官!?」

「ん？」

「そ、そんなところまで洗うの!?」
「おう。洗うからには徹底的に綺麗にしようと思ってな」
「でででででもっ！　流石にこれ以上は普通の洗いっこじゃ済まないよ!?」
「……分かってる。俺は最初からそのつもりだったからな」
「えっ……？」
「もちろん、さっきも言ったが無理強いはしない。どうする？」
　いくら男から女に対する行為だとしても、無理矢理なら強姦になってしまうからな。俺は確かにどうしようもない変態だが、嫌がる女の子を襲う趣味は無いしそれだけはやっちゃダメだと考えてる。
　襲われるのは大歓迎だけどな！　現実世界の価値観を持つ俺にとっては、この世界のレ〇プは美少女にセックスしてもらえるというご褒美なんだぜ!?　嬉しくない訳ないだろ!!
「……」
（い、いいのかな……だって、これじゃ……指揮官がしてくれてることが、いかがわしいお店みたいじゃなくて……いかがわしいお店そのものになっちゃう……
　だけど、指揮官に大事なところを洗ってもらえるんだよね……？　お風呂に入りながら妄想してたことを、実際にやってもらえるんだよね……!?　何より、指揮官がいいっ

て言ってくれてるし……！）

「……お願い、しますっ」

伊19が赤面しながらうなずく。もうこの顔だけでご飯三杯はイケそう。

「分かった。デリケートなところだし、ここからは手で……」

つぷっ……♡

「んうっ♡」

（し、指揮官の指が……私の大事なところに……♡）

にちゃにちゃっ♡

「あぁっ♡　んうっ♡」

「ボディソープのせいもあるけど、何だかネチャネチャしてるな。もしかして期待してたのか？」

「……うんっ♡」

「正直でよろしい」

ちゅぷちゅぷっ♡

「んやっ♡　そ、そんな撫でまわすようにぃ……♡」

いつもの手マンとは違い、今は洗うことを優先する。だからナカをかき回すようなやり方ではなく、ボディソープを塗り込む感じで……

ぬちゃぬちゃっ♡　ちゅくちゅくっ♡
「いいっ♡」
（じ、じれったいよぉ……♡　でもっ、指揮官にシてもらってるからかな……？　自分でスるのとは、全然違うぅ……♡）
くちゅくちゅくちゅっ♡
「あんっ♡　し、しきかぁん……♡」
泡だらけの伊１９が可愛らしい声で喘ぐ。見た目が幼い女の子をよがらせるという状況がたまらなく背徳的で……いかんマジで興奮してきた！
じゅぷじゅぷじゅぷっ♡
「あぁっ♡　い、イくっ♡　指揮官の指でイっちゃうっ♡」
「……」
「ふわぁぁぁ……え？　し、指揮官……？　なんでやめちゃうの……？」
「いや、そうじゃない。洗った後にはシャワーでボディソープを流さないといけないだろ？　だからこうして……」
蛇口が冷水ではなく温水になっていることを確認し、伊１９の体に優しくシャワーを浴びせる。
シャアアアアアアア……！

「ひゃうっ!?」
「ボディソープごと愛液を洗い流した方が効率的だと思ってな！」
　ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♡
「ひゃあああっ♡♡　い、いきなりそんなぁっ♡♡　ダメぇっ♡♡　イっちゃうううううううっ♡♡」
　どうやら絶頂したらしい。シャワーのせいで潮吹きしているかは分からないが、伊19は声を上げながら体をガクガクとさせているのでイったことは理解出来た。
「はぁはぁ……♡」
「どうだった？」
「す、凄く気持ち良かったぁ……♡」
（指揮官にシてもらえて最高だったよぉ……♡　これじゃ、ますます指揮官から離れられなくなっちゃう……♡）
「そりゃ良かった。次は伊19が俺を洗ってくれないか？」
「あ……そう、だったね……♡」
（指揮官に手で発散してもらえただけじゃなくて、指揮官の体を触れるだなんて……♡
　今日は艦生で最高の日かも……♡）

「じゃあ、まずは背中から洗うね～？」
「あぁ、頼む」
　攻守交代。今度は俺が伊１９に洗ってもらう番だ。
「んしょ、んしょ……指揮官の体、おっきいね……」
「まぁ、伊１９から見ればそうだろうな」
　これでも軍人だから鍛えてはいるが、伊１９のような少女には成人男性は誰もが大きい体格に見えると思う。
「……♡」
（あぁ、私……裸の指揮官を、こんな近くで見てる……♡）
　それにしても女の子は本当に優しい力加減で洗うんだな……俺はいつもゴシゴシこする感じで体を洗うが、こうも優しい手つきで洗われるとくすぐったくて仕方がない。
「ふぅ……これで背中は洗えたよ」
「おう。前も頼んでいいか？」
「……うんっ♡」

（指揮官のおっぱい……♡　おっぱい……♡）

伊１９がタオルで俺の胸をワシャワシャと洗う。この手つきはさっき俺が伊１９のおっぱいを洗った時と同じだ。気持ちは分かるぞ伊１９。おっぱいの魅力には勝てないよな。

「はぁはぁ……♡」

（夢にまで見た指揮官のおっぱい……♡　こんなに硬くてたくましいんだ……♡　いつまでも触っていたい……♡）

伊１９の手つきが激しくなっていく。よっぽど俺の胸が気に入ったらしい。ふと思ったが、この世界では男が女に胸を揉まれて喘いだりするんだろうか……おえっ。余計なことを考えるのはやめよう。

「え、えっとっ、次は……その……下も、洗うんだよね……？」

「あぁ。頼む」

「……ごくっ♡」

（し、指揮官の……こ、これは脳に焼き付けておかないと！　こんな機会、もう一生無いかもしれないし……！）

「……し、失礼しますっ」

ヌルッ……♡

「うくっ」
「あっ、だ、大丈夫……？」
「いや、悪い。伊１９の手が柔らかくて、ちょっと声が出ただけだ」
ボディソープでヌルヌルの時点でヤバいのに、伊１９のちっちゃくて柔らかい手で一物を触られたらそりゃ変な声も出ますって！
「う、うん……」
ヌルヌルッ……♡　ヌルヌルッ……♡
「うぁっ……」
伊１９が俺のちんこを優しく扱って……もうこの光景だけでイキそう。でもそれ以上に快感がじわじわと襲ってきて……！
ニュルッニュルッ♡
「っく……！」
「わぁ……♡」
（指揮官の、おっきくなってきた……♡　これって、私の手で興奮してるってことだよね……♡）
ニュルニュルニュルッ♡
「かはっ……！」

そういやセックスは経験済みだが手コキは初めてだったな……正直「フェラやセックスと比べたら大したことないんじゃね？」とか思ってたけど考えを改めるわ。メチャクチャ気持ち良いじゃんこれ!!

「指揮官……気持ち良い……？」

「……あぁ。そのまま、頼む……！」

「うんっ♡」

ヌリュヌリュヌリュッ♡

「はぁっはぁっ……」

（あはっ♡　かたくなってきたぁ♡　それに先っぽから何か出てきたけど、これって……先走り液、だよね……♡　エッチな本に描かれてる……♡）

ニチュニチュニチュッ♡

「あぁっ……！」

（指揮官、さっきから声が漏れてるよ……♡　そんなエッチな声出したら、私まで興奮しちゃう……♡）

ズリュズリュズリュッ♡

「うっぐ……！　い、伊19……そろそろ……っ！」

「……もしかして、イきそうなの？」

俺は無言でうなずく。もはや暴発しないよう耐えるので精一杯だ……！　しかし伊１９は俺の返答を確認した後、むしろ射精を促すかのようにしごく速度を上げてきた。
ニュルニュルニュルッ♡　ニチュニチュニチュッ♡
「くぅっ……！　で、出るっ……！」
ビュルルルルッ！　ビュクビュクッ！
「きゃっ♡」
（わぁ……♡　これが精液……♡　生で見るのは初めて……♡）
あ～スッキリした。まさか手コキがここまで気持ち良いとは思って無かったわ。自分でオナった時とは比べ物にならないほど沢山出たし……
「すんすん……♡」
（ふわぁ……♡　すっごくエッチな香り……♡）
うわっ伊１９が俺のザーメンの臭いを嗅ぎだした！　やばっこんなエロい光景見せられたらめっちゃ興奮する！　たった今出したばっかりなのに……！
「……あっ♡」
（指揮官の……またおっきくなってる……♡　やっぱり、男の人って何回でもエッチ出来るようになってるんだ……♡）
「……」

「……♡」

俺と伊１９の間にしばしの沈黙が流れる。伊１９を見ると、目をハートにしながらいかにも発情してますという表情で俺を見つめてくる。

これは……やっぱりそういうことを期待しているのか？　いや、間違いなくそうだよな。エンプラさんも俺を襲った時こんな顔だったし。

ただ、それなら一つだけ言っておかなければならないことがある。本番を行うとしたら、これだけは絶対に避けて通ってはいけない。

「……伊１９」

「う、うん……♡」

「俺は指揮官という立場である以上、伊１９だけをえこひいきすることは出来ない。本人の名誉の為に名前は伏せるが、俺は既にＫＡＮ―ＳＥＮの一人と肉体関係を持ってるんだ」

「……！」

「ただ、伊１９が俺を求めると言うのであれば……それを拒絶することはしない。伊１９達には普段から頑張ってもらってるし、例えこういう形だとしても……俺はみんなを癒したいと思ってる」

「……」

相変わらず凄まじいビッチ臭がする発言だが、エンタープライズと行為に及んだことを隠したまま誰かとセックスする訳にはいかない。それだと後から伊１９を傷つけてしまう。

それにカッコつけた言い方をしたが、平たく言えば「俺はもう他のＫＡＮ―ＳＥＮと寝てるしこの先も伊１９以外の誰かと寝るけどそれでもいいなら俺とセックスするか？」ということなんだよな。

ただ、伊１９を傷つけたくないという理由やＫＡＮ―ＳＥＮ達の性欲を発散してやりたいという理由も本当だ。特に後者は、ＫＡＮ―ＳＥＮは俺でムラムラを解消出来るし俺も美少女達とエロいことが出来る。

まさにＷｉｎ―Ｗｉｎじゃないか！　ＫＡＮ―ＳＥＮさえ気にしないなら、俺は肉バイブでも男娼でもソープ嬢でも何にでもなるぞ！　ただ性奴隷は勘弁して欲しいけど。だって他のＫＡＮ―ＳＥＮにセクハラ出来ないじゃん。

「……指揮官」

「あぁ」

「私はね？　指揮官がず～っと傍（そば）にいてくれれば……それで良いの。むしろエッチなこともしてもらえるなんて、これ以上の贅沢は言えないよ！」

「……伊１９」

これってやっぱり俺に依存してるよなぁ。もちろん俺だって伊１９を見捨てるつもりはこれっぽっちも無いが。それに依存なんて言い出したらもっとやべー奴らがいるし伊１９はまだマシな方だ、うん。

「だから、ね……？　私とも、エッチなこと……してくれる……？」

「……分かった。ちょっと待っててくれ、ズボンからゴム取ってくるから」

確かこの前買った残りがあったはずだ。

「うんっ……って、いつもゴム持ち歩いてるの？」

「あー……まぁ、ちょっとな」

いつＫＡＮ―ＳＥＮ達に襲われてもいいよう常に持ち歩くようにしたとは言えない。膣内（ナカ）出しだけは本当に冗談では済まないからな……

「……♡」

ゴムが付けられた一物を伊１９が眺めている。しかしさっき手マンしたとはいえ、こんな小さな体に入れて大丈夫だろうか。

「……出来るだけゆっくり入れる。痛かったらすぐ言って欲しい」
「う、うん……♡」
（まさか、指揮官とエッチ出来るなんて……♡　うぅっ、今になってドキドキしてきちゃった……♡）
「よし……んっ」
　ずぷっ♡
「あっ♡」
　伊１９の膣口に少しずつ挿入していく。予想はしていたがかなりキツい……！
（は、入ってきたぁ……♡　お腹に指揮官のが、熱くて太い指揮官のがぁ……♡）
　にゅぷぷぷ……♡
「痛くないか？」
「う、うんっ♡　大丈夫……♡」
　ゴム越しでも伝わる伊１９の肉壁はキツキツで、油断すると俺の方も暴発してしまいかねない。だが手マンしたお陰なのか、伊１９もそれほど苦しくなさそうだ。
　ずぷぷっ……ぷつっ♡
「ふあぁっ♡」
「ん？　この感触って……」

「し、指揮官……私、たった今……オトナになったよぉ♡」
「オトナ……そうか、そういうことか」
どうやら処女膜を突き抜けたらしい。エンタープライズの時は相手が最初からクライマックスで処女膜を気にする余裕が無かったけど……そうか。俺が伊１９をオトナにしたのか……ヤバいすげえ興奮する！
「んっ、ううっ♡」
（中でおっきくなってる……♡）
「あれ？　でもその割には痛くなさそうだな」
「んふっ……♡　きっと、指揮官がたっぷり濡らしてくれたからだと思う……♡」
いや、いくら濡らしたとは言ってもその体じゃ多かれ少なかれ痛いとは思うんだが……もしかしてこれも貞操逆転世界の影響か？　それともＫＡＮ―ＳＥＮだから人間より苦痛に強いのか？
「じゃあ、もう少し奥へ進んでもいいか？」
「うんっ♡」
「分かった……っく！」
ずぷぅっ♡　こちゅんっ♡
「あんっ♡　い、一番奥まできてるっ♡」

（お腹の奥まで、指揮官で埋め尽くされてるよぉ……♡）

何とか最後まで入ったか。既に俺から精を絞ろうとグニュグニュ動いてくる。ただでさえキツキツなのにこれは……！　しかし俺が動かなければ伊１９が気持ち良くなれない。

誤って暴発させないよう、下半身に力を込めながら……！　なおかつ伊１９の膣内（ナカ）を傷つけないよう、最初はゆっくり慣らす感じで……！

ぐちゅっ♡　ぐちゅっ♡

「ふやぁっ♡　し、指揮官っ♡　しきかぁんっ♡」

「くおっ……！　すげえ締まるっ……！」

一度動くたびにちんこがギュウギュウに締め付けられる。とてつもない快感で思わず射精してしまいそうになるが、伊１９の為にも我慢しなければ……！　ほら、やっぱり相手と一緒にイきたいじゃんか……！

ずちゅっずちゅっ♡　じゅぷっじゅぷっ♡

「はぁぁっ♡　こ、これ凄いっ♡　凄いよぉっ♡」

（お腹に指揮官のがゴツゴツってぇ……♡）

「はぁはぁ……っ！」

ずぷっずぷっ♡　ぐちゅぐちゅっ♡

「指揮官っ♡　指揮官っ♡　指揮官っ♡」
伊１９が快感で身をよじらせながら俺のことを呼ぶ。その姿がとても愛おしく、そして凄くエロい。
ごちゅごちゅっ♡　ぱんぱんぱんっ♡
「あぁっ♡　指揮官っ！　もっと！　もっとしてぇっ♡♡」
「分かった……っ！」
ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡
「ふあああっ♡♡　奥っ♡♡　奥がグリュグリュってぇっ♡♡」
ずっちゅずっちゅずっちゅっ♡
「あっあっあっあっ♡♡　指揮っ、かぁんっ♡♡　ひあっ、やぁっ♡♡」
「伊１９……伊１９っ……！　んむっ！」
「んうっ♡」
俺はたまらず伊１９にキスをする。小さな唇に舌をねじ込み、伊１９の柔らかい舌と絡ませる。それだけでなく歯茎や頬を舐め回し、伊１９の口の中を余すところなく味わう。
「んっ……んむっ」
「ちゅぷっ♡　んじゅるっ、れろっ♡　ぷはっ♡　んうぅ♡　れろれろっ♡　じゅる

じゅるっ♡」
（し、指揮官の舌が入ってきたぁ……♡　あっ、舐められてる……♡　私の口の中、全部舐められてる……♡　ただでさえ気持ちいいのに、こんなことまでされちゃったら……お、おかしくなっちゃうよぉ……♡）
　ずぷっずぷっずぷっ♡　ぱんぱんぱんぱんっ♡
「んむぅっ♡　じゅるっ、ちゅぷっ♡　っはぁ♡　し、指揮か……むぅっ♡　れるれるっ♡　ちゅるっ♡」
（あっダメっ♡♡　キスされながら突かれちゃったらっ♡♡　もう、何も考えられないっ♡♡　指揮官のこと以外考えられないよぉっ♡♡）
　もちろんキス中も腰を動かすことをやめない。上も下も伊１９で包まれ、快感で頭が沸騰しそうになる。だがこれも全部伊１９が可愛いのが悪いんだ。伊１９が魅力的なのが悪いんだ！
「ぷはっ……！　い、伊１９っ……！」
「ぷあっ♡　し、指揮官……しきかぁんっ……♡」
　ぐちゅっぐちゅっ♡　ずちゅずちゅっ♡
「だ、ダメだっ！　伊１９、出すぞっ！　このまま出すからなっ！」
「う、うんっ♡♡　私もっ、イきそうっ♡♡　あっ、んんっ♡♡　一緒っ♡♡　一緒にっ、

イこぉっ♡♡」

そう言いながら伊19は足で俺の体にしがみ付く。いわゆるだいしゅきホールドだ。こんなことをされてしまっては、俺ももう限界だった。

ずちゅずちゅずちゅっ♡　ごちゅごちゅごちゅっ♡

「かはぁっ……！」

ビュクビュクッ！　ドプッドプッ！　ドクドクッ！

「ふにゃああああああぁぁぁぁぁっ♡♡♡　あ、熱(あちゅ)いのっ♡♡♡　お腹(にゃか)に熱(あちゅ)いのがでへるよぉぉぉっ♡♡♡」

「はぁはぁ……」

「はぁ～っ♡　はぁ～っ♡　し、しきかぁん……だ～いすきぃ……♡」

絶頂し、一気に脱力して抱き着いてきた伊19を優しく撫でる。すると嬉しそうに目を細め、手に頭をグリグリとこすり付けてくる。可愛い。

「えへへ……♡　これからは、いつでもエッチなこと……してくれるんだよね？」

「……あぁ」
「やったぁ……♡」
（もう、指揮官から絶対に離れられないよぉ……♡　たとえ指揮官が他の人とエッチなことしてても、そんなの関係ない……♡　私ともエッチなことしてくれるだけで、すっごく幸せ……♡）
「……」
　エンタープライズに続いて二人目か……このままセクハラしてると、こういう関係のＫＡＮ―ＳＥＮがどんどん増えていきそうな気がする。
　いずれは明石か夕張に精力剤か媚薬でも作ってもらった方がいいかもしれない。特に明石は俺が誘惑すれば割引してくれると分かったし。
「うぅ……ちょっとのぼせちゃったかも」
「あー、浴場でセックスしてたらこうもなるよな。よし、もう一回シャワー浴びたら部屋に来るか？　キンキンに冷えたスポーツドリンクなら腐るほどあるぞ？」
「うんっ。行く～……」
　この前エンプラさんと二人揃って脱水症状になってから、ベルファストがこれでもかと言うくらい用意してくれたんだよな。お陰で部屋の冷蔵庫はスポーツドリンクで一杯だ。

しかも飲んだ分だけいつの間にか補充されている。多分ベルファストがこまめに冷蔵庫を確認してくれてるんだろう。今度顔を合わせたらセクハラしつつ改めてお礼を言っておかないとな。

０９

「ぐへへ相変わらず駆逐艦達は可愛いなぁいつ見ても胸が熱くなるついでに股かおっと私としたことが本音を口に出すところだったしかし睦月型は癒しだ小学校入学前の子と同じくらいの身長に未発達な胸そして大人と違い社会の醜さを知らない清らかな心あぁ今すぐ抱き締めたい今すぐその真っ平らな胸に顔をうずめたい今すぐあの子達とお風呂に入って全身を洗いっこしたいいやしかしロリ巨乳というのも捨てがたいな大潮のような背丈は小さいのに胸だけは成熟しているとはもはや襲ってくれと言っているようなものではないか大潮だけじゃない荒潮や満潮だって立派な胸をお持ちときた胸が大きいからいいのではなくロリで巨乳なのがそそるんだそれでいて貧乳ならなんでもいいというわけではない幼くて未発達だからこそ輝くただの貧乳には興味が無いおや長門に陛下か彼女らはあくまでも戦艦だからなやはり駆逐艦であることが大事だ合法ロリなど邪道ガチのロリだから守りたくなるんだそして可能ならあんなことやこんなこともしてみたいだがそんなことをすれば閣下に通報されてしまうしかし閣下の体もいい今すぐ服を剥ぎ取って押し倒して男女の営みをしたいそんなことを考えていたら興奮してきたそして窓の向こうには駆逐艦の妹達がこれはもう私に襲えと言って

いるんだなそうなんだなムラムラしたのなら仕方ないあの子達も分かってくれるはずだしかしあの子達が許しても閣下達が許してはくれないくそっどうして駆逐艦が好きというだけでここまで息苦しい世の中なんだ可愛いものを愛でて何が悪い思わず発情していかがわしいことをしたいと考えて何が悪い私は正常だ周りがおかしいんだそれにしても駆逐艦達は可愛いなぁいつ見ても胸が熱くなるついでに股かおっと私としたことが」

開幕から怪文書とか俺のＳＡＮ値を殺しにきてるなオイ!!　窓から双眼鏡で駆逐艦達を眺めながら涎を流すとかいよいよ末期じゃねーか!!　俺はこれからこいつの相手をしなきゃいけないのか……

こいつはこのやべー性癖のせいでイマイチそーゆー目で見られないんだよな。見た目はパーフェクト美人で戦闘でも頼りになるし普段は性格もイケメンなのに……どうして駆逐艦が絡むとこうなっちまうんだ。

本当なら無視したい。関わったら絶対めんどくさいことになる。だが駆逐艦達から苦情が寄せられてる以上、俺が対応しなきゃならない。もう既に疲れてきたがやるしかない。

「……おいアーク・ロイヤル」

「今すぐその真っ平らな胸に顔をうずめ……これは閣下。急に私を呼び出してどうした

んだ？」
　無自覚かよこいつ!?　今の自分の行動で大体予測出来るだろ!?
「お前に注意しておかないといけないことがあってな」
「注意？」
「駆逐艦達から苦情が来てるんだ。お前、かなり怖がられてるぞ？」
「何ッ!?　そんな馬鹿なッ!!　私はいつも駆逐艦達を愛でつつ守ろうとしてるだけだというのにッ!!」
「その愛でつつ守ろうとするやり方が問題なんだよ!!　事あるごとに鼻血出しながらハァハァ言ってる大人がいたらそりゃ怖がるわ!!」
「そん、な……ッ!!」
　アークロイヤルが地面に手を付けて愕然（がくぜん）とする。無自覚って本当に怖いな。今度こいつの普段の様子をビデオカメラで撮影して見せてやれば少しは自覚するかもしれない。
「うぅ……うぐぅっ……！」
「……」
　しかし自業自得とはいえ、駆逐艦から怖がられてると聞かされただけでそこまで落ち込むか？　今だって目からありったけの血涙流してるし。

「これから私は何を生き甲斐にすれば良いというんだぁ……！」
マジ泣きである。大の大人がしょーもないことでガチで泣いている。ねえ俺帰っていい？　いやここが俺の部屋なんだけどエンプラさんや伊１９の部屋に帰っていい？
今すぐ二人から癒しを貰いたい。
だがここで投げ出す訳にいかない。駆逐艦達は俺に苦情を言っている時、かなり切実だったのだ。あんな顔を見せられた後に無責任に放り出し、駆逐艦達がこいつの餌食になれば俺のハートが罪悪感で死ぬ。
「……仕方ない。じゃあ取引するか？」
「……取引？」
明石にも使った手だが、男の武器に頼るとしよう。ただし明石の時とは違い、今回は駆逐艦達をアークロイヤルから守る為に使うが。俺はおもむろに上着を脱ぎ、更にシャツをゆっくりとまくる。
「か、かかかか閣下!?　急に何を……」
（閣下のエロいおっぱいが見え……見え……あぁっ！　もう少しというところで閣下の手が止まったッ!!）
「お前がもし駆逐艦達を追い回すのをやめ」
「私に死ねというのか!?」

「……追い回す頻度を今までの半分未満にすると約束するなら、俺の胸や尻を好きにしていい権利をやろう」

今の表情はヤバかった。ヤバいといってもエロいとかそっち方向じゃない。あの顔は本気で死にそうな顔だった。俺が駆逐艦と関わるのを全面的に禁止すればショック死しかねない顔だった。

なので俺は少し条件を和らげざるを得なかった。ごめん駆逐艦達。だが流石にこんなんでも大事な仲間だし死なせる訳にはいかないんだ。ある程度は我慢してやってくれ。

（か、閣下のエロいおっぱいとお尻を好きにしていいのか!?　食堂の時といい閣下は私を試そうとしているのか!?　駆逐艦達に意識が向かないよう、自ら体を張って……

だが私には駆逐艦の妹達を守らなければならない使命がある！　しかし閣下の体を好きに出来るというのもかなり魅力的だ……ど、どうする!?　どうするアーク・ロイヤルッ!!）

アークロイヤルが頭から湯気出しながら迷っている。俺に対する性欲と駆逐艦達に対する劣情が競い合っているのか？　この世界の女は、現実世界での男の性欲を持っていることを考えると、どんだけ駆逐艦に対して本気なんだよ。

「あ、先に言っておくが約束したフリしてこっそり駆逐艦達に手を出しても全部分かる

からな？　お前が隠そうとしたところで俺に苦情がドカドカ来るだろうし」
「そんな殺生な!?　いや私とて閣下との約束を破るほど落ちぶれてはいない！」
その勇ましい表情と筋の通った性格をどうして普段から維持出来ないのだろうか。本当にこれさえ無ければ完璧なのに……あぁもったいない。
「ぬぐぐぐぐぐぐぅ……ッ！」
このままじゃいつまで経っても悩み続けそうだ。よし、もう一発追い打ちをかけてやろうか。俺はズボンのベルトを外し、少しずつ下ろしていく。ただしパンツがギリギリ見えそうで見えないところでストップするのがミソだ。
「ブフッ!?」
あっ。アークロイヤルが思いっきり鼻血出した。
「う、うおおぉぉぉッ!!　閣下の、ぱ、ぱぱっ、パンツがあぁぁぁぁぁッ!!」
「おっとこれ以上はダメだ。ここから先は駆逐艦達をあまり追い回さないと約束してくれないとな。さぁ～どうする～？」
「ぐぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎッ!!」
（か、閣下の体を取るか……駆逐艦達を取るか……究極の選択じゃないかッ!!　あぁ、どうして両方という選択肢を出してくれないんだ閣下は……ッ!!）
普段の俺ならセクハラしつつセックス出来る方向へ持って行くだろうが、今回は事情

が事情だからな。駆逐艦達を怖がらせた分、多少のおあずけは致し方なしだろう。
　え？　目の前に美少女がいるのにセックスしたい欲求に駆られないのかって？　もしそうなったらエンプラさんか伊１９とお互いを抜き合えばいいからな。だからこそ余裕を持てる。
　いやまぁ偉そうなことを言ってる自覚はあるし、自分自身の普段の行動を棚上げしてる自覚はある。だけどこうして苦情を出された以上は指揮官として対応せざるを得ないんだよ。
　こんなビッチ臭いことしてる時点で指揮官以前に男としてアウトだろうけどな!!
（……冷静に考えろアークロイヤル。仮に頻度が減ったとしても、やろうと思えば駆逐艦達を愛でることはいつでも出来る。それに対し、閣下の体を味わえるチャンスは今しかない……だったら……！）
「……分かった」
「ん？」
「駆逐艦達を愛でる回数は減らそう……非常に辛いが、駆逐艦達に怖がられているというのなら……これ以上、迷惑をかける訳にはいかない……っ！」
　鼻血と涙を垂れ流したアークロイヤルが俺にそう言った。こいつ駆逐艦のこと好き過ぎるだろ。ド変態の俺でさえ軽く引いてるぞ。

「その代わり約束通り！　閣下の体を堪能させてほしい！　いや堪能させて下さいお願いしますッ!!」
かと思えばエンタープライズに負けないくらい綺麗な土下座を決めてきた。俺が言い出したこととはいえお前にはプライドというものが無いのかよ！　そこまでして俺の体触りたいのかよ！
「……分かった。その代わり、約束は守ってもらうからな？」
「もちろんだ。閣下の心遣いを無駄にするものか！　という訳で早速……閣下あああああぁぁぁッ!!」
「うおぉっ!?」
凄い勢いで俺の胸と尻に飛びついて来やがった!?　さては駆逐艦への劣情を俺で発散するつもりか!?　どんだけ溜まってたんだよお前……別にそれくらいいいけど。
「はぁはぁ……♡　閣下のおっぱい……♡　それにお尻……♡」
「……あー、その、何だ。そこまでムラムラしてたんなら……駆逐艦からの苦情が無くなったら、ご褒美に俺が抜いてやろうか？」
「本当か!?　なら約束の前払いということで今すぐ」
「それはダメだ。ちゃんと結果を出してから言いなさい。それまではおあずけだからな？」

「くっ！」

そもそも約束の前払いって何だよ。初めて聞いたわそんな言葉。でもまぁ、約束通り駆逐艦達からの苦情が無くなれば俺が抜いてやったりセックスしようと思う。だが駆逐艦達を怯えさせた以上、少しの我慢はしないとな？

「……」

（し、指揮官は土下座すればヤらせてくれるのか……運良く部屋の前を通りがかっただけなのに、凄く良いことを聞いたのだ……！）

10

「ヤらせて下さいなのだ!!」

開幕怪文書の次は開幕土下座ですかそうですか。つーか前にもあったぞこの展開。さて俺はどうすべきか……決まってるよなぁ？

「ヴェスタルー！　この暑さで雪風の頭がサンディエゴになっちゃったから治療頼むわー！」

「なっ!?　わ、私は正常なのだ！」

「やべー奴はみんなそう言うんだよ」

前回のアーク・ロイヤルとかな。そもそも正常な奴が土下座しながらヤらせてくれとか言う訳ないだろ！　いい加減にしろ!!

「それなら指揮官の方がおかしいのだ！　見てたぞ！　アークロイヤルが土下座してヤらせてくれと頼んだ時に迷うことなく許可したところを！」

「えっ……マジ？」

「マジだぞ！」

あの場面見られてたのかよ。そういやドア閉めた記憶無いな。そうか、見られたのか

……俺は別に構わないが、これで雪風からアークロイヤルへの評価がガクンと下がってそうだ。涙ふけよアークロイヤル。
「それで俺とヤリたいからここに来た訳か」
「そうなのだ！」
　満面の笑みで言い切るんじゃない。本当にこの母港大丈夫かマジで。俺含めて性欲持て余した奴ら多過ぎだろ。
「いや待て。確かに俺はアークロイヤルに胸と尻を揉ませてやると言ったし抜いてやるとも言ったが、セックスしてやるとは一言も言ってないぞ？」
　地の分で明言してただけだったような。いやまぁ俺としては別にセックスしても良いんだけどさ。
「細けぇことはいいのだ！」
「……あぁ、やっぱり暑さで頭がサンディエゴに」
「だから私は正常だってば！」
「ははっ、すまんすまん」
　にしてもあの雪風が土下座して頼み込むとはな……ただでさえプライドが高い子だと思ってたのに。女の性欲って本当に怖いな。恥もプライドもかなぐり捨ててくるもんなぁ。

「だいたい最近の指揮官はエロ過ぎるのだ！　隙あらば上着を脱ごうとするし、アークロイヤルにはおっぱいとお尻揉ませてあげるなんて！　羨まし過ぎるぞ！」
「いや～あれはあくまでも駆逐艦達に手を出させない為の取引で……」
「あの変態空母が許されるなら、品行方正な私であれば指揮官とエッチしたいと言っても許してもらえるはず！」
「……」
「……えっ、どうして急に黙るの？」
「……品行方正だぁ？　普段から偉そうなことばかり言う生意気な小娘が品行方正だぁ？」
「あふっ♡」
　あっ、しまった。思わずジト目で言い返してしまった。いや別に雪風のことが嫌いって訳じゃないよ？　むしろ戦闘では頼りになるし信頼してるよ？
　ただ、雪風を品行方正と言ったら他の丁寧な対応をして下さるＫＡＮ―ＳＥＮの方々に失礼だと思ってつい反論してしまった。すまん雪風。ちょっと大人げなかったな俺。
（お、男の人から蔑んだ目で罵られるの……意外と悪くないかも……♡）
「あー、その、なんだ。別にセックスするのは構わないぞ？」
「本当か!?」

「近い近い近い！　ただ、その前に話しておかなければならないことがある」
　例によって、俺はいつものビッチ臭半端無い説明をする。これでもう三度目だし詳細は省くぞ。
「と、とんだビッチなのだ……」
「あぁ。だから無理強いは」
「でも興奮するのだ!!」
「……お前、幼い見た目の割にすげえ変態だな」
「女なんてそんなもんだぞ！」
　だろうな。この世界に迷い込んでから俺もそう思ってる。でもな？　現実世界出身の俺にとってはな？　美少女が変態ってだけで下半身がイライラするんだよ!!
「という訳でヤらせて下さいなのだ！」
「また土下座かよ……そんなに俺とセックスしたいのか」
「男とエッチ出来るならプライドなんて投げ捨てるのだ！」
「……分かった。そこまで言うなら、俺も腹を括ろう」
「やったっ！　言質は取ったからな！　早速ヤるのだー！」
「うおっ!?　お、落ち着けって！　がっつかなくても俺は逃げないから！」

「はぁーっ！　はぁーっ！」

雪風に急かされながら俺はいそいそとズボンを脱ぐ。血走った目で凝視してくる雪風が地味に怖い。あ、もちろんゴムは付けるぞ？　ただの妊娠でさえヤバいのに若年妊娠とか洒落にならない。

というかアークロイヤルに説教かましてからのこれとか俺も大概やべーな。まぁあいつと違って、俺の場合は雪風からセックスしたいと言い出してるしお互い合意の上だけど。

「お、おぉっ……！」

（こ、これが指揮官の……♡　ごくっ……♡）

俺の股間をガン見する雪風。伊１９の時も思ったが、ここが現実世界だと間違いなく事案だよなこれ。
「じゃあ早速っ！」
「え？　おいちょっと待て。いきなり入れたら痛いんじゃないのか？」
「もう我慢出来ないのだ！　指揮官がいつもエロいのが悪いのだ!!」
中々理不尽なことを言われた気がする……いやそうじゃなくて！
「まずは十分に濡らさないと」
「んんっ！」
ずぷぅっ♡
「うっ!?」
「あぁっ!?」
人の話を聞こうともせず、雪風は俺の一物を膣内（ナカ）へ突っ込んだ。おいおい大丈夫かよ!?　雪風のような小さい体に、準備もせずいきなり入れたりしたら……
「あっ……うぅっ……！」
「……ゆ、雪風？」
「よ、予想してたとはいえ……結構、痛いぃ……」
だから言わんこっちゃない。雪風と同じくらい小さな体の伊１９は事前にしっかり

濡らしておいたお陰ですんなり入ったが、普通はこうなるよなぁ……

しかも血が出てるってことは、今ので膜破っちゃったみたいだし。え？　エンタープライズの時もいきなりだったって？　あいつは大人だしめっちゃ濡れてたから例外ってことで。

「はぁっ……うっぁ……！　で、でもっ、耐えられないほどでは……」

口ではそう言ってるけど辛そうだぞ？　いや現実世界で童貞だった俺には、女性が感じる痛みは想像することしか出来ないが。

とにかく、少しでも雪風の苦痛を取り除いてやった方が良さそうだな。この世界では非童貞な俺がフォローしなければ。

「……んむっ」

「んみゅっ!?」

俺は雪風の顔を手で近づけ、優しくキスをする。要は濡らせばいい訳だから、雪風を気持ち良くしてやれば徐々に痛みが和らいでいくはずだ。

「んじゅるっ♡　ちゅぷっ、んんぅっ♡」

（し、ししししし指揮官がキスしてきたのだ!?　それに舌が入ってきてぇ……♡）

雪風の小さな唇に舌をねじ込み、口内を舐め回す。歯茎や頬はもちろん、雪風の柔らかくてヌルッとした舌と俺の舌を絡めさせる。

「ちゅるっ♡　じゅるっ♡　ぷはっ！　んむっ!?　ちゅうっ♡　れろれろっ♡」
（口の中がとろけるのだぁ……♡　指揮官が、私の口の中を全部舐めて……それに、唾液もすすって……♡）
「んむぅっ」
「れるっ、ちゅぱっ♡　じゅるじゅるっ♡　ちゅうううっ♡　れるれるっ♡」
「ぷはっ！」
「はぁはぁ……♡」
（し、指揮官、ビッチだけあてテクニシャンなのだ……♡）
「どうだ？　痛みはマシになったか？」
「……ま、まだ痛いかも」
　う～ん、キスだけじゃ足りないか。だったら次は、男ならみんな大好きおっぱいしか無いよな！
「失礼しま～す」
「え？」
　むにゅん♡
「あっ♡」
「背丈はちんまいのにここは意外とあるよな～」

むにむにっ♡　もにゅもにゅっ♡
「ひゃっ♡　し、指揮官？　どうして私の胸を……んっ♡」
（あ、あれ？　胸を触られてるだけなのに、どうしてこんな……♡）
現実世界でも男の胸は性感帯になり得る話を聞いたことがある。つまり、この世界の女の子達も十分おっぱいで感じることが出来るはずだ。
実際、エンタープライズや伊１９は俺がおっぱいを揉んだ時は二人共結構喘いでたしな。やっぱり女の子のおっぱいって最高だわ！
伊１９ほどでは無いにしても、手で包み込めるこの大きさと柔らかさは癖になるかもしれん。おっぱいに優劣は無い！　どんなおっぱいも等しくエロい!!
むにゅむにゅっ♡　ぐにぐにっ♡
「お、女の……んっ♡　しかも子供の胸を触って楽しいか……？」
「もちろん」
「即答!?　も、物好きな指揮官なのだ……ひうっ♡」
ぐにゅうううっ♡
「んぁっ♡　つ、強く掴み過ぎなのだ！」
「あ、悪い。痛かったか？」
「……ううん」

「なら良かった。もうちょっとだけ続けるぞ」
　ぐにゅぐにゅっ♡　もにゅもにゅっ♡
「ひゃんっ♡　お、女を胸で感じさせるなんて、どこでそんなテクを……あんっ♡」
　異世界の薄い本やＡＶ……とは言えないよなぁ。言ったところで絶対信じないだろうし。
　むにゅむにゅっ♡　ぐにっぐにっ♡
「んくっ♡　あっ、む、胸でこんな……いぅっ♡」
「よし。これでどうだ？」
「……ん、さっきより濡れてるし、痛みも和らいだかも」
　強がり……では無さそうだな。今もなお雪風の膣内（ナカ）に収まっている俺の一物も、さっきよりは圧迫感を感じていない。これならゆっくり動かせば何とかなりそうだ。
「分かった。じゃあ少しずつ動かすぞ？」
「……うん」
　ぬぷっ♡　ちゅぷっ♡
「んっ♡　し、指揮官のがこすれて……♡」
「痛くないか？」
「平気、なのだ……♡　んっ、んっ……♡」

にゅぷっにゅぷっ♡　ずぷずぷっ♡
「お、おい。そんなに動くと、また……」
「はぁはぁ♡　指揮官っ♡　指揮官っ♡」
じゅぷっじゅぷっ♡　ぐちゅぐちゅっ♡
「あぁっ♡　き、気持ち良いっ♡　気持ち良いのだっ♡　んぅっ♡」
（さっきまでは痛かったけど、今はもう……快感しか……っ♡）
こいつ自分から腰を動かし始めたぞ!?　大丈夫なのか!?　表情を見る限り痛くは無さそうだが……
ずちゅずちゅっ♡　ずぷっずぷっ♡
「ふあっ♡　私っ♡　指揮官とっ♡　指揮官とエッチっ♡　エッチしちゃってるっ♡」
（ちょ、ちょっと動くだけで痺れるような快感が……♡　指揮官、名器過ぎるのだ……♡）
あーこれはダメだな。俺のことなんて無視して完全によがってる。エンタープライズの時もこんな感じだったっけなぁ。このままだと雪風だけイっちゃいそうだな……よし！
「……一人で盛ってんじゃない！」
ごちゅっ♡

「ふあああっ♡」
（お、奥にっ♡　奥にゴリッてぇ♡）
「俺だってお前の体でスッキリしたいんだよ！」
　ごりゅごりゅっ♡　ぐりゅぐりゅっ♡
「にゃあああああっ♡♡　そんなグリグリっ♡♡　グリグリはダメなのだぁっ♡♡」
　一物を雪風の子宮口に何度も突き当てる。すると面白いように雪風が喘ぐ。同時に膣内（ナカ）がグニュグニュと蠢（うごめ）き、俺にも凄まじい快感が襲ってくる。
　ぐちゅっぐちゅっ♡　ぱんぱんぱんぱんっ♡
「ふあっ、ふあああっ♡　しゅ、しゅごいっ♡　しゅごいによだぁっ♡」
（気持ち良すぎて何も考えられないっ♡　指揮官っ♡　指揮官指揮官指揮官っ♡）
「つぐ……！」
　体が小さいせいか締め付けもキツく、一突きするたびに射精感が猛烈に込み上がってくる。だが、どうせなら雪風の絶頂と同じタイミングでイきたい。もう少しだけ我慢しないと……！
　ずちゅっずちゅっ♡　ごりっごりっ♡
「ふやぁっ♡♡　腰がっ♡♡　腰が砕けりゅうっ♡♡」
「ゆ、雪風……俺、そろそろ……っ！」

「わ、わらひもっ♡♡　わらひもイきそうにゃのだっ♡♡　んうぅっ♡♡」
　どうやら雪風の方も限界らしい。だったら俺も……！
　ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♡　ぱんぱんぱんぱんっ♡
「あっ、いっ、イくっ♡♡　イっくううううぅぅぅっ♡♡」
「くあっ……！」
　ドプドプッ！　ビュクビュクビュクッ！
「ふわああぁぁぁぁっ♡♡♡　あ、熱っ♡♡♡　熱いのがっ♡♡♡　膣内に熱いのが出てりゅのだぁぁぁっ♡♡♡」

「ふぅ……」
「はぁ～っ♡　はぁ～っ♡」
　まったく、駆逐艦は最高だぜ……いや～えがったぁ。見かけは幼いのに意外と肉付きが良い体、どこを取っても文句無しだったわ……！
「……どうだ？　スッキリしたか？」
「……」
「……雪風？」
「……こ」
「こ？」
「幸運の女神のキスを感じ……」
「ストップそれ以上言うな！　それは別世界の雪風（お前）の台詞だから!!」
「冗談なのだ。でも、そう思ってしまうほど最高だったのだ……♡」
「……それは何より。またシたい時はいつでも言ってくれよ？」
　そう言いつつ雪風の頭を撫でると、嬉しそうに目を細めた。こうして見ると外見相応の可愛い美少女なんだけどな……それが俺に対して「ヤらせて下さい！」とくるもんだから、本当にこの世界の女の子は溜まりまくってるんだな。
「えへへ……♪　もちろんなのだ！」

（というか、あの感覚は一度覚えたら忘れられないのだ……♡）

これで雪風まで俺のセフレとなってしまった。俺、どんどんビッチの道を突き進んでるなぁ……でも役得だからやめる気は無いがな！　むしろセフレが増えるならどんとこいだ!!

１１

ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡
「んはぁっ♡　い、イくっ♡　イっちゃうっ♡」
じゅぷじゅぷじゅぷっ♡
「うあああああぁぁぁっ♡♡」
プシャアアアアアアアッ！
「はぁはぁ……♡」
グショグショになった下半身から手を離す。最近、指揮官がエロくて困っちゃう。今までガードが固かったのに、急に隙だらけになっちゃうんだもん。
酷い時には下着姿で食堂に来たり、汗で下着が透けていても全然気にしていないかのように振舞うし……あぁもうっ！　こんなんじゃ私、四六時中ムラムラしちゃうよ！ずっと濡れちゃうに決まってるよ!!
今日だって指揮官のエロい姿を妄想するだけで抜いちゃって……だけど、流石に妄想と記憶だけじゃ限界があるんだよね。確かに興奮するけど、やっぱり日に日にオカズとしての鮮度が落ちちゃうというか……

「あれって誘ってるよね？　だったらいっそ襲……う訳にもいかないし。ならせめて写真だけでも……ダメだよね、うん」

レ○プなんてもってのほか、盗撮なんてしようものなら即座に通報されて逮捕されちゃうに決まってる。私の艦生が終了しちゃう未来が目に見えてる。だけどこの状況は生殺しに近いよ……はぁ……

とりあえず、一応はスッキリはしたから早くトイレから出ないと。他にも指揮官でオナりたいＫＡＮ―ＳＥＮは沢山いるし、私が個室を占領していたら他のＫＡＮ―ＳＥＮに迷惑をかけちゃう。

手早くお股と便器を拭き、パンツを履いて外に出る。すると早速ハァハァ言いながら個室に入って行くＫＡＮ―ＳＥＮとすれ違う。あぁ、あの子も指揮官のエロさにやられちゃったか……気持ちは痛いほど分かるよ。

「今の指揮官なら、もしかしたら写真くらいは撮らせてくれたりしないかな～……なんて」

いや、いくら今のユルユル指揮官でもエッチな写真なんて撮らせてくれないに決まってるよ。もはやセクハラを通り越したナニかだもん。

だけど、このまま記憶と妄想だけじゃ物足りないし……何とかバレずに盗撮する方法とか無いかな？　後で青葉さんと本気で隠しカメラについて語り合おうかな……ん？

「お前マジか……」
「だ、だって、指揮官がこの前……」
「これって、指揮官とサラトガちゃん！　……じゃなくて明石ちゃんの声？　今、お店の方から……」
　何やら内緒話をしているらしい。それならぜひ盗み聞きしないとね！　だって指揮官と明石ちゃんがコソコソお話してるんだよ？　絶対何か重要な話か面白そうな話に決まってるでしょ！
　……関係無いけど、サラトガちゃんと明石ちゃんって信じられないくらい声似てるよね。私でさえ時々聞き間違えちゃうくらいだもん。それに私の声も白露ちゃんと凄く似ていて……いやそんなことより盗み聞きに集中しないと！
「いや別に抜くくらい無料（タダ）でも良いぞ？」
「それじゃ申し訳無いにゃ！　せめてこれくらいはしないと気が済まないにゃ！」
　……え？　抜く？　何言ってるの明石ちゃん？　しかも指揮官にダイヤまで差し出して……暑さでついに頭がサンディエゴちゃんになっちゃった？　それとも私の聞き間違い？
「本当にくれるのか？」
「女に二言は無いにゃ！　その代わり、今日は口でシて欲しいにゃ……♡」

「……分かった。なら俺も本気でヤらないとな」

「あっ……♡」

聞き間違いじゃなかったあああああぁぁぁぁぁぁッ!? 明石ちゃん何してるの!?

お金払(ダイヤ)って抜いてもらうとか風俗だよそれ!?

いや指揮官も指揮官だよ! 何でそんな普通に了承してるの!? 普通ドン引きするところじゃないの!? どうしてあっさりＯＫしちゃったの!?

あっ、指揮官が明石ちゃんのパンツをずり下して、そのまま口を近付けて……えぇっ!? いきなりそんなっ!? あぁっ、明石ちゃんがだらしない顔で喘いで……ひ、ひゃあああぁぁぁぁッ!!

「はぁはぁはぁはぁ……」

お、思わず部屋まで逃げ帰っちゃった……いやだって目の前で広がる光景が衝撃的過ぎたんだもん! あんなの見て冷静でいられるのは処女卒業した女だけだよ!!

でも、まさか指揮官と明石ちゃんが……あんな風俗と言うか、援交まがいのことして

たなんて……それにどうして指揮官も、何の抵抗も無く受け入れて……

「……こ、これって、もしかして……写真くらい、頼めば普通に撮らせてくれるのかな……？」

　さっきの出来事も目玉が飛び出しそうになったけど、私はそれよりも……写真を撮らせてくれるかが気になった。クンニを軽く了承したほどだし、エロい写真を撮るくらいならあっさりＯＫしてくれそう。

「よ、よしっ……後で聞きに行こ。今はまだ明石ちゃんにクンニしてる途中だろうから、一時間くらい経ってから……」

「まさか商品を無料(タダ)で譲って貰えただけで無く、ダイヤまで貰えるとは……」

俺は明石に頼まれ、三十分ほどクンニしてやった。手マンの時よりもグショグショに濡らして、イった時の潮吹きも顔にビチャビチャかかってしまうほどだった。どんだけ溜まってたんだよあいつ。

俺としては役得だったから良いんだけどさ。このままだと、ありったけのダイヤをかき集めて「私とセックスするにゃ！」とか言い出しそうで怖い。その時は全力でイかせてやるけどな!!

「あの～……指揮官……？」

「ん？　グリッドレイか。どうした？」

アホなことを考えていたらグリッドレイが来た。こいつのことだから、どうせまたサラトガの写真を見せに来たんだろう。あいつは確かに合法ロリ……おっと失礼。美少女で可愛いけど、そう何回も写真を見せ付けられ続けると流石に飽きる。

「えっと……えっとね……？」

「歯切れ悪いな。もしかして新しいカメラを買う為のお小遣いか？」

「いや、その……」

グリッドレイは妙にモジモジし、顔を赤らめている。もしかして、雪風から「指揮官は土下座すればヤらせてくれるのだ！」とかいうふざけた話を聞いて自分もセックスし

たいとか……こんな考えが真っ先に浮かんでくるあたり、俺もかなり変態を拗らせてるな。

「……見ちゃったの。指揮官が明石ちゃんに、その……口でシてあげてるところを」

「……あー、そうか」

すまん雪風、疑って悪かった。むしろ俺と明石が原因だったわ。そうか、さっきのクンニを見られてたのか……道理で言いづらそうにしてる訳だ。

「だからっ！　私も指揮官の写真を撮らせて！」

「写真？」

「クンニしてあげるくらいなら、ちょっといかがわしい写真を撮るくらい良いでしょ？　ねぇ！」

（い、言っちゃった……！　セクハラで訴えられたりしないよね……？）

「……」

なるほど、そうきたか。てっきり「私も抜いて！」とか言い出すと思ったんだが、性欲発散より写真を選ぶところはグリッドレイらしいな。というかわざわざ俺に頼むってことは、盗撮とかしてなかったのか。

むしろ俺に気づかれないよう盗撮して、その写真をオカズにしてるくらいは想定内だったんだが。いや、単にバレた時のリスクを考えて自重してただけか？　この世界だ

と、男の盗撮より女の盗撮の方がヤバそうだもんな。
「よし分かった。好きなだけ撮れ」
「……へ？」
（あ、明石ちゃんの時みたいに呆気無くＯＫ出してくれちゃった……い、いや待って。もしかしたら、今度こそ私の聞き間違いだったりして……）
「……ほ、本当に良いの？」
「おう。別に減るもんじゃないしな」
「……」
（やっぱり聞き間違いじゃなかった！　こんなあっさり認めてくれるなんて！　これって夢!?　夢じゃないよね!?）
「あ、でも一つだけ約束して欲しい。撮った写真を母港内で使うのは構わないが、外部には絶対漏らすなよ？　上から何を言われるか分からないからな」
俺が叱られる程度で済むならまだ良い。むしろ俺のせいでグリッドレイが逮捕されてしまう方が色々とまずい。え？　だったら最初からこんなことするなって？　アーアーキコエナーイ。
「それはもちろんだよ！」
（そんなお宝写真を流出させる訳無いでしょ!!　同じ母港にいるＫＡＮ―ＳＥＮに売り

さばいたりはするかもしれないけど!!）

「まずは普通の服！」
　カシャカシャカシャ！
「……これのどこがいかがわしい写真なんだ？」
「いやいや！　ごく普通の服だからこそ妄想が引き立てられるんだよ！　特に風で上着が少しなびく所なんか凄くそそる！」
　グリッドレイは目をしいたけにしながら、俺の姿を一心不乱に撮影している。ついでにこいつの後ろには、どこから持って来たと言いたくなる大量のコスプレ衣装が積まれている。
　よく見ると睦月型が着ていそうなチャイルドスモックまである。まさかアーク・ロイヤルから貰ったとかじゃないよな？　いやあいつがこんな服持ってたら持ってたでおかしいけど。
（こんなこともあろうかと、色々なコスを買っといて正解だったよ！　グッジョブ過去

の私！）

カシャカシャカシャ！

「よし！　次はこれ！」

「ブーメランパンツって……」

「……ダメ？」

「いや別に良いけど」

本当に何でこんな服（？）持ってんだよ。現実世界ではただのサラトガ専属カメラウーマンだったのに……恐るべし、貞操逆転世界。

そんなことを考えつつ、俺はグリッドレイに着せ替え人形のように色々な服を着せられ、そのたびにあらゆる方向から大量の写真を撮られ続けた。

ちなみに俺が着替える時、グリッドレイは自主的に部屋の外へ出ていた。あいつも綾波と同じで初心（うぶ）らしい。あるいは明石と同じヘタレか。

カシャカシャカシャ！

「はぁ～っ！　一生分の写真を撮った気がする！」

「満足してもらえたようで何より」

最後に着せられたのは執事服だ。現実世界で例えればメイド服を着た女みたいな感じか？　確かに男にとってメイドはロマンだし、この世界の女の子にとって執事はロマ

ンと言われても納得がいく。
「……」
「……どうした？」
　何やらグリッドレイがまた顔を赤らめてモジモジしている。あ、何となくこいつが次に言う台詞が予想出来た。
「……」
（ど、どんなに恥ずかしい服やエロい水着の写真でも二つ返事で撮らせてくれたし……ちょ、ちょっと踏み込んだ写真とか……）
「……えっと、下着や裸の写真とかは……」
　ですよねー。絶対そう来ると思ったわ。だって明石を手マンした時がまさにこんな感じだったし。
「……ご、ごめん！　やっぱり今の無し……」
「良いぞ」
「」
（う、嘘!?　本気で言ってるの!?　下着だよ!?　裸だよ!?）
「……マジ？」
「マジ」

「じょ、冗談とかじゃないよね？」
「疑うなら今すぐ全部脱ごうか？」
「……」
「……グリッドレイ？」
「……お、お願いします♡」
よしきたと言わんばかりに俺は執事服を脱ぎ捨てていく。そしてあっという間に俺はシャツとパンツだけの姿となる。
「うっ……♡」
（し、指揮官の下着姿……まさか、写真に収められる日が来るなんて……♡）
カシャッ……カシャカシャッ……
グリッドレイが震える手で俺の姿を撮影する。多分、相当興奮してるんだろうな……だってさっきからハァハァしてるのが丸分かりだし。
（お、おっぱいが見えそうで見えない位置から撮って……あぁっ！　今すぐこの写真でオナりたい！　抜きたいっ！）
カシャッ……カシャカシャッ……
「……え、えっとっ、次は裸で……！」
「分かった」

「あっ♡」

俺は躊躇(ちゅうちょ)すること無く下着を脱ぎ去り、一糸まとわぬ姿を晒してみせる。何かもう現実世界でもこの世界でもヤバい光景だよ。警察がいたら俺すぐ捕まっちゃうよ。

（こ、これが指揮官の……♡　ごくっ……♡　す、凄……♡）

カシャッ……カシャッ……

「はぁはぁ……♡」

（こ、これは誰にも見せない……例えサラトガちゃんにも見せない……！　私の、私だけの……秘蔵のお宝写真兼オカズなんだから……♡）

カシャッ……カシャッ……

あの～、グリッドレイさん。写真撮って良いとは言ったけど、俺の一物をドアップで何枚も撮るのは流石にアレだと思うんですが。どうせこの写真でオナニーしまくる為なんだろうけど。俺だって逆の立場ならそうするし！

「……も、もう服着て良いよ♡」

「終わったのか？」

「うん……♡」

（永久保存版の写真、こんなに手に入れちゃって……本当に良いのかな？　私、明日沈んだりしないよね……!?）

「……写真だけで良いのか？」
「ふぇ？」
「お前が望むなら、明石と同じように抜いてやるぞ？　何なら本番だって……」
「」
「……グリッドレイ？」
　俺が耳元でそうささやくと、グリッドレイは顔を真っ赤にして震え出す。あ、これはもしかして……
「そ、それはまだ心の準備がああああああぁぁぁぁぁぁッ!!」
「……初心（うぶ）とヘタレの両方だったか」
　頭から湯気を出しながらグリッドレイが走り去って行った。しかし大量のコスプレ衣装を忘れず回収していくところは流石と言うか何と言うか。
　しかし明石でさえ手で抜いてくれと頼んで来たほどなのに。まぁ頼めばヤらせてくれると分かった状態で写真撮影を選ぶくらいだもんな。ちょっと刺激が強過ぎたか、ははっ。

「さぁさぁ指揮官のお宝写真！　今なら何と一枚五百円だよ～！」
「百枚下さい！」
「私は五十枚頼む！」
「あの写真を三百枚！　あっちの写真を三百……あぁ予算が足りないッ!!」
「……あの写真を四百枚いただけないか？」
「し、ししししし指揮官様の際どい水着写真っ!?　ぜ、全財産つぎ込みますわ!!」
「は、ハムマンにも五十枚……」
「ではロドニーに二百枚いただけますか？」
「全てを憎んでいる場合じゃない！　あの写真を三百枚くれないか!?」
「ちょっと！　私の写真撮るフリしてそんなことしてたの!?　ズルい！　サラトガちゃんにも二百五十枚売ってくれないと許さないんだから！」

「私は百二十枚買うプリン！」
「はぁ!?　一枚五百円!?　ぼったくりじゃない！　でもここでしか手に入らないし……うぅっ、百八十枚ちょうだい！　背に腹は代えられないわ！」
「おい抜け駆けするな！　順番くらい守れ！」
「これを逃したら一生手に入らないかもしれないじゃない！　いくら高雄ちゃんの頼みでもお断りよ！」
「……し、執事服のお兄ちゃんの写真を三十枚下さい！」
「ムチとロウソクを持ったいやらしきご主人様の写真!?　ご、五百枚！　シリアスに五百枚下さい!!」
（凄い！　とてつもない早さで売り切れていく！　ま、当然だよね！　だって指揮官のエッチな写真だよ?　売れない方がおかしいよ！　これなら一枚千円にした方が良かったかな?　よし、次からそうしよう！）
「……♡」
（でも、あの写真は私だけの物♡　一通り売り終えたら、後でトイレに籠って……えへ、えへへへぇっ♡）

１２

チュンチュン……

「……」

窓の外を見つめると、既に太陽が昇っている。同時に、小鳥達がさえずり、多くの者にとって爽やかな朝がやって来たことを伝えている。

しかし、我はそのような生温(ぬる)いこと等一切考えていない。朝焼けを呑気に楽しむ程、我は俗物的な人間では無い。否、そもそも人ですら無い。

我は今、とてつもなく重大なことを考えている。これまで世界を憎み、いずれは世界を敵に回し抗うことを覚悟していた我だが、それが些細なことだと言っても良い程に重大なことだ。

「……グラーフ？　朝日を見つめて何を考えている？」

「ん？　Ｚ４６(フィーゼ)か。悪いが邪魔をしないでもらえるか？　気が散ってしまう」

「そうか。すまなかった」

（あのグラーフがこれまでに無い程真剣な表情で思考を巡らせている……これはまさか、何か深刻な悩みが……）

「今朝一発目のオナニーをどの写真でヤろうか迷っている途中なのだ」
（なるほど、それは確かに深刻で重大なことだ）
毎朝の日課だぞ？　何より指揮官のあられも無い姿が刻まれた写真で抜けるのだぞ？　誰でも真剣に考えるに決まっているだろう！
むしろこのような写真を所持していて、不埒なことを一切考えない女がいたとすれば……そいつは同性愛者か、既に枯れているかのどちらかだ。いやマジで。
え？　我？　もちろん毎日、それも一日最低五回はオナってよがり狂ってますが何か？　ＫＡＮ―ＳＥＮの中ではむしろ少ない方だと思うぞ？
確かドイッチュラントとヒッパーは二十回を軽く超えて……話が逸れた。とにかく、女にとってオカズ選びは何よりも重要なのだ。それと比べればセイレーン退治等ちっぽけなこと。
「三百枚もあると、選ぶだけで一時間以上かかってしまうこともザラだからな……」
お陰で今月は節約生活確定だが後悔はしていない。あの場で買っておかなければ、い

ずれ血涙を流しながら本当に全てを憎むことになっていたかもしれぬからな。
「だからグラーフは毎日、ほぼ全ての者が眠っているであろう早朝に起床しているのか」
「そう言うフィーゼも、こんな時刻に起きている時点で人のことを言えないのでは無いか？　どうせ目的も我と同じなのだろう？」
「もちろんだ。むしろそれ以外の理由が無い」
　実際フィーゼもあの場を訪れ、指揮官の水着写真を百枚程買っていた。我もあの写真を買おうかとかなり迷ったな……結局は別の写真を買ったのだが。
「……よし、今日はこれにするとしよう」
「ブーメランパンツの写真か。見ているだけで子宮が疼いてしまう」
　フィーゼが股を抑えながら、顔を赤くしつつハァハァと聞くに堪えない吐息を漏らしている。同性の興奮した声を聞いても誰得でしか無いだろう。これが異性の、それも指揮官の吐息なら今すぐ深呼吸しながら肺に蓄えるところだが。
　何はともあれ写真を決めた後はいつも通りトイレに籠るだけだ。この時間帯なら三十分ほど個室を占領しても、誰にも迷惑はかからない。毎朝オナっているから我だからこそ断言出来る確かな情報だ。
「フィーゼも早く選んだ方が良い。時間がかかると他のＫＡＮ―ＳＥＮ達が目を覚まし、個室の取り合いとなってしまうからな」

「分かっている。しかし、どれも捨てがたい……」

未だ百枚の写真を眺めながら吟味しているフィーゼに背を向け、我は戦場（トイレ）へと向かう。正直もうムラムラし過ぎて今すぐにでもオナりたいが、流石に人前でそんなことをするほど我も猿では無い。

万が一指揮官に見られでもしたら、我は色々な意味で再起不能になる。いやだって女がオナってるところを男に目撃されるのだぞ？　間違い無くドン引きからの通報で我の艦生終了コースまっしぐらに決まっているだろう！

「あぁっ♡　け、卿のこのようないかがわしい姿っ♡　もはや水着に浮き出る巨根がエ

口過ぎてダメだっ♡　今すぐむしゃぶりつきたいっ♡　いやそれより我の膣内(ナカ)にねじ込みたいっ♡　そして奥の奥まで突っ込んで味わいたいっ♡　これが我の中に入ると思うだけで濡れるっ♡　手が止まらないっ♡　んうぅっ♡　いやでも薄い水着で隠された胸もっ♡　男らしく硬そうな胸板を余すところ無く触りたいっ♡　この手で存分に揉みしだいてっ♡　卿の喘ぎ声を聞きたいっ♡　そしてそのまま乳首に吸い付いてっ♡　いや乳首だけじゃなくて熱い口づけもっ♡　あぁっなんて甘美なっ♡　想像するだけで濡れるっ♡　んあっ♡　卿っ♡　卿卿卿っ♡　い、イくっ♡　ダメだイくっ♡　っくうううぅぅぅぅぅっ♡♡♡」

プシャアアアアアアアッ！

「はぁっ、はぁっ……♡　や、やはりこの時間は至高だ……♡　いや余韻に浸っている場合では無い。今日は我が秘書艦だし、そろそろ指揮官の元へ行かなければ……」

手早く股間を拭き、我は何事も無かったかのような顔をして指揮官の部屋を訪れる。これぞ秘書艦の特権だ。朝から男と共に過ごせるとなれば、大半の女にとってご褒美だろう。

いや待て。男は女のそういう行為を見抜くのが得意なのだ。もう一度窓ガラスで自分の姿を確認する。表情はだらしなくないな？　服は乱れていないな？　下着は濡れていないな？　……よし、問題無い。

「……おい。起きているか？」

『ん？　その声は……加賀か？　いや愛宕か？　それともレナウン……』

「全員違う。せめて間違うなら小さい我と間違えてくれ」

確かに今挙がった者達は我と同一人物かと思うほど声が似ている。故に聞き間違える気持ちは分からなくも無いが。

『冗談だよ。グラーフだな？』

「分かっているなら最初からそう言えば良いだろう」

『ははっ、すまんすまん。ちょうど準備を終えたところだ』

十秒もしない内に目の前のドアが開かれ、卿が姿を見せる。ふむ……

「今日は秘書艦よろしくな？　さて、早速朝飯でも食いに……」

この前のように下着では無いのか少し残念だなしかし上着越しでも卿はエロい恐らく寝ている間にかいたであろう汗が肌を湿らせている姿が官能的だそして寝起きであることが伺える無防備な表情もそそられる脳内フォルダに永久保存しておこうこの顔だけで軽く五回はイケる出来ることなら寝顔も見てみたかったが女が男の部屋に侵入する等バレればただでは済まないからな残念だが叶うことは無いだろうしかしこうして秘書艦として起床直後の卿と共に行動出来るだけでも贅沢と言うものだここにいても卿の甘い香りが漂ってくる男はどうしてこう良い香りがするのだろうな女はすぐ男から汗臭いだの変な臭いだの言われるというのにおっと話が逸れたそれにしても卿はいつ見てもエロい身体をしているあの胸板に顔をうずめられればどれほど至福の一時を過ごせるだろうか今すぐにでも飛び付いてむしゃぶりつきたいいや耐えろ耐えるのだグラーフツェッペリンここで我が理性を失えば全てが終わる何の為に先程抜いてきたと言うのだそれに卿は我を信頼して秘書艦に抜擢してくれたのだその信頼に答えねばなるまいだがしかしこのような性欲を煮えたぎらせる男と常に一緒ではどうしてもムラムラしてしまう下着を濡らそうものなら男である指揮官にすぐバレてしまうそしてセクハラだと思われれば我は終わるそれだけは避けなければだがやはり卿は見れば

見るほどエロくて理性を削られるきっとそのズボンの下にはあの巨根が隠されてじゅるっ♡おっと涎なんて垂らせば卿に引かれてしまう我慢しろここは我慢だ重桜でも耐え忍ぶことが美徳とされているようにここが我慢のしどころなのだあぁでも目の前にエロい男がいて耐えなければならない等ただの拷問に近いでは無いかうぐぐ……！

「……おぉう」

（こいつ、俺をねっとりした目で舐め回すように見てるな……この世界に来てから、ＫＡＮ―ＳＥＮ達の視線に敏感になってしまった。エロい目で見られてたらすぐに分かるんだな～これが）

我達は朝食を済ませると、指揮官はそのまま書類仕事へと取り掛かる。秘書艦である我は基本的に卿のサポートに徹する為、仕事らしい仕事はそれほど多くない。

すなわち、仕事をしている卿を合法的に横から視姦……いや眺めることが出来るという訳だ。正直この為だけに秘書艦に立候補するＫＡＮ―ＳＥＮが後を絶たない。

もっとも、立候補したところで秘書艦は卿が独断で決める以上、誰が選ばれるかは完

全にランダムだ。故に我はかなり運が良い方だろう。卿に選ばれ、一日だけとは言えこうして卿の隣にいられるのだからな。

「あづいぃ……」

「エアコンはまだ直らないのか？」

「いや、業者に連絡はしてるんだけど、いつまで経っても直しに来ないんだよ……どこもかしこも故障の連絡が来て、修理が追い付かないんだとさ」

「そうか……」

既に鉄血の中でも夏バテでダウンしている者が出ている。小さい我もこの前からパンツだけで寝転がってアイスを舐めているほどだ。かくいう我も先程から汗が止まらない。

ただでさえ長い髪のせいで頭が蒸れて仕方が無いのだ。しかしバッサリ切ってしまうというのも抵抗がある……だが、今はそれ以上にエアコンが壊れていて良かったと本気で思っている。何故なら……

「くっそぅ……暑さで集中出来ねぇ……扇風機じゃ無理だ。早くエアコンの風に当たりてぇ……」

こうして汗で肌を濡らす卿の姿を拝むことが出来るからだ！　この女だらけでむさ苦しい母港に住む我らにとって、卿だけが心と股間のオアシスなのだから！

「うわっ、汗拭きタオルがあっという間にビショビショだよ……頼むから早くエアコン直しに来てくれよな……」

今だって汗がしたたる卿がエロいエロ過ぎる今すぐその汗をペロペロしたい身体中の汗を舐め尽くしたいいやそれだけじゃない蒸れた髪に顔を突っ込んで思いっきり嗅いでみたいきっとかぐわしい香りがするのだろうなそして卿からは汗と男特有の良い匂いが漂ってきて我の理性を破壊するのだろうあぁ想像するだけで興奮するだがそんなことをすれば卿にゴミを見るような目で見られてしまうだろうそれはそれで興奮するが恐らく逮捕は免れまいならせめて卿の汗が染み込んだタオルだけでも欲しいたかがタオルされどタオルだ恐らく極上の香りを凝縮しているはずだ嗅ぎたい今すぐ嗅ぎたい顔をうずめたい鼻と口で思う存分吸い込んで卿の匂いを肺に充満させたいどうして男という存在は汗をかくだけでエロさが増すのだろう生命の神秘だちょっと待てこの前テレビでエリート塩なるものが作られていたな卿の汗から抽出した塩でお握りを作ればさぞ美味いことだろうあぁ食べたい今すぐ食べたい何ならそのタオルを絞って出た汗を直飲みしても良い程だ卿よどうか我にそのタオルを譲ってはくれないか決して鉄血の者にバラしたりはしない我だけが独占してエリート塩を作るだけだ悪用するつもり等無い欲を言えば卿の汗と肌を直接ペロペロしたいがそんなことをすれば逮捕確定だからせめてタオルの汗だけでも味わわせて欲しいいやさっきから何を考えてい

るのだ我はついに暑さでやられたかいや暑さでは無く卿の魅力にやられたのだこんな部屋の中で男と女が二人きりなのだぞそういう思考にならない方が女としておかしいだろうだから許して欲しい我は普通だ正常なのだ卿に劣情を抱くことは女なら当然なのだだからそのタオルを譲ってくれ今すぐ汗の味を堪能させてくれあわよくば卿の汗を舐めさせてくれ頼む何でもするから……！

「……」

（そこまで血走った目でガン見されると怖いんだが。こいつさっきから興奮し過ぎだろ。俺自身暑さでかなり参っていた自信があったのにグラーフが鼻の下伸ばしまくってて思わず冷静さを取り戻したぞおい。こんなグラーフ、現実世界じゃまず見られないだろうな……）

昼食も取り終え、今は午後三時を過ぎたところだ。我が股間と子宮から込み上がる欲望に抗っていると、ふと卿がアイスを持って来た。

「このクソ暑い中付き合わせて悪いな。せめてこれでも食べて涼もうぜ」

「いつの間に買いに行ったんだ？」
「自前の冷蔵庫に買い溜めしてあるんだよ。ほら、グラーフも食えよ。冷たくて美味いぞ？」
「……いただこう」
　見た感じ、これはバニラ味か？　それともミルク味か……どちらにしても美味そうだ。この季節のアイスは格別だからな……思わず我も己の目的を忘れ、アイスに魅了されてしまうほどだ。
　一口食べてみると、バニラの甘い味と冷たい感触が口の中に広がっていく。暑さで暴走していた頭がじんわりと冷えていくのを感じる。あぁ、これは良い……この世も捨てたものでは……ブフゥッ!?
「ん……じゅるっ、美味いな……ちゅぱっ、んむっ……」
　け、けけけけ卿!?何なのだその食べ方いや舐め方はワザとやっているのかどうしてそんなエロい舐め方をするのだまさか我を誘惑しているのかそれとも試しているのかいやからかっているのかあぁ音を立てるなアイスに舌を絡めさせるな興奮するでは無いかそのヌルリとして柔らかそうな舌で我の秘所を舐め回して欲しいと思ってしまうきっと想像を絶する気持ち良さなのだろうな入口を舐め取られ奥まで舌を入れられて膣内（ナカ）をかき乱されて愛液すら飲み干されていやむしろ我の舌をねじ込んで卿の口内を

舐め回したい舌と舌を絡めてお互いの唾液をすすり合ってあぁダメだどうしても思考がエロい方へと向いてしまうだが仕方無いではないか目の前でジュルジュルといやらしい音を出しながらねっとりとアイスを舐める男を見たら女であれば誰だってムラッとくるに決まっているだろうまさか無自覚か無自覚なのかだとしたらまずいいつか誰かに襲われるぞ女なんて皆例外無く狼なのだ我だって欲望を必死に抑えているというのに卿は無警戒にも程があるいやもしかして我を信頼しているからこその油断かそれなら嬉しくもあるが同時に辛いこの状況に耐えねばならないというのが辛過ぎるだが眼福だ卿がこんなにエロくアイスを舐める姿を見られるのは眼福だ写真だけで無くこの光景を思い出すだけでも抜けそうだ何なら妄想でエロさを増強させることだって出来る女の性欲を舐めないでもらいたい今だって下半身が濡れ待て待て待てそんなことになれば卿に勘付かれてしまう堪えろ堪えるのだグラーフツェッペリン卿にバレたら全てが終わる鉄血空母としての意地を見せるのだくぅっ！

「……はは っ」

（お～露骨に慌ててるな。ちょっとアイスをねっとり舐めただけでこれだ。こいつの反応面白過ぎるだろ。見ているだけで飽きないな……ようし、それなら次は……！）

13

「いや～今日の晩飯も美味かったなぁ」
「そ、そうだな……はぁはぁ……♡」
グラーフの狼狽えっぷりを眺めながらダラダラと仕事をしていたら晩飯の時間となり、後は風呂に入って明日の仕事内容をザッと確認したら終わりだ。隣に立つグラーフは相変わらず目が血走っていて呼吸が荒い。
と言うか露骨にハァハァしてるもんだから思わず吹き出しそうになる。グラーフ本人はこれでも隠しているつもりなのだろうが、現実世界で童貞だった俺には、彼女の気持ちがそれはもう手に取るように分かる。
どうせ俺が上着を脱いで薄着にならないかとか、さっきのアイス舐めを思い出して悶々としているか、あるいは処女特有の凄まじい妄想力でグラーフの脳内の俺が滅茶苦茶に犯されていることだろう。
そこで俺はグラーフの性欲を刺激してやることにした。上手くいけばグラーフともセフレになれるかもしれない。いや別に今すぐ「俺とセックスしようぜ☆」と言っても良いのだが、どうせならもっとからかって面白い反応が見たい。

もちろんグラーフが我慢出来ず襲い掛かってくることも承知の上だ。むしろウェルカムなので率先しておちょくってみようと思う。もはや俺は取り返しのつかない変態兼ビッチになっているが、そんなことはどうでも良い!!

「さて、そろそろ風呂にでも入るかな」

「っ!!」

そう言いながら俺は上着を脱ぎ、それを椅子にかける。理由としてはグラーフが俺の汗の匂いが染み付いた上着を見てどんな行動を取るかを見てみたいのが大半だが、単純に明日も着る故にまだ洗濯する訳にはいかないから部屋に置いておく為でもある。

グラーフの様子を見てみると、明らかにさっきよりも鼻息を荒くして上着を凝視している。よしよし、効果は抜群なようだ。俺だって逆の立場なら多かれ少なかれ興味を示す自信がある。だって異性の匂いが染み付いた服だぜ?　ちょっとは嗅ぎたいと思わないか?

「悪いがしばらく待っててもらえるか?　ここにいるのが落ち着かないなら一時的に自室へ戻ってくれても良いぞ?」

「い、いや、問題無い。ゆっくりと汗を流してくるが良い……ゆっくりとな……♡」

(出来れば一時間以上かけてくれるとありがたいが……♡)

ゆっくりを二回言うグラーフ。大事なことだもんな、うん。この時点でこいつがナニ

をするつもりかは予想出来た。俺は風呂に入りに行く……フリをして、ドアを閉める素振りを見せながら僅かに隙間を開けておく。もちろん部屋の中を覗く為だ。
（卿は行ったな……？）
　グラーフは外の様子を伺うようにドアの方を眺めている。恐らく俺が風呂場に向かったかを確認しているのだろう。実際には風呂場に行くどころか、息を殺してニヤニヤしながらお前をドアから覗いてる訳だが。
「ふへへ……♡　け、卿の上着ぃッ!!」
　うわすげぇ。俺がいなくなったと思い込んだ瞬間、恐ろしい速さで椅子に被さった上着をぶん取って抱え込みだしたぞ。まず間違い無く匂いを嗅ぐだろうとは思っていたが、迷いが無さ過ぎてまた吹き出しそうになった。葛藤のかの字も無いなおい。
「すうううううぅぅぅーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
　しかもこれ嗅ぐっつーより吸い込んでね？　上着を鼻どころか顔全体に押し付けて思いっきり吸い込んでね？
（ふやあああああぁぁぁっ♡　し、指揮官の匂いぃっ♡　男ってどうしてこんな良い匂いがするんだぁ……♡　汗まで鼻腔をくすぐる香りだなんてぇ……♡）
「すぅぅぅぅっ！　はぁぁぁぁっ……♡　あっ、こ、これはダメだ……病み付きになるぅっ……♡」

うーんこの変態（ブーメラン）。俺の上着を顔に擦り付けながら、これでもかと言うくらい幸福に満ち溢れた顔をするとは。お前全てを憎んでるとかぜってー嘘だろ！　本気で全てを憎んでたらこんな幸せそうな表情出来るか！

「すぅーっ！　すぅーっ！　んふぅっ♡　くふっ……♡」

（嗅ぐたびに信じられないほど甘美な香りが鼻に広がってぇ……っ♡　麻薬だっ♡　嗅いだ女全員を虜にする禁断の麻薬だぁ……っ♡　今だって股間が疼いて……♡）

「……んっ♡」

おっ。グラーフが片手で俺の上着を顔面に押し付けながら、もう片方の手をスカートに伸ばし始めたぞ。上着の匂いだけでオナるつもりか。俺が後何分で帰って来るか分からないのに、その場でオナり出すなんて……よっぽど興奮したんだな。普通ならいくら処女でももう少し警戒するだろうし。

「あっ……♡　んくっ……♡」

（き、気持ち良い……♡　まるで指揮官の胸板に顔をうずめながらオナっているかのようだ……♡）

ここからだと流石に小さな音は聞こえないが、あそこまでスカートの中に手を突っ込んで動かしてたら明らかにオナってることは分かる。ただこれ、現実世界で例えると女上司の上着でシコってる男ってことだよな……うん、女上司の立場が俺じゃ無かったら

かなり危ない光景だわ。

「ひあっ♡　そ、そうだ……どうせなら、上着で直接……♡」

ん？　上着を顔から離した？　まだイったようには見えないが……いや待った。上着を股間に近付けて……ははぁ、そういうことか。こいつ暑さとムラムラで正常な思考が出来なくなってるな。でもまぁ気持ちは分かる。異性の服を性器に擦り付けるって興奮するよな。薄い本でたまに見かけるシチュだし。

だがこのまま黙って見ている俺じゃ無い。ただ性欲を刺激するだけなら、それこそ本当に上着を放置したまま俺は風呂でサッパリしても良かった。でも俺の目的はセフレを増やすこと。グラーフが俺の上着でオナるというレアな光景も見られたし、そろそろ……

「まさかグラーフが俺の上着でオナニーする変態だったとはなぁ～？」

「……え？」

グラーフがおっぱじめようとしてる所に突入しちゃいますか！　そう考えた俺は勢い良くドアを開き、そのままグラーフの眼前までズカズカと歩いて行く。

「あっ、け、けけけけ卿!?　風呂に行ったのでは無かったのか!?」

「残念でした～！　実は風呂入りに行くフリして、グラーフが俺の上着にどんな反応するかこっそり覗いてました～！　にしてもいきなり上着を掴み取って嗅ぎまくるとは

なぁ。随分と溜まってたようで～」

　ダメだついニヤニヤしてしまう。だって幸せそうな表情でオナるグラーフが可愛くてくっそエロかったからさ。

「こ、これはその……いやあのっ、そ、そうだ！　我が代わりに洗濯してやろうと……」

「いやいや顔うずめて思いっきり深呼吸してたじゃんか。しかも途中からオナりだしたし」

「う……」

　グラーフがみるみる内に顔面蒼白になっていく。そりゃそうだろうな。グラーフからしてみれば自分の人生が終わったような状況だもんなこれ。

「そ、その……これは、えっと……」

（終わった……我の艦生、完全に終わったぁ……）

「……グラーフ」

「け、卿……んむっ!?」

　グラーフのレアで面白い反応は十分に見られたので、ここからは俺の本当の目的を達成すべく行動する。どうせ俺はこの世界では凄まじいビッチだし、たまにはこういうアプローチも良いかな～って。と言う訳でいきなりグラーフのファーストキスを奪っちゃいました。

「んむぅっ」
「んんっ♡　んくっ、ちゅぷっ♡　じゅるっ……♡」
（け、卿がいきなりキスしてきた!?　ど、どうして……あぁだが卿の柔らかい唇と舌の感触がぁ……♡）
流石に三人と肉体関係を持っている身としてはキスくらいお手の物で、グラーフの唇を貪り、強引に舌を入れ込んでグラーフの口内を余す所無く舐め回す。歯茎や頬はもちろん、互いの舌を絡ませることも忘れない。
「んうっ、んむっ……」
「くちゅっ、ちゅるっ♡　ぷはっ！　んむぅっ♡　れろれろっ♡」
（あっ、卿の舌が絡まって……♡　それに唾液が流し込まれてぇ……♡）
じゅるじゅると下品な音を立てながら、グラーフの唾液をすすっていく。同時にグラーフも、意識しているのか無意識なのかは分からないが、俺の唾液を飲み干していく。
「れるっ、ちゅくっ♡　んむぅっ♡　ちゅぷっ……♡　じゅるっ♡」
（はぁっ……♡　卿とのキス、気持ち良い……♡　我の口の中を、卿の舌がうごめいて……♡）
「ぷはっ！」
「ぷあっ♡　はぁはぁ……♡　け、卿……これはどういう……♡」

「……俺とヤりたいか？」
「えっ……？」
「だって、俺の上着で我慢出来ずオナるくらいだし、相当溜まってるんだろ？　だったら俺とスッキリしないか？」
「……じ、自分が何を言っているのか分かっているのか？」
（女に……それも交際していない女に……しかも上着の匂いを嗅いでオナっていた女に、男が自らの貞操を差し出そうだなんて……夢か？　これは夢なのか？　いや、夢でも現実でもどちらでも良い！　卿とヤれる日が来るだなんて……！　だが、それ以上に……）
「今まで、そんな素振りを見せなかっただろう……何故急にそのようなことを……いや、我としては願ったり叶ったりではあるが……」
「だってグラーフ達にはいつも頑張ってもらってるからさ。俺だって、こういう形でグラーフ達を癒してやれないかなと思って」
　もちろんいつものビッチ臭半端無い説明も忘れずに付け足しておく。
「……」
（ま、まさか卿が既に三人のＫＡＮ―ＳＥＮと肉体関係を持っていただなんて……道理で先程のキスも上手い訳だ……）

「上着については試すような真似をして悪かった。けど、隣で露骨に欲情してるグラーフが可愛くてさ。ついからかいたくなっちゃったんだ」
「……か、隠しているつもりだったのだが」
「いやいや全然隠せて無いから。あれだけ鼻息荒くされたら誰でも気づくって」
「……」
（死にたい。誰か我を殺してくれ……いややはりダメだ。卿とヤれるチャンスが目の前にあるというのに、このまま死ぬ訳には……！　せめて物理的にも社会的にも死ぬなら、卿と一発ヤってからだ……！）
「……ほ、本当に良いのか？」
「グラーフさえ良ければな」
「いや、卿が三人と肉体関係を持っていることは気にしていない。そうでは無く、あのようなことをした我と……シてくれるのか？」
「もちろん。それにさっきも言ったけど、欲情してるグラーフ……凄く可愛かったし」
「卿……」
（……すまない、Ｚ４６（フィーゼ）。我はお前より一足先に処女卒業させてもらう……ふふっ♡）

１４

「よいしょっと」
「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ♡」
　あえて焦らすように服を少しずつ脱いでいく。グラーフは既に性欲の限界を超える直前らしく、さっきから目を飛び出させる勢いで俺を眺めて……いや、これはもう視姦してると言って良いレベルだな。
「……あのさぁ。別に興奮するのは構わないんだが、ちょっと鼻息荒過ぎないか？」
「仕方ないだろう！　先程オナろうとしたところでお預けを食らったからな！　しかも目の前に半裸の男卿がいるんだぞ!?　女であれば誰もがこうなるに決まっている！」
　うんそれは知ってる。エンタープライズも雪風も目が凄く血走ってたからな。あれは野獣の目だった。現実世界で言うところの理性が崩壊した男と同じ目だったわ。
「ははっ、そうだろうな。ではそろそろ……んしょ」
「あっ……♡」
（け、卿の裸体が……♡　上半身裸の姿が……我の眼前に……♡）
「さて、次はズボ……」

「も、もう我慢出来ないッ!!」
「おっと危ない」
ズボンに手をかけようとしたらグラーフが飛び掛かってきたので、慌てず受け止める。あー、これは焦らし過ぎたか？　本当はもう少し興奮し過ぎてだらしない顔になってるグラーフを見てみたかったんだが……
「卿の汗……卿の汗……れろっ♡」
「うひゃっ!?」
「んむ……♡　れろっ、じゅるぅ……♡」
「お、おいグラーフ。お前何して……」
てっきりそのままセックスするのかと思ったが、グラーフは恍惚とした表情を……いや違うな。理性なんてかなぐり捨てたような、それはもうだらしない顔をしながら俺の汗を舐め始めた。
「んじゅる……♡　ぺろぺろ……♡　こ、これが卿の汗……卿の胸……♡　何と甘美な味だぁ……♡」
もしもし海軍部？　ここにやべー変態がいます（自分のことは棚に上げていくスタイル）。
「はむっ、ちゅるっ♡　れろれろ……♡」

「……男の汗なんか舐めて美味いか？」
「当然だろう！」
　目を輝かせてそう言い切るグラーフ。確かに現実世界で例えれば、女の汗を男が舐めている状況ということになるが……こればかりは、自分の体を汗臭いと感じる俺にとって、グラーフの言い分は頭で理解出来ても感覚では理解出来そうにない。
「ちゅぷっ……♡　はぁっ……♡」
「……満足したか？」
「……♡」
「っておい。無言でズボンのファスナーを下ろそうとするな」
　グラーフは目をハートにしながら、相変わらず息を荒くしながら俺のズボンに手をかける。すると俺の一物がファスナーから飛び出すように姿を見せる。ちなみにさっきグラーフがオナろうとしてるところを覗いてたお陰で、息子は既に臨戦態勢ですはい。
「お、おぉ……これが卿の……♡」
（胸を濡らした汗でさえ極上の味わいだと言うのに、これが卿の分身となれば……一体、どれほどの味わいが……♡）
「すんすん……ふあぁっ♡」
（あぁっ、感じる……♡　男特有のかぐわしい香りと、汗の香ばしい香りが混ざり合って

……ダメだ、このような物を見せられては……♡）
「……グラーフ？」
「で、ではいただくとしよう……はむぅっ♡」
「うおぉっ!?」
　いきなり咥えやがった!?　そういや今までエンプラ達とセックスばかりしてきたけど、フェラはされたことなかったような……
「んふぅっ♡　んじゅる、んむぅ……♡」
「っく……！　そ、そんな喉奥まで……！」
　強烈な快感が脳に飛び込んでくる。グラーフの頬の肉の感触、生温かくてヌルリとした唾液、絡み付く舌……これはヤバい。気を抜くと暴発してしまいそうだ……！
「じゅるじゅるっ♡　じゅぷじゅぷっ♡」
（美味い……あぁ、美味い……♡　先程も感じた汗の味と、僅かに香る刺激臭……それでいて硬く、生温かい……♡　これは毒だ。甘くて止められなくなる毒だぁ……♡）
「んじゅるっ♡　れろれろれろっ♡　じゅるっじゅるっ♡」
「くあぁっ……！　ぐ、グラーフっ！　それヤバっ……！」
　一物の上から下まで柔らかい舌が絡み付かれるだけでも腰がガクガクするのに、同時に口をすぼめて上下に擦られると……！

「じゅぽっじゅぽっ♡　じゅるるるるっ♡」
（感じているのか？　我の口と舌で感じてくれているのか……？　そういうことであれば……♡）
「……じゅぽじゅぽじゅぽっ♡」
い、いきなりフェラが激しくなった!?　まさかこのまま俺を口でイかせる気か!?
「ちゅぼっちゅぼっ♡　んむっ、ぐじゅっぐじゅっ♡」
「くおぉ……っ！」
口をすぼめながら、奥の奥まで飲み込もうとするなんて……！　グラーフの口まんこって、こんなに最高だったのか……！
（早くっ♡　早く出してくれっ♡　卿のザーメンが飲みたいっ♡）
「じゅぽっじゅぽっ♡　れろれろっ♡　じゅるじゅるっ♡」
「ぐ、グラーフ……！　もうイきそうだ……っ！」
「んふぅっ♡　ちゅぼちゅぼちゅぼっ♡　ぐじゅぐじゅっ♡　じゅるるるるるっ♡」
ここぞと言わんばかりにグラーフが口と舌を激しく動かして、俺から精液を搾り取ろうとしてきた。その瞬間、下半身が一気に脱力し、グラーフの口内に思いっきり射精する。
「かはっ……！」

ビュルルルルルッ！　ドプドプッ！
「んうううううっ♡」
（き、きたぁ……♡　卿の精液い……っ♡）
「んんっ♡　ゴクッゴクッ♡　んむぅっ♡」
（あぁっ……♡　これが卿の味か……♡　熱くてドロドロで、喉に絡み付いて……♡
一度知ると戻れなくなる味だぁ……♡）
うわっ、全部飲んでる……てっきり吐き出すかと思ったが、グラーフはえずくことすらせず俺の一物から飛び出る精液を飲み干していく。
「んんっ……♡　ちゅうううっ♡」
「あっ、くふっ……！」
そろそろ射精が終わるというタイミングで、まだ俺の一物に吸い付いてくる……！
こいつ、尿道に残っている精液まで飲み込むつもりか……！
「ぷはっ♡　ふぅ……♡」
「……だ、大丈夫か？　無理してないか？」
「とんでもない……むしろ、また飲みたいと思ったほどだ……♡」
とろけた表情でそう言うグラーフ。えっ、マジで美味かったのか？　俺が知る限り、ザーメンはくっそ不味いものだと聞いていたが……これも貞操逆転世界の影響か？

確かに現実世界のエロ同人やＡＶでは、男が女の愛液を飲んで吐き出す作品は見たことないけど……

「これで胃袋は卿で満たされた。次は下の口で味わうことにしよう……♡」

「ちょっと待ってくれ。その前にゴム付けるから」

　そのままグラーフが押し倒そうとしてきたので、俺は制止してポケットからゴムを取り出す。何度でも言うが妊娠だけはマジで洒落にならないからな。

「……♡」

「いやいやいやいやストップストーップ！　何無言で挿入れようとしてんだ!?　まだゴム付けてないだろ！」

「ゴムありなんて嫌だ！　我は卿と生でセックスしたい！」

「がっつき過ぎだろ！　気持ちは分からなくもないけど、万が一妊娠したらどうするんだよ！」

「我がアフターピルを飲めば済む話だ！」

「そ、そこまでして生でシたいのか……」

「卿が言ったのだからな!?　我とセックスしても良いと!!」

「近い近い近い！　分かったよ！　ゴムは付けない！　その代わり、後で絶対にピルを飲んでくれよ？」

グラーフがあまりにも必死に訴えかけてくるので折れてしまった。そうか、これが彼氏にゴム無しセックスしようと言われてＯＫしちゃう彼女の気持ちか……油断して孕ませないようにしないと。

もっとも、この世界ではどちらかと言えば俺ではなくグラーフが責任を問われる立場になりそうだが、何にせよ大変な事態に陥ることは間違いないからな。

「心配せずとも卿と交わした契りは必ず守る！」

（よし、これで生セックスの合意を得た！　では早速、卿をいただくとしよう……♡　これ以上お預けを食らえば、僅かに残った理性さえ無くなってしまうからな……♡）

「い、挿入れるぞ……？」

「あぁ……ん？　でもいきなり突っ込んだら痛いんじゃ」

「んうっ♡」

ずぷぅっ♡

「うっ……！」

「ふあぁっ♡　け、卿のが入ってきたぁ……っ♡」

エンタープライズといい雪風といい、前戯せずに即挿入れる奴ばっかりかよ！　今のところ、まともに膣内をほぐしてから挿入れたのって伊１９だけじゃん！

「はぁはぁ……♡」

「ぐ、グラーフ？　痛くないか？」
「平気に決まっているではないか……♡　先程のオナニーと卿の精液を飲んだことで、既にぐしょ濡れだったからな……♡」
「……そうか」
とりあえず痛みは無いようで安心した。やはり戦艦や空母（一部の合法ロリ達は除く）のような大人なら、濡れてさえいれば痛みが緩和されるのだろうか。
ぐちゅっ♡　ずちゅっずちゅっ♡　ぱんぱんぱんっ♡
「んうっ♡　や、やはり自分でスるのとは全然違う……♡　太くて硬いのが、我の膣内（ナカ）で暴れてぇ……っ♡」
「さ、最初から激しいな……！」
まるでエンタープライズに襲われた時のようだ……！　グラーフはいきなり腰を激しく上下に動かし、さっき出したばかりの俺から子種を搾り取ろうとする。
ずぷっずぷっ♡　ごちゅごちゅごちゅっ♡
「はぁぁ……っ♡　お、奥まで突き刺さるのかのようだぁ……♡」
（フェラしていた時から予想は出来ていたが、まさかここまで気持ち良いなんて……♡
この快感を知ってしまったら、もう写真でのオナニーに戻れない……っ♡）
ばちゅっばちゅっ♡　ぱんぱんぱんっ♡

「ふあっ♡　け、卿っ♡　卿いいっ♡」
「くぅっ……！　グラーフの膣内（ナカ）、最高だ……っ！」
熱々で、トロトロで、肉壁がグニュグニュと蠢（うごめ）いて……俺がもし童貞だったら、この押し寄せる快感に耐えられず速攻で射精していたかもしれない。
「う、嬉しいことを言ってくれるではないかぁ……♡　卿のそそり立つ肉棒も、格別だ……っ♡」
どちゅっどちゅっどちゅっ♡　ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡
「ふあああぁっ♡　子宮にグリグリ押し込むの、病み付きになるぅっ……♡」
ぽよんぽよんっ♡　ぷるんぷるんっ♡
「……」
グラーフが動くたびに、豊満なおっぱいが上下にバルンバルン揺れる。これはもうアレだよな？　触らないと逆に失礼だよな？
「……そりゃ」
むにゅんっ♡
「あんっ♡　け、卿!?　何を……」
「何って、おっぱい揉んでるんだけど」
むにゅむにゅっ♡　ぐにゅぐにゅっ♡

「んきゅうっ♡　お、女の胸なんか揉んで何が楽しいんだ……？」
「俺って筋肉フェチだからさ。女の子のおっぱいに目がないんだよね」
　もにゅもにゅっ♡　ぐにぐにぐにっ♡
「はぁっ♡　そ、そうか……随分と珍しい趣味だな……んくっ♡」
　そういえば、この世界ではヒッパー……失礼。貧乳ってどういう扱いなんだ？　おっぱい星人が筋肉フェチとして捉えられるということは、巨乳が筋肉ムキムキで、貧乳がもやしってところか？　どっちにしても、現実世界ほどコンプレックスにはなっていなさそうだな。
　だって現実世界なら、やたらとムキムキな男は多少注目されるとしても、別にもやしだったり筋肉が全然付いていなくても馬鹿にされたり煽られることはまず無いからな。
　あ、俺のような軍人は身体を鍛えていないとダメだけど。
　ずっちゅずっちゅずっちゅ♡　ぱちゅぱちゅぱちゅっ♡
「んふぁっ♡　こ、腰がっ♡　腰が止まらないっ♡　あぁんっ♡」
（名器とは卿の為にあると言って良い言葉だ……♡　挿入れてすぐに分かった。卿の肉棒は、我の醜い欲を受け入れてくれるのだと……♡）
　ごちゅっごちゅっ♡　ぱんぱんぱんっ♡
「ぐ、グラーフ……俺、もう……っ！」

「わ、我もっ♡　我もそろそろ……っ♡」
グラーフがここぞとばかりにだいしゅきホールドしてきた。それに応えるように俺もグラーフを力一杯抱き締める。
ばちゅっばちゅっばちゅっ♡　ごりゅごりゅごりゅっ♡　ぱんぱんぱんっ♡
「あぁっ♡　もうダメだっ♡　イくっ♡　イくぅぅぅっ♡♡」
「くあぁぁ……っ！」
ビュルルルルルッ！　ビュクビュクッ！　ドプッドプッ！
「うあああああぁぁぁっ♡　で、出へるぅっ♡　卿の欲望が我の膣内（にゃか）にいいいいいいいっ♡♡」

「はぁっ、はぁっ……♡」
「ふぅ……」
　すっげえ出た。さっき口でシてもらったはずなのにすっげえ量が出た。それもこれも全部グラーフの身体がエロいせいだ。
「……れろっ♡」
「うひゃっ！」
「んふ……♡　やはり卿の味は格別だ……♡」
「また俺の汗を舐めたな……さっきだって、俺の上着でオナろうとしてたし……とんだ変態だな」
　俺も変態だから人のことは言えないし、別に責めるつもりはないけど。
「……幻滅したか？　普段から世界を憎む等と言っていた我が、実は卿の汗だく上着で興奮する変態であることに……」
「全然。むしろ滅茶苦茶興奮した」
「そ、そうか……」
（やはり卿は物好きだな。普通の男性であれば、女にこのようなことをされれば即座に通報か、そうでなかったとしても距離を置くようになるはず……それを、あろうことか

卿は「興奮する」と言ってのけるとは……

我のような女とセックスしてくれるだけでも感激だと言うのに、女が変態行為をしていても軽蔑するどころか興奮する、か……もはや特殊性癖以外の女であれば、誰もがムラムラして飛び付いてくるほどの男だ。卿のようなエロい男の傍にいられる我は……）

「幸せ者、か……」

「ん？　何か言ったか？」

「……卿。我はもう、卿のエロくて甘美な身体の味を覚えてしまった。これからは、全てを憎むことより……卿を味わったり、卿とセックスして性欲を発散することばかり考えてしまいそうだ……ふふっ♡」

凄まじい変態発言なのに満面の笑みのせいで可愛いと思えてしまうから困るわ。現実世界で例えれば残念なイケメンみたいな感じなんだろうな……もちろん俺にとって変態美少女はご褒美だけどな!!

１５

ジリリリリリリリーン！

「ん、もう朝か……相変わらず暑いな。でも、昨夜はエンプラとズッコンバッコン大騒ぎしたお陰か、気持ちはスッキリしてるな」

うるさい音を鳴り響かせる目覚まし時計を止めると、俺はいつも通り身支度を整える。え？　朝チュンじゃないのかって？　セフレとはいえ付き合ってる訳では無いし、流石に朝帰りはやめさせた。

エンタープライズに限らず、やることヤった後は基本的に自室へ戻ってもらっている。俺が複数のＫＡＮ―ＳＥＮと肉体関係を持っていることが知られたら、恐らく大勢のＫＡＮ―ＳＥＮが押し寄せて来るだろうからな。いくら何でも二桁以上の人数で大乱交は俺の息子と金玉が持たない。

自惚（うぬぼ）れ？　自意識過剰？　いやいや、あれだけがっつきまくったＫＡＮ―ＳＥＮばかり見てきたら、誰だってこんな思考になるだろ。実際に俺はエンプラに逆レ〇プ……いや、この世界で言えば普通のレ〇プか。とにかく一度襲われた訳だし。

もちろん俺としては美少女揃いのＫＡＮ―ＳＥＮにレ〇プされるなら大歓迎だけど

な。そんな馬鹿なことを考えつつ、洗顔して歯を磨いて……着たくも無い上着を羽織って準備完了。さて、今日は誰とセックス……じゃなくて今日の仕事もダラダラとやりますかね。

「そういえば、今日の秘書艦はまだ決めてなかったな。さて、誰にしようか……」

「おはよう、指揮官……」

「ん？　エンタープライズか。おはよ……だ、大丈夫か？　目の下に隈が出来てるぞ……？」

　ドアを開けると、ちょうど食堂へ向かっていたところであろうエンタープライズと出会った。いつもの凛々しい表情とは違い、いかにも寝不足な顔でフラついていた。あぁ、昨夜は何度もヤったからな……もしかしなくても疲れが取れていないんだろう。

「あ、あぁ。問題無いさ……少しだけ」

「あ～……その、すまん」

「いや、貴方が謝ることは無い。むしろ私が部屋に押しかけて、行為を迫っただけだから……お互い気持ち良くなれたし」

　確かにそうなんだけどさ。俺が「なんかムラムラしてきたし誰かとセックスしようかな～」とか考えていたら、いきなりエンプラがドアから現れて「指揮官！　そろそろ我慢出来なくなった！　セックスさせて欲しい！」だからな。

　それにしても、これだけ俺とヤりまくってるのにヨークタウンやホーネットに一切バレてないって凄いよな。エンプラ曰く二人が寝ている時に抜け出して来てるらしいが、それでもこれまで一度も見つかってないのは流石だと思う。
（い、言えない……指揮官とヤり過ぎたせいで、腰がガクガク言って中々寝付けなかっただなんて……ようやく眠れそうだと思ったら、ヨークタウン姉さんとホーネットが指揮官のエロ写真でオナり出して、聞くに堪えない喘ぎ声のせいで眠れなかっただなんて……）

「おっ、今日の朝飯は和食か。いつも通り美味そうだな……いただきます！」

目の前に置かれているのは、ホカホカの白米と、出汁の香りが漂う味噌汁。それに納豆、厚焼き玉子、そして焼き魚だ。確か重桜の一般的な朝飯だっけか。

納豆をかき混ぜてご飯にかける。重桜所属以外のＫＡＮ―ＳＥＮからは、この納豆の臭いが苦手という声が多い。だが臭いなんて気にならないくらい美味いんだけどな。食わず嫌いは良くないぞ？

まずは厚焼き玉子を一口食べる。予想通り熱々で、それでいて絶妙な焼き加減の玉子が舌を刺激する。フワフワの感触に、塩と出汁の味が良いアクセントを醸し出している。甘い玉子焼きも悪くないが、俺は塩辛い方が好きだ。

「「「「「「……」」」」」」

何やらねっとりとした視線を感じるが無視。続いて味噌汁をいただこう。湯気が出ていていかにも熱そうなので、フーフーと冷ましながら少しずつすすっていく。

辛すぎず、そして薄すぎない味噌の味わいが口の中に広がっていく。もちろん具材もしっかり食べていく。柔らかなワカメとふは、味噌汁と最高の相性だ。

そしてメインディッシュも忘れちゃいない。箸で焼き魚の身をちぎり、ゆっくりと味わう。塩で味付けされた魚の旨味を舌で感じ取っていく。毎日食べても飽きない味だ。

（……じんわり汗かいた指揮官、エロ過ぎ）

（昨日抜いて無かったせいか、指揮官がご飯を食べてる姿を見てもムラッときちゃう

……）

もはや隣に座っているＫＡＮ―ＳＥＮからチラチラ見られているが無視。次は納豆ご飯だ。納豆菌が元気に働いてくれているお陰で、豆からはねっとりした糸が伸びる。

ご飯と一緒に口に入れると、納豆特有のネバネバした感触が感じられる。だがそれ以上に、醤油で味付けされた柔らかい豆とホカホカのご飯のコンビネーションは絶妙で、手が進んでいく。

こんなに美味い飯を、朝昼晩の三食も味わうことが出来る俺は間違い無く幸せ者だ。この糞暑い時期でも、食堂のご飯さえあれば夏バテになることは無いだろう。

（あぁっ、口から糸を引いた指揮官……凄い破壊力……っ♡）

（私の愛液を舐めたら、あんな感じになるのかな……♡）

（やはり舐めるだけでは足りない。何とかして卿のエリート塩を作れないものか……）

（いっそのこと指揮官の身体に食べ物をありったけ乗せた男体盛りを味わいたい……そしてそそり立ったおちんちんにクリームを塗って……ごくっ♡）

「……」

チラチラどころかガン見してくるんですが。お前達もう隠す気無いだろ。そんな血走った目で見たり涎垂らしながら凝視してきたり鼻の下伸ばしてたら、どんな鈍感な奴でもすぐに気づくレベルだぞこれ。

俺からしてみれば、薄着のせいで下着や乳首が透けてるお前達の方がエロいぞ。今すぐそのおっぱいを揉みしだきながら乳首に吸い付いて……いや、やめとこう。

そんなことしたら一瞬で大乱交スマッシュＫＡＮ―ＳＥＮズがおっ始まって、俺がミイラになるまで搾り取られそうだ。せめてセクハラかますなら一対一の状況じゃないと。

「委託艦隊と出撃艦隊はこれで良し、と。後は演習だな……おっ、今回はあいつの所か！」

ＫＡＮ―ＳＥＮからのエロい視線を無視しつつ朝食を食べ終え、演習相手の資料を確

認していると、演習相手先の指揮官名が親友であることに気がつく。そういえば、俺がこの世界に飛ばされてから一度も顔を合わせて無かったな……

「……知り合い、ですか？」

「あぁ。俺の学生時代からの親友だ」

　秘書艦の綾波が尋ねてくる。朝飯食ってる間も秘書艦をどうするか考えていたが、とりあえず今日は綾波にした。こいつなら周りのＫＡＮ―ＳＥＮからブーイングされることは少ない。何せ俺がこの母港に着任して最初に出会ったＫＡＮ―ＳＥＮ……いわゆる初期艦だからな。

「親友……その人、女の人だったりするのですか？」

「いや、男だけど」

「そうですか……良かったです」

「ん？　どした？」

「な、何でも無いです」

（指揮官は母港で唯一の男性……そもそも、男性が指揮官の時点で貴重な存在なのに、どこの馬の骨かも分からない女に取られる訳にはいかないです。というか、私達だって指揮官を襲いたいのを我慢してるのに……その人だけ美味しい想いをするなんて、許せないです……！）

何やら綾波が可愛く頬を膨らまし始めたが、どうせ思考はレンジャー先生……おっと失礼。ピンク一色なのは予想出来るから触れないでおく。さて、これで午前中の仕事は片付いたことだし……少し休憩するか。

「指揮官？　出かけるのですか？」

「あぁ。ちょっとコンビニへ涼みに行って来る。綾波も一緒に行くか？」

「……はい。お供するです」

（女なんて野獣ばかりです。私が指揮官を守らないと……今のガードが緩い指揮官じゃ、誰かに襲われるかもしれないです……！）

今思えば、俺はこの世界に飛ばされてからまともに母港の外へ出たことが無かった。別に引きこもりじゃないぞ？　ＫＡＮ―ＳＥＮ達とセックス三昧の日々を送ってただけだから！　うん！

……コホン。とにかく、色々と確かめたいことがあるしな。俺は綾波を連れて、母港近くのコンビニへやって来た。店内に入ると、ガンガンに効いたエアコンの冷たい風が体に当たる。ここが天国か……！

「あ～涼しい～……生き返るぅ～……」

「同感、です……♪」

暑さで火照（ほて）った体を冷風で冷やしながら、俺は本が売られている場所の端まで進む。

綾波はアイス売り場に行き、目を輝かせながらキンキンに冷えたアイスを眺めている。よし、確認するなら今だな。

「……うっわ。予想通りか」

俺が立っている場所……それは成人向け雑誌コーナー。平たく言えばエロ本コーナーだ。この世界に飛ばされてから、俺はずっと考えていた。もしかすると、この世界のエロ本は……非ツ常〜に！　残念なことになっているのではないかと！

で、確認してみたら案の定である。現実世界ならば、綺麗な女の子達のアッハ〜ン♡な写真集が売られているはずだが、この世界では……既にご想像がついたことだろう。

「男の裸が載った写真集……おぅえぇぇぇ……」

これを見せられたらどんなにムラムラしていても一瞬で萎える自信がある。いや別にこの雑誌を批判するつもりは無い。この世界では男性より女性の方がムラムラしている世界だし、エロ本は当然こうなるであろうことは予想していた。

しかし、実際に自分の目で見てみると……やはり俺は異世界へ迷い込んでしまったという事実を改めて認識する。俺と肉体関係を持ってくれたエンプラ達は、ある意味俺の救世主だわ。いやマジで。

もし俺が未だに童貞で、誰ともセフレになっていなかったとしたら……色々とヤバかったかもしれない。だってエロ画像やＡＶの主役が男ばっかりなんだぞ？　オナ

ニーのオカズが無い世界なんて生き地獄じゃないか！　耐えられる気がしねえよ!!

「わ～！　どこで○ドアだ～！」
「やっぱりド○ミちゃんってすごーい！」
　コンビニから戻り、昼食を食べ終えた俺は睦月・如月・水無月、そして綾波の四人とアニメを見ていた。睦月達三人はちょうど今日が非番で、俺と綾波も一緒に見ようと誘ってきたのだ。親友所属の母港との演習は夕方からだし、他の仕事もそれなりに進めていたので、休憩も兼ねて一緒に見ることにした。
　……いや、流石に睦月型に欲情したりはしないからな？　どこぞのやべー空母と違っ

て、外見幼稚園児の女の子でハァハァするのは無理だ。なので今はセクハラは抜きにして、俺の隣に座る睦月達の頭を撫でたりして普通に可愛がっている。その様子を、綾波が「微笑ましい」という表情で見ていた。

　現実世界で言えば、お姉さんがショタと一緒にテレビを見ている状況だもんな。確かに俺から見ても微笑ましい光景だ。問題は俺がどうしようもない変態ということだが、さっきも言ったけど睦月型には一切欲情しないからセーフ。誰が何と言おうとセーフ。

「あっ、の○太くんがおふろ入ってる！」

「最近、の○太の入浴シーンが少ないのです……色々と世知辛い、です」

　それよりアニメの内容だ。睦月達が見ているのはドラ○もん……ではなくド○ミちゃんだ。いや、本編に統合された元スピンオフ漫画のことじゃなくて、マジでド○ミちゃんなのだ。最初は目を疑ったが、オープニングでもデカデカとド○ミが登場していたから間違いないと思う。

　主人公はド○ミになっており、ドラ○もんは何故か「ド○ミの弟」という設定になっていた。そしての○太とし○かのポジションが入れ替わっており、ジャ○子がジャ○アンポジションになっていた。ちなみにジャ○アンも「ジャ○子の弟」という設定だった。

　ス○夫やその他のレギュラーキャラに至っては、立ち位置はそのままだが出番がかなり少なくなっていた。ここまで来ればもうお分かりだと思うが、現実世界と比べてキャ

ラクターの立ち位置や設定がごっそり入れ替わっているのだ。これも貞操逆転世界の影響だろうか？

「も、もうすこしでの○太くんのおっぱいがみえ……みえ……！」

「うぅ……マンガならからだをあらってたのに、どうしてアニメではおふろに入ったままなの……？」

ちなみに今はし○かがどこ○もドアでの○太の風呂場に突入して、の○太から「うわ～！　し○かちゃんのエッチ～！」と言われている場面だ。何かもう色々と突っ込みたくて仕方無いが、とにかくこの世界におけるドラ○もん……いやド○ミちゃんではよくある光景なんだろう。

俺からすれば男子の裸なんて見てもちっとも面白く無いが、現に睦月達はの○太の風呂シーンに興奮して……おいちょっと待て。綾波はともかく睦月達は幼稚園児だよな？　何でそんな血走った目での○太をガン見してんだよ。その外見年齢でむっつりとかヤバ過ぎるだろオイ。

「いいなぁ～。睦月もどこで○ドアほしいなぁ～。それがあればしゅきかんがおふろに入ってるときにいつでも……♡」

「わたしはとうめい○ントがほしい！　しきかんのおっぱいとかおちんちんをこっそりみちゃえば……♡」

「透明○ントより石こ○帽子の方が優秀です。それを使って指揮官のお風呂からトイレまで至近距離で眺めたり、そのまま無自覚セックスまで持ち込んで……ふふっ♡」
「き、如月は……その、タンマ○ォッチ……じかんをとめて、しきかんのからだを……さわってみたい……♡」
　普段なら聞き逃してたかもしれないけど、隣に座ってるから小声でも全部聞こえてんだよなぁ。精神年齢が幼稚園児なのにそこまでませてるというか、その辺の変態紳士みたいな思考になってるようじゃ、お兄さん君達の将来が心配だよ。

「閣下！　委託艦隊が帰って……睦月!?　それに如月や水無月に綾波まで!?　何をしているのだまさか私に内緒で閣下だけ駆逐艦の妹達とたわむれていたというのかズルいズルいぞ私には出来る限り近付くなとか説教した癖にしかしその対価として定期的に閣下のエロい身体を触らせてもらっている以上文句は言えないがそれでも自分ばかり駆逐艦達と楽しくやるというのは私への当てつけかそれともお仕置きなのかそれとも閣下なりの愛のムチか確かに男性から弄ばれるというのも悪い気はしないというかむ

しろ私含むＫＡＮ―ＳＥＮにとってはご褒美だが目の前で駆逐艦の妹達とイチャつかれるのはご褒美にしては残酷過ぎるだろうアメとムチにしたって限度があるじゃないかムチが大きすぎてアメが意味を成していないだが多大なムチに対する僅かなアメもそれはそれでゾクゾクするがせめて駆逐艦達を利用するのはやめていただけないだろうかあぁやめろやめてくれやめて下さい睦月如月ちゃん水無月さん綾波様そのようなゴミを見るような目で私を見るのは興奮してはつじょゴホン我慢出来なくなる極めつけは閣下だどうすれば駆逐艦の妹達にそこまで好かれることが出来るんだお願いしますその方法を教えて下さい何でもしますからどうかアークロイヤル一生の頼みを聞いて」

「「ひいいいいいいいっ!?」」

「鬼神の力、味わうがいい……！」

「グヘァッ!?」

「ナイス綾波。後でこいつはロイヤル寮にぶち込んどくわ」

「このままだといずれ意識が戻るはずですし……縄で縛った方が良いかも、です」

「……そうだな。その方が良いよな。委託任務から帰って来てもらったばかりとはいえ、放置してたら睦月達が危険だし……」

「あへぇ……♡」

突然現れて鼻血を出しながら迫って来た変質者（アーク・ロイヤル）を見事ワンパンで沈めた綾波。流石初期艦だぜ。頼もしい事この上無い。艤装を付けていない以上は俺でも対処は出来たが、綾波のあの素早い身のこなしはこれまでの努力の賜物だろう。しかし殴られた割に随分と嬉しそうな顔で気絶しやがって……もう手遅れなんじゃないかなこいつ。

16

その後アーク・ロイヤルを縄で厳重に拘束し、睦月達の安全を確保した上で俺達はアニメを見続けた。途中から「うおおおっ!?　何だこれは!?　いつの間に縛られて……ハッ！　まさか閣下と駆逐艦の妹達がやってくれたのか!?　そう考えたらますますみwなwぎwっwてwきwたwww」とかのたまいだしたがガン無視を決め込んだ。

いや～それにしても、どのアニメも現実世界と設定が変わり過ぎていて新鮮だったわ。しん○すけとひ○わりの立ち位置や年齢設定が逆転したクレ○ンひまちゃんとか、メロ○パンナがド○ンちゃんと戦うそれいけ！メロ○パンナとかさ。これ現実世界でスピンオフ作品として放送したら意外と人気出たりして。

ひ○わりがイケメンにナンパしてひ○しにゲンコツされるシーンとか、アン○ンマンが「メロ○パンナちゃん！　新しい顔だよ！」とか言いながらメロ○パンナの顔をブン投げるシーンは思わず吹き出してしまった。これで笑うなという方が無理だ。

「あ～おもしろかったぁ～！」

「らいしゅうがたのしみ～！」

「うん……しきかん、また……いっしょにみてくれますか……？」

「仕事が入ってなければいつでも良いぞ」
「閣下ああああああッ!!　貴方だけ良い思いをするなあああああッ!!　ほら妹達！
私なら二十四時間三百六十五日いつでもオールオッケーだから」
「敵に情けをかける必要は無いのです」
「あふぁんっ!?　わ、我々の業界ではご褒美でしゅ……♡」
縛られたままジタバタしていた変態空母に渾身のゲンコツを食らわせる綾波さんマジ鬼神。よし、今すぐウォースパイトかメイド隊に連絡してこいつをしょっ引いてもらうか。
これ以上涎垂らしながらビックンビックンしてる部下を見るのは精神的にキツい。
睦月達も怯えを通り越してドン引きしてるし……ところで綾波さん、それ貴女の台詞じゃありませんよね？　確かに話し声は瓜二つだけどさ。

「さて、演習の時間は……ありゃ、まだ余裕あるな。今日の分の仕事は大方終わらせちゃったし、何して時間潰そうかな……」
「私とナニして時間潰そう！」
「うおっ!?　だ、誰だ!?　……って伊１９か。びっくりした……」
　部屋に戻る睦月達を見送り、自ら変態空母をロイヤル寮に送り届ける役を買って出てくれた綾波を部屋から送り出してしばらくすると、ドアが吹き飛ぶ勢いで伊１９が押し入って来た。あー……これは昨日のエンプラと同じだな。めっちゃハァハァしてる上に目がハートになってる。
「あっ、ごめんなさい……いやそんなことより！　最後に指揮官とエッチしたのって三日前だよね!?　私もう我慢出来ないよぉ!!」
　台詞までエンプラとほぼ同じときたか。一昨日は雪風だし、この世界の女の子達って本当に溜まりやすいんだな……気持ちは分かるけど。俺だって現実世界ではＫＡＮ―ＳＥＮという美少女達に囲まれて悶々（もんもん）としてたからな。
「よし分かった。じゃあすぐゴムを付け……」

「やだ～！　生が良い～！　後でピル飲むからぁ～！」
「……」
　ピルって多かれ少なかれ副作用があるよな？　それに飲んだとしても避妊率百パーセントじゃないよな？　もちろんそれはコンドームにも言えることだけど、こんなことを続けていたらいずれ誰かを妊娠させてしまいそうだ……流石に何か対策を考えた方が良いかもしれない。
　とか思いつつ俺も欲望に負けてＫＡＮ―ＳＥＮ達とセックスしちゃうんだけどな。だって美少女達から「生で良いからシよ♡」と誘われて断れるか？　少なくとも俺には無理だ。絶対無理だ！　という訳でいっただっきまぁーすっ！
「あっ……♡」

　ぐちゅっぐちゅっぐちゅっ♡
「ふあああっ♡　こ、これだよぉっ♡　指揮官のおちんちんっ♡　これを待ってたのぉっ♡」

「つく……！　いつ挿入れても凄い締まりだ……！」
　ばちゅっばちゅっ♡　ずぶっずぶっずぶっ♡
「んぅっ♡　し、指揮官っ♡　もうダメっ♡　イくっ♡　イっちゃうううっ♡」
「俺もだ……！　うっ、出る……っ！」
　ビュルルルルッ！　ドプッドプッ！
「んあああああっ♡♡　み、三日振りっ♡♡　三日振りのせーしぃっ♡♡　おにゃかの中に出てりゅのおおおっ♡♡」
「はぁっ、はぁっ……」
　いや～伊１９の小さな身体に欲望を放つ背徳感が堪らないわ。何回ヤっても俺の一物をグニュグニュの膣で包み込んでくれるし、一度挿入れたら逃すまいとばかりにギュウギュウに締め付けてくるもんだから猿のように腰を振っちまう。
　当の伊１９もとろけ顔でフニャフニャになってるし、どうやら気持ち良くなってもらえたようだ。これでこそＷｉｎ―Ｗｉｎ。どちらか片方だけが気持ち良くなるのはダメだ。ヤるからにはこうしてお互いに性欲を発散してしまわないとな。
「えへっ、えへへへぇ……♡　汗だくになっちゃったねぇ……♡」
「そうだな……流石にこの状態で仕事したら周りから怪しまれそうだ。一度シャワーでも浴びてサッパリするか」

あまり部屋を留守にしていると綾波が勘付きそうだ。え？　部屋でヤってたんじゃなかったのかって？　流石に綾波……秘書艦がいつ戻って来るか分からない状況で堂々とセックスするのはまずいだろ。

伊１９に誘われた瞬間、彼女をお姫様抱っこしてダッシュで女子トイレに駆け込みましたよ、ええ。つまり今の俺達はトイレの個室という狭くてクソ暑い場所でヤっていた訳だ。お陰で俺も伊１９も汗だくだよ。

ちなみにさっきから喘いでいたように見えるかもしれないが小声だ。誰が何と言おうと小声だ。「あぁんっ♡」とか叫んでるように見えるけど小声と言ったら小声だ！なので周囲に俺達のいけない声が聞こえてることは無い……はず。多分きっとメイビー。

「んふふ♡　そう思って饅頭（ヒョコ）さん達に頼んでおいたんだ～♡　後でお風呂に入るから、いつもより早くお湯を入れておいてねって！」

「……よ、用意周到ですね」

俺達が汗だくになって風呂に入ることまで想定してたのかよ。少しくらい俺が断る可能性を考えて……無いわ。ＫＡＮ―ＳＥＮからセックスしようと誘われたら俺なら迷わず飛び付くわ。現にさっきだって一瞬で理性を捨てて伊１９の身体を味わったし。

「よう！　しばらく振りだな！」
「おー、久しぶり」
俺と伊１９は急いで風呂に入り、汗と体液を洗い流した。そして当然だが伊１９にはピルを飲んでおくよう念押ししておいた。本当に妊娠だけは洒落にならないからな。
そして部屋に戻ると案の定綾波が待っていた。もちろんそんなことは想定内だったので、俺は「一旦汗を流そうと思ってシャワーを浴びて来た」と言っておいた。嘘はついてないぞ、うん。
綾波も特に追及してくることなく納得してくれた。その直後、小声で「湯上りの指揮官……エロいです」とか聞こえたような気がしたがスルーしておく。からかっても良

かったが、その時には予定していた演習時間が迫っていたからな。
　下手に突っついてエンプラの時みたいに襲われたら、それこそセックスで職務放棄するという笑えない状況になってしまう。特に綾波が俺をレ○プしたと周りが騒いでしまったら……気を付けよう。割とマジで。
「……」
「ん？　どうした？　俺の顔に何か付いてるか？」
「あ、いや。元気そうで何よりだと思ってさ」
　異世界に飛ばされた俺にとっては、こうして親友が何も変わっていなかったことにホッとしたというか……いやそれを言ったらＫＡＮ―ＳＥＮ達も姿形は一切変わってないが、あいつらは性欲お化けになってるから現実世界とのギャップが凄い。
　こいつは俺の数少ない親友だ。同性で俺が腹を割って話せるのは、親父を除けばこいつしかいない。学生時代、何かと一緒に行動することが多かったせいで、いつの間にか仲良くなっていたんだ。
　他愛もない話をするだけなら同期の指揮官とたまに顔を合わせることもあるが、本当の意味で馬が合うのはこいつだけだ。それだけに、この世界でも俺とこいつが親友だという事実は心底安心した。
「お前こそ元気そうで良かった！　それより大丈夫か？　ＫＡＮ―ＳＥＮ達からセクハ

ラされてないか？」

「……あー」

親友が小声でそう話しかけてきた。まぁそうだよね。この世界の男ならまずそういうことを心配するよね。

「大丈夫大丈夫。うちのＫＡＮ―ＳＥＮ達は良い子揃いだからさ」

「それは分かってるが、男性指揮官がＫＡＮ―ＳＥＮに襲われる事件は一向に減ってないからな……お互い気を付けないと」

「は、ははっ……そうだな、うん……」

言えない。言える訳が無い。「実は現在進行形でＫＡＮ―ＳＥＮ達数人と肉体関係になってヤりまくってまーす★　今後も増える予定でーす★」だなんて口が裂けても言えない。

「それじゃ早速始めようぜ！」

親友がそう言うと、向こうの母港に所属するＫＡＮ―ＳＥＮ達が艤装を身に着けて配置についていく。だが俺はすぐに気が付いた。向こうのＫＡＮ―ＳＥＮ達もまた、親友を舐め回すように眺めていたことに……

「くっそー！　後少しでこっちの勝ちだったのにー！」
「いや、そうは言うけどこっちも危なかったぞ？　もう少し続いていたら負けてたかもしれん」
演習終了後、俺と親友は母港内のベンチに座りながら、キンキンに冷えたスポーツドリンクを飲んで休憩していた。ドリンクは俺が提供した物だ。相変わらずベルファストがいつの間にか補充するもんだから、いくら飲んでも減らない。
演習の結果はこちらの辛勝。親友率いるＫＡＮ―ＳＥＮ達がかなり手強かったが、何とかギリギリで勝利することが出来た。とはいえ、こちらの編成や装備次第では負けていたかもしれない。色々と学ぶところが多く、この演習はかなり良い経験になったと思う。
「それにしても、男性指揮官数の減少か……思った以上に女性指揮官が多いんだな」
「当たり前だろ。ただでさえ女だらけの場所に男が行きたがると思うか？」
「……まぁ、怖いよな」
嘘です俺なら大喜びで行きます。もっとも、それはこの世界における女の子達が沢山いるならばという話だが。現実世界ならセクハラ問題やら何やらで色々と気を遣わな

いといけないから意外と疲れる。幸いＫＡＮ―ＳＥＮ達は良い子ばかりだからそこまでも無いが。

親友と今まで通りくだらない話が出来ることに安心しつつ、この世界での軍関係がどうなっているかをそれとなく聞き出していく。現実世界とどの程度違っているかは出来るだけ把握しておいた方が良い。でないと安心してセックス出来ないし。

親友の話によると、俺達のような男性指揮官はかなり珍しく、指揮官の大半は女性で、男性は女性指揮官の補佐役を務めていることが多いらしい。つまりＫＡＮ―ＳＥＮ以外の男女比が現実世界と反対になっている訳か……俺にとっては天国だが、この世界の男にとっては肩身が狭そうだ。

「そう考えると俺達ってかなり物好きだよな～。わざわざ女だらけの職場を選んで働いてるんだから」

「……そういえば、どうしてお前は指揮官になろうと考えたんだ？」

現実世界では、俺も親友も「ＫＡＮ―ＳＥＮという美少女達とお近づきになれるかもしれない！」という下心で猛勉強して指揮官になったのだが、この世界だと親友は指揮官を目指す理由が無い。いや、それを言ったら元々この世界に住んでいた俺もそうなんだが。

「ん？　前にも言ったじゃないか。他の仕事と比べて給料がズバ抜けて良いからだ！」

「あ、あ～……そうだったな。すっかり忘れてたよ。はは……」
なるほど、そうきたか。確かに指揮官をやっていれば、責任重大な代わりに多くの収入を得ることが出来る。まして最近はセイレーン達もそれほど大暴れしていないから、貰った金で余暇を過ごす余裕もあったりする。
そう考えれば、女だらけの職場でセクハラに耐えてでも金をガッポリ受け取れる指揮官になろうという気持ちは理解出来なくもない。まぁ、それもダイヤを大量に購入すれば意外とあっさり無くなったりする訳だが。
「でもやっぱり高収入なら高収入なりの悩みはあるもんな……仕事している時は必ずと言って良いほどねっとりした目で見られるし」
「……」
「酷い時には『今日も良いおっぱいしてんな！』とかセクハラ発言されたり、偶然を装って尻を揉もうとしてきたりさ……」
「……苦労してるんだな」
すみません。俺は今日までずっとＫＡＮ―ＳＥＮ達とセックスしまくってました。
「もう一度言うけど、本当にセクハラとかされてないよな？　強姦されそうになったら迷わず通報しろよ？」
「……あぁ。そっちもな」

そう言いながら俺達はスポーツドリンクを飲み干し、お互いにまた演習しようと約束して親友を見送った。そして相変わらず向こうのＫＡＮ―ＳＥＮ達は汗に濡れた親友を血走った目で眺めていた。どうか親友が襲われませんように……

「しっかし、このままじゃその内ＫＡＮ―ＳＥＮを妊娠させてしまいかねないよなぁ……本当にどうしようか」

演習を終え、食堂で晩飯を食べた後、部屋に戻った俺は伊１９とヤった時のことについて考えていた。いくら相手がピルを飲むと言ってくれたとしても、妊娠の危険性は常に付きまとう。無論コンドームを付けた場合も同じだ。

まして俺は複数のＫＡＮ―ＳＥＮと肉体関係を持っており、それどころか交際さえしていない状況だ。恋人同士ならまだマシだが、セフレで妊娠なんてことになれば間違いなく厄介なことになる。

となると最善策としては俺やＫＡＮ―ＳＥＮ達が我慢すれば良いのだが、それ以外の他の方法を考えてみる。いやね？　俺にとってもＫＡＮ―ＳＥＮにとっても、いつでもセックスオーケーな異性が傍にいるんですよ？　それで我慢しろなんて拷問じゃないか！　無理に決まってる!!

「でも、それ以外に妊娠を防ぐなんて無理だし……ゴムを付けようにもＫＡＮ―ＳＥＮ達に止められる上に、俺自身も生でヤる快感に慣れちゃって……」

何とか俺やＫＡＮ―ＳＥＮが思う存分気持ち良くなりつつ妊娠の危険性を皆無にするような都合の良い解決方法は無いだろうか……

「指揮か～ん……また抜いて欲しいにゃ。ムラムラしちゃって……だ、ダイヤ奮発するから、今回も指揮官の口で……♡」

「あ、ちょうど良い奴がいた」

「にゃ？」

ごちゅっごちゅっ♡　ぱんぱんぱんぱんっ♡
「にゃあっ♡　し、指揮官っ♡　激し……んにゅうっ♡」
「お前こそさっきから必死に腰振ってるじゃないか……！」
ばちゅっばちゅっばちゅっ♡　ずぷっずぷっずぷっ♡
「そ、それ、はぁっ♡　指揮官のが、気持ち良いから……あんっ♡」
「ははっ、嬉しいこと言ってくれるな！　明石の膣内（ナカ）も最高だ！」
ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡　ゴリッゴリッ♡
「ひゃあああっ♡　お、奥っ♡　奥ゴリゴリってえっ♡」
ぐちゅぐちゅっ♡　どちゅどちゅどちゅっ♡
「あっあっあっあっ♡」

「あ、明石……そろそろ……っ！」
「わ、私もっ♡　イくっ♡　イっくううううぅぅぅぅっ♡」
　ずちゅずちゅずちゅずちゅっ♡　ずぷぅっ♡
「くぁっ……！」
　ビュクビュクッ！　ドプドプドプッ！
「んにゃあああああっ♡♡　あ、あちゅいっ♡♡　あちゅいのがお腹に出てるにゃあああああっ♡♡」
「はぁはぁ……さ、流石に疲れた……」
「あっ……♡」
　本日二度目の射精を終えると、俺は明石に圧し掛かる形で倒れ込んだ。数時間前に伊１９とハッスルした後だったからな……限界とまでは言わないが、少し体力を使い過ぎたらしい。ただ、これだけは言える。明石の膣内（ナカ）も極上の味わいだった。
「せ、セックスってこんなに気持ち良かったのかにゃ……♡　もう抜いてもらうだけじゃ満足出来ないかも……♡」
「……それで、約束の方は」
「任せるにゃ！　ここまでシてもらったからには全力で期待に応えるにゃ！」
（それに私としても、指揮官が積極的にセックスしてくれるのは好都合だし……♡）

俺はいつものように明石の性欲を発散してやる前に、あるお願いをしたのだ。それはセックスする時に便利な物を作ってもらうこと。具体的に言えば避妊率百パーセントかつ副作用無しのアフターピルや、一瞬で精力と体力を回復させる精力剤兼媚薬だ。

他にも感染症……いやＫＡＮ―ＳＥＮ達がそういう病気を持っていると考えた訳じゃない。そういう理由ではなく、特殊なプレイやマニアックなプレイをした時に、その手の病気にかかるリスクを無くすことが出来る器具があれば色々と捗るだろ？

そして当然だが、いつものビッチ臭半端無い説明も忘れず付け加えておいた。それでも明石は間髪入れず承諾してくれた。俺はセックスに便利な物を手に入れられるし、明石は俺とセックス出来る。まさにＷｉｎ―Ｗｉｎ！

「ありがとうな。これで妊娠のリスクから逃れられる！」

「大船に乗ったつもりで待っていて欲しいにゃ。幸い私は明日非番だから、今日は徹夜で完成させるにゃ！　だから、その……」

「ん？」

「図々しいことを承知で言うにゃ。また、明石がムラムラした時……セックスしてくれるかにゃ？」

「当たり前じゃないか。むしろ俺の方からお願いしたいくらいだ」

「……ふにゃあ♡」

明石が甘えた声を出しながら抱きついてきた。俺としては明石に限らず、ＫＡＮ―ＳＥＮ達のような美少女なら誰でもいつでもウェルカムだけどな。それにしても妊娠の心配をしなくて良いというのはデカい。これからは明石に足を向けて眠れないな……本当に感謝してもしきれない。

これからは今まで以上に遠慮なくセフレを増やすことが出来そうだ。何なら相手の趣味が多少マニアックだったとしても問題無く受け入れられる。あ、でも俺自身はＳでもＭでも無いノーマルだから、そういうプレイは勘弁な！　女の子を虐めて喜ぶ趣味も虐められて喜ぶ趣味も無いし。

17

「……はぁ～っ」

最近、指揮官がエロ過ぎて困っちゃう。今までは私達に絶対隙を見せない感じの人だったのに、急にフェロモン出しまくりでエロエロな人になっちゃうんだもん！

おかしいよ！　一体指揮官にナニがあったの!?　お陰で私達は毎日お股が濡れちゃうのを我慢する生活……あぁもう耐えられな～い！

目の前に色気たっぷりな男の人がいるのに手を出せないなんて！　天国と地獄が同時にやって来た気分！　朝起きた時も指揮してる時もご飯食べてる時も休憩してる時も全てがエロいなんて反則でしょ～!?

「グリッドレイちゃんから大量に買い込んだ写真が無かったら、今頃指揮官を襲っちゃって……いや、私にそんな度胸無いか……」

下着だけで食堂に来たあの日、上着から仄かに漂う汗の香り、乱れた服装だから見えそうで見えない透け乳首……あぁっ、思い出すだけでお股が……♡　よ、よしっ！　今日はとっておきのあの写真で……♡

「し、指揮官が美味しそうにアワビを食べてる写真……ゴクッ♡」

先月貰ったお給料が全額消し飛んじゃったけど、後悔はしてない！　だって指揮官がアワビを食べてるんだよ!?　それって指揮官が疑似クンニしてる写真ってことだよね!!

「し、ししっ、指揮官の口にアワビが……♡　美味しそうに中をほじくって……んっ♡」

ジュプッ……♡

「あっ♡　もうこんなに濡れて……♡　んっ、指揮官……そうやって咀嚼するのエロ過ぎ……私のお股もこんな風にされちゃうのかな……♡」

グチュグチュッ♡　ジュプジュプッ♡

「んうぅっ♡　ゆ、指だけじゃ物足りない！　これも……♡」

指揮官やリアンダー達に内緒で買っちゃった、大人のオモチャ……♡　リアンダー達はともかく、指揮官に私がこんなの持ってるってバレたら絶対ドン引きされちゃう！　そんなことになったら私立ち直れないっ!!

あぁだけど性欲には逆らえないよ……だって仕方ないでしょ！　女なんて皆こんなんだもん!!　日頃から友達同士で「あの男エロかったよね～」とか「あの人の乳首見えてた！　触りたい！」なんて下品な話ばっかりしてるのが普通だもん!!

ジュプゥッ♡　チュプププッ♡　グジュグジュッ♡

「ひゃあっ♡　太ぉいっ♡　し、指揮官のおちんちんもこれだけ太いのかな……あんっ

♡」

そそり立つオモチャ……極太ディルドを、いつも通りお股に思いっきり突っ込んじゃう♡　ネットでレビューが高かったやつ買って良かったぁ……♡　お陰で奥までゴリゴリ出来るからっ♡

ゴチュッゴチュッ♡　グリュグリュッ♡

「はぁぁっ♡　指揮官っ♡　しきかぁんっ♡　その大きな肉棒をもっと突っ込んでぇっ♡」

写真を眺めつつ、ディルドをグリグリ動かしながらオナニーする。これがまた臨場感があって堪らないの！　まるで本当に指揮官とエッチしてるみたいな気分になってきて……♡

ジュプジュプジュプッ♡　グチュッグチュッ♡

「あっあっあっ♡　そ、そろそろイきそ……っ♡　ダメ、声、抑えられな……っ♡」

グリュグリュグリュッ♡　グジュグジュグジュッ♡

「も、もうダメぇっ♡♡　イっくううううううううううっ♡♡」

「うるさいですわよッ!!　今何時だと思ってるんですかッ!!」

「ひうっ!?　え、ええええエイジャックス!?　起きてたの!?」

「あれだけ大きな声で喘げば誰だって目が覚めるに決まってるでしょう!?　こっちは真

隣で寝てるんだから!!」

そ、そうだった！　オナるのに夢中ですっかり忘れちゃってたーーーーーーーーっ!?

「じゃ、じゃあ……まさかリアンダーも起きて……」

「……当たり前でしょう？」

「」

「アキリーズ……指揮官様でオナニーしたい気持ちは分かるけど、せめてもう少し声を抑えられないかな？　流石にここまで大声をあげられると、その……」

（これが男の方の喘ぎ声（指揮官様）でしたら興奮したでしょうけど……同性の、それも姉妹の声となると……うん……）

「……これで分かったでしょう。せめてお手洗いを使いなさい。自室でスるなんて品が無さ過ぎますわ。増してそのような下品な物まで使うなんて」

（男の方（指揮官）が隣で自慰にふけるなら大歓迎だけれど、姉の自慰行為なんて見せられても不快でしか……それにしてもあのオモチャ、中々精巧な作りね……私も買おうかしら）

「」

うぅ……死にたい。今すぐ死にたいよぉ……

「はぁ……」

あの後、リアンダーとエイジャックスは私をジト目で睨みながら寝直したみたいだけど、私はさっきのショックで全然寝付けないよ……うぅ～っ、失敗したぁ……いつもならもっと声を抑えてバレないようにしてるのにぃ……

「あああぁぁぁ……明日からリアンダー達と顔を合わせづらいよぉ……」

オナニーしてるところがバレただけじゃなくて、ディルド（あれ）を使ってるところも見られちゃった……誰か私を殺して。殺してよぉ……恥ずかしくて死にそう……

「……賢者タイムのせいかな。何だか暗いことばっかり考えちゃう……」

大体、私このままで良いのかな……毎日毎日指揮官でオナってばかり。それだけじゃない。指揮官の前では頑張って明るく振舞ってるけど、本当はず～っとおっぱいとか下半身ばかり眺めてて……仕方ないでしょ！　だってエロいんだもん！

だけど、こんな日々を送っていたら……私、いつかは拗らせた魔法使いになっちゃうんじゃ……指揮官のお陰でオカズには困らないけど、一人寂しくオナり続けるだけで月日がどんどん経って……やだっ！　それだけはヤダぁっ！

そんなことになったら、周りから「え？　アンタまだ処女なの？　その歳で？」なん

て馬鹿にされちゃう！　いや私達ＫＡＮ―ＳＥＮは歳を取ることはないけど、それでも魔法使いになっちゃうことに変わりないし！

「い、いっそのこと指揮官に土下座してヤらせてもらえば……いや絶対無理！　そんなことしたらセクハラで……下手したらわいせつで訴えられて艦生終了コース確定しちゃう！」

だけど私にはパートナーなんていないし……そもそも母港にいる男の人って指揮官しかいない訳だけど「処女卒業したいから私とセックスして！」なんて頼める訳ないでしょ!?　一発殴られるくらいで済めば良い方だよ！

「はぁ……私、このまま魔法使いになっちゃうのかなぁ……」

な～んて昨夜（ゆうべ）は悩んでたけど、一晩眠ればどうでも良くなっちゃった！　やっぱり賢者タイムって怖いよね～。何だか後ろ向きな考えばかり浮かんできちゃうもん。いや魔法使いになるのは嫌だけど、今ウジウジ悩むことでもないでしょ！　うん！

さてと！　早く報告書を指揮官に届けないと！　何てったって今日は私が秘書艦！

指揮官と一日ず～っと密着出来る最高の特権！　お陰で指揮官の体臭嗅ぎ放題だし、汗で濡れたエロい指揮官を目に焼き付けることが出来る！　これほど嬉しいご褒美はないよね！

「……そういえば、指揮官って童貞なのかな？　それとも経験済みなのかな？」

今までの指揮官なら身持ちが固かったから童貞だと思うんだけど、今の指揮官はすっごくエロいからなぁ……もしかして、ＫＡＮ―ＳＥＮの内の誰かとヤってたりするのかな？　出来れば童貞が良いけど……だって男の人の初めてを貰えるんだよ？　それって嬉しくない!?

グチュッ……ズプッ……

「ま、そんな妄想してても仕方ないか。早く指揮官がいる部屋に……ん？」

ジュプッ……ジュプッ……

何だか、部屋の中から変な音がするような……

「卿っ♡　卿っ♡」

「つく……相変わらず良い締まりだ……！」

「っ!?」

えっ、ちょっと待って!?　今、部屋から指揮官とにくすべさん……じゃなくてグラーフさんの声が……それも普通の声じゃない。すっごく怪しい雰囲気というか、ＡＶで聞

こえてきそうな感じの……

「ま、まさか……」

指揮官達に気付かれないよう、物音をたてずに近付いて……こっそりとドアを開ける。すると私の目に飛び込んで来たのは、あまりにも予想外の光景だった。

パンパンパンパンッ♡　ズチュズチュズチュッ♡

「ひゃあっ♡　お、奥ぅ……っ♡」

「突く度に可愛い声出しやがって……！　これじゃ腰が止まらなくなるだろ……！」

えええええええええッ!?　し、指揮官とグラーフさんってそういう関係だったの!?

いつの間に……こ、これじゃ母港唯一の男の人（指揮官）の初めてが……指揮官の童貞がぁ……！

これで私の密かな希望が打ち砕かれちゃった……あぁ私、これで魔法使い確定だよ……だって指揮官がグラーフさんと突き合って……じゃなくて付き合ってるなら、手を出す訳には（手を出す度胸があるとは言ってない）……

「……部屋に戻ってじゃがバタでも食べよ」

私はあまりの衝撃で真っ白になりながら、ドアの前に報告書を置いてフラつきながら自室へ戻ることにした。

あぁ、私の処女卒業が……あわよくば指揮官とそういう関係になって、思う存分ヤり

まくろうと思ってたのに……うぅっ、一生恨むからね、グラーフさん……！

昨日の衝撃から一日経ったけど、あれから私はず～っと悶々としていた。だって男女の生々しいセックスを目撃したんだよ？　あれで興奮するなって方が無理でしょ!?

そりゃ確かに指揮官とグラーフさんが付き合ってたことはショックだったけど、それとこれとは別であのエロいセックスは最高のオカズになったというか……昨夜も結局オナっちゃったし……もちろんトイレでね!!

「それにしても、あれは初めてじゃなかったよね……指揮官もグラーフさんも慣れてるって感じだったし」

きっと前からあんな風にセックスしてたんだと思う。そんなこと考えてばっかりだから、今だってお股が少し濡れちゃってて……♡　いやでも流石に朝からトイレに籠ってオナる訳にはいかないし、何とか煩悩を我慢しないと……！

「指揮官に私が盛ってる変態だなんて思われちゃったら、それこそ昨日のショックより立ち直れなくなりそうだし……ううん。指揮官に軽蔑されなかったとしても、どうせ私

はこのまま魔法使いに……」

ジュプッ……ジュプッ……

「……え？」

ちょっと待って。指揮官がいる部屋を通り過ぎようと思ったら、何だか聞き覚えのある卑猥（ひわい）な音が聞こえてきたんだけど。まさか今日も指揮官とグラーフさんは……

「い、いつも通り大きいのだぁ……♡」

「そりゃお前の身体からすればなぁ……」

待って待って待って。いやちょっと待ってどういうことなのこれ!?　指揮官の声は良いとして、どうして部屋の中からグラーフさんじゃなくて雪風の声が聞こえてくるの!?

まさかグラーフさんの声真似……いやいやあり得ないから！　全然声違うしわざわざ声真似する理由が無いでしょ!!　ということは指揮官と雪風がセックスしてるの!?

それとも私の耳がおかしくなっちゃっただけ……と、とにかく中を覗いてみないと……

グチュグチュッ♡　ズプッズプッ♡

「はぁぁぁっ♡　こ、これっ♡　これなのだぁっ♡」

「くぉぉっ！　や、やっぱり駆逐艦の締め付けは病み付きになる……！」

「」

あ、あはっ、あははは っ……今度は目がおかしくなっちゃったのかなぁ？　私には指揮官が雪風とセックスしてるように見えるんだけど……いやおかしいでしょ!?　昨日グラーフさんとヤってたのは何だったの!?　まさか私、指揮官の浮気現場を目撃しちゃってる!?

「み、三日もお預けを食らったのだ……♡　今日はたっぷりシて欲しいのだっ♡」

「……あぁ。言われなくても！」

ゴチュッゴチュッ♡　ズチュズチュズチュッ♡

「あんっ♡　そ、そこはぁ……っ♡」

「伊達に経験豊富じゃないからな！」

け、経験豊富……それをわざわざ指揮官が言うってことは、雪風は指揮官が浮気してることを承知の上でセックスしてるの!?　た、確かにそれは凄く興奮しそ……ゲフンゲフン！　だ、ダメだよそれ！　母港の中でドロドロの略奪愛だなんて!?

「ほ、本当にビッチなのだ……♡」

「あぁそうだ。でもお前達はそれを理解した上で、こうして俺と肉体関係を持つことを望んだんだろう？」

「……うんっ♡」

「正直な子にはご褒美だ！」
グリュッグリュッ♡　バチュバチュッ♡
「ひゃあああっ♡　そ、それ好きっ♡　奥グリグリされるの好きなのだぁっ♡」
「……え？」
ビッチ？　どういうこと？　今、雪風は指揮官を「ビッチ」って……それに指揮官も否定せずに「お前達はそれを理解した上で関係を持った」って……まさか、そういうことなの？　指揮官って、女なら誰でも食べちゃうビッチだったの？　ヤリチンだったの!?
「……そ、それなら私ともヤってくれたりして」
つい小声で邪(よこしま)なことを呟いてしまう。でも考えてみてよ。男の人がビッチでヤリチンなんだよ？　それって確かに褒められたことじゃないかもしれないけど、逆に言えば頼めばヤらせてくれるってことだよね!?
そんなエロい男の人がいる状況で、理性を保てる女がいると思う？　私は無理。少なくとも私は絶対無理っ！　よーし決めた！　私も指揮官とセックスするぞー！　あ、でも流石にこの状況で突撃するのはまずいから、夜ご飯を食べ終えてから……えへへっ☆

18

二月十四日。諸君はこの日付を見て何を思い浮かべるだろうか？　煮干しの日？　それともふんどしの日？　いや、もっと身近で有名な日があるだろう。そう。女性がチョコを作り（あるいは購入し）、好きな男性へ送るという……リア充ならドキがムネムネしているであろう、あの日である。

「……バレンタインデー、かぁ」

そう。バレンタインデーである。俺も元の世界にいた頃は、母港にいるＫＡＮ―ＳＥＮ達の特に親しい子から手作りチョコレートを頂いたものだ。例え義理だったとしても、女の子からチョコを貰えれば男なら嬉しいと思わないか？

だがしかし！　俺は悩んでいた。この世界に住む俺は元の世界と比べて立場が真逆なのだ。どういうことかって？　決まっているじゃないか……男女の概念が逆転しているこの世界なら、俺がＫＡＮ―ＳＥＮ達にチョコを送らないといけない訳だ。

「チョコをあげるのは良いんだが……人数多過ぎね？」

いやだってさ。元の世界なら各ＫＡＮ―ＳＥＮ達が俺に対してチョコを作れば良いから、各自で用意するチョコは一つで済む。だがこの世界の俺はどうなる？　軽く百人

は超えるＫＡＮ―ＳＥＮ達全員にチョコを配るとなると、物にもよるが結構な金額になってしまう。

　幸い指揮官は多くの給料を得ることが出来るから、その気になれば全員分のチョコを用意することは出来る。だが、安物で済ませるのは申し訳ないし、そこそこ値段が張るチョコを買うとなれば俺の財布が多大なるダメージを負ってしまう訳で……

「……」

　しかし、俺はいつもＫＡＮ―ＳＥＮ達に色々な場面で世話になっている。戦闘はもちろんのこと、日常生活においても彼女達には世話を焼いてもらってばかりだ。特にロイヤルメイド隊なんて、世話にならない日が無いと言っても過言ではないほどだしなぁ……

「それにあいつら、恐らく俺からチョコを貰えるかドキドキしながら待ってるだろうし……」

　どうしてそんなことが分かるのかって？　そんなもん俺だって元の世界ではバレンタインデーになるとソワソワしまくってたからな!!　せめて一人くらいはチョコをくれないかな～とか、いい歳して学生みたいなこと考えてた時期もあったんだよ!!

　それにＫＡＮ―ＳＥＮ達は俺を見るといっつもエロい目で見てくるレベルだぞ？　訓練された処女であれば、きっと当時の俺と同じ思考に陥っているはず！　同じ男……

いや違うか。同じ性欲を抱えた存在だから分かる!!

「……仕方ない。ＫＡＮ―ＳＥＮ達の為だ。思い切って全員分のチョコを買って来るか！」

手作りは無理だ。俺の料理の腕がどうのこうの以前に一個人が百個以上のチョコを手作りとか無理ゲーにもほどがある。だから買って来たチョコで勘弁して下さい。その代わり真剣に選ぶからさ！

そうと決まれば早速お菓子屋に行って、良いのを見繕わないとな。今はまだ二月上旬だし、流石にまだ売り切れてはいないはずだ。とはいえ俺の場合は個数が個数だから、早めに頼んでおいて損は無いだろう。

「いや、待てよ？　何もないＫＡＮ―ＳＥＮ達はともかく、俺と関係を持ったＫＡＮ―ＳＥＮ達には追加で日頃のお礼をしたいな……」

普段から俺とセックス三昧の日々を送ってくれているＫＡＮ―ＳＥＮ達には、チョコとは別に何か特別なプレゼントをしてやりたい。どうせならあいつらが喜ぶ物が良いな……う～ん、どうしよう。こういう時は俺が貰ったら嬉しい物を考えれば……

「……あ、良いこと思いついた」

そして迎えたバレンタインデー当日。俺は有り余る数のチョコレートを背負って、皆が集っているであろう大広間にやって来た。皆にはあえて俺がチョコを用意する素振りは見せていない。

いやだってさ、サプライズって心躍らない？　あらかじめ渡すって伝えるより、実は用意してました～的な感じで渡した方が喜びも深くなると思うんだよ。

え？　本音？　俺からチョコを貰えるかドキドキソワソワしてるＫＡＮ―ＳＥＮ達が見たかっただけですごめんなさい。

と、とにかく！　ちゃんと全員分のチョコを用意したしセーフだろ、うん。まぁ流石にこの部屋にＫＡＮ―ＳＥＮ全員集まってるとは思えないが、ここにいなかったＫＡＮ―ＳＥＮ達には後で自室まで渡しに行けば良い。夜なら全員自室にいるはずだからな。

「今日はあえて誰も秘書艦に任命しなかったし、朝食時もわざと顔を出さなかった。あいつら、きっとチョコが貰えるか不安がってるだろうな……」

いや～この世界に来てから女の子が男をからかう気持ちが理解出来たわ。楽しくてしょうがない！　元の世界のサラトガも俺にイタズラしてる時はこんな気持ちだったんだろうな。これは病み付きになるわ。

さて、そろそろ痺れを切らしたＫＡＮ―ＳＥＮ達とご対面といきましょうかね！　俺はドアノブを握り、大声を出す心の準備を整えた後……勢い良く扉を開く！

「よう皆！　今日はバレンタインデー！　いつも頑張ってくれている皆に俺からチョコレートをプレゼント……」

「お兄ちゃんからチョコを貰うのはユニコーンだもんッ!!」ズドドドドドッ!!
「あ、あてだって指揮官のチョコ欲しいもん！　今日だけは……誰にいじめられたとしても、負けないから……っ！」ズバババババッ!!
「ハッ！　その程度の攻撃がオールドレディに通用すると思っているのかしら！　指揮官のチョコは私の物よ！　Ｂｅｌｌｉ　ｄｕｒａ　ｄｅｓｐｉｃｉｏ！」ズドォンッ!!
「ご主人様はダイドーのことを見捨てません絶対に見捨てませんつまりバレンタインデーなら私のようなメイドにもチョコレートをくれるはずですいやでももしかしたら他の人に渡すかもしれませんそんなことになればダイドーは見捨てられたということにいやそんなはずありませんご主人様は私を見捨てないと言って下さいましただからダイドーはご主人様を信じなければいけませんですが優しいご主人様なら他の人からチョコレートをせがまれると断り切れないかもしれませんしあぁどうすれば良いのでしょうかそうです他の人を始末すれば良いんですそうすればご主人様はダイドーだけを見てくれるはずですそしてダイドーにチョコレートをくれるはずですホワイトデーにはダイドーからご主人様へお返しをお渡しするんですそうすればご主人様は私を必要としてくれますそしてあわよくばダイドーをメイドよりも大切な存在として扱って下さるかもしれませんあぁダイドーは幸せですご主人様に必要とされるだけで安心す

るんですだから一刻も早くこの馬鹿騒ぎしている人達を黙らせてダイドーが必要だと分かってもらうんですですから皆様お覚悟をご主人様のチョコと栄光の為に……！」ズガガガガガガガッ!!

「もう……チョコレートが貰えないかもしれないからって、大暴れするなんて……ロドニーでも少し失望しましたよ？　指揮官に迷惑をかける人に情けをかける必要はありませんよね？　私が皆の暴走を止めたとなれば、きっと指揮官も私を今まで以上に頼りにしてくれるはず……そして用意してくれているであろうチョコレートを私に……ふふっ♡」ズドドドドドッ!!

「貴女も弾幕張って壁を消し飛ばしてるでしょうがッ!!　どこもかしこも赤城と指揮官様の恋路を邪魔する者ばかり!!　この私こそが指揮官様のチョコレートを受け取るに相応しいという事実を身をもって教えてあげないといけないかしらねぇ!!」ドガガガガガガガッ!!

「……大丈夫だ、問題無い。私と指揮官はいつも……♡　だが、こうも障害が多いと万が一ということもある……仲間に攻撃するのはご法度だが、今回ばかりは仕方がない。指揮官と過ごした母港と私の思い出を守る為……終・わ・り・だッ!!」ドガアアアアアアンッ!!

「お～っとぉ！　対空ナンバーワンの私にそんな攻撃効かないよ～だ！　馬鹿な私でも

これだけは分かる！　ここで人数を減らしておけば私が指揮官のチョコを貰えるって！　だから大人しく沈んじゃえ〜！」ズババババッ!!

「そうよ私は先生なのよ生徒である指揮官君が先生である私にチョコレートなんてだけどやっぱり期待してしまう私がいるだって仕方ないじゃない指揮官君ってば一緒に過ごしていく内に立派になっていってある日突然エロくなっちゃって先生である私を惑わせるものだからこそそんなエッチな指揮官君なら私にチョコレートを用意してくれていてもおかしくないいやむしろチョコレートより凄い物かもだって指揮官君はエッチな子だからそれくらい平気で考えていそうだしいつも先生を誘惑する悪い子だしそうしたら私どうなっちゃうの我慢出来ずに襲ってしまいそう私が愛読していた薄い本みたいに熱い夜を過ごしちゃうのダメよ指揮官君気持ちは嬉しいけど私は先生で貴方は生徒なのこんな禁断の愛なんてだけど指揮官君から求められちゃったら私絶対に我慢出来ない今だってそんなことを考えるだけで濡れてきちゃうしそうよここで私がこの出来の悪い生徒達にお説教すれば指揮官君は私を今まで以上に尊敬してくれるよしヤるのよレンジャー私は指揮官君の先生なんだからこういう時こそ生徒に正しい道を示さないとレンジャーレンジャーレンジャーレンジャーストライクッ!!」ズドドドドドドドドドドドドドドドッ!!

「この変態バ火力教師……わ、私だって指揮官のチョコレート……欲しい！　食べた

いっ！　例えルイスやヘレナちゃんが相手だったとしても、今日だけは譲らないんだから……！」ズドドドドドッ!!

「」

　えっ、何この世紀末状態。ＫＡＮ―ＳＥＮ達が仲間割れしまくってるし大広間が青空教室状態になってんだけど。随分前に大乱交スマッシュＫＡＮ―ＳＥＮズがおっ始まるとかふざけたこと考えたけどさぁ……これじゃガチのスマ○ラじゃねーか!!　いやスマ○ラ通り越してバト○ワだよバト○ワ!!

　何なんだよこの状況!?　セイレーンは見当たらないしどう考えても仲間同士でドンパチやってるじゃねーか!!　ヤバいヤバいヤバいこのままじゃ母港が壊滅して俺の所持金が修理費で吹っ飛んじまう!!　とにかくこいつらを落ち着かせないと!!

「お、おい皆！　落ち着」

「ここで倒れる訳にはいかない……さかなきゅん。この死闘を勝ち抜いて、一緒に指揮官さんのチョコを食べよう……必ず……！」

「綾波！　初期艦だからっていい気にならないでよ!!　ただでさえ私はアニメで出番が少ないのに、この作品でも出番を奪うつもり!?」

「いやだからチョコを」

「いい!?　お前達のような赤の他人が指揮官からチョコを貰えるはずないでしょう!?

だって私のオサナナジミだもの！　オサナナジミがオサナナジミでオサナナジミなのよ!?　チョコを貰えるのは私!!　負け犬共は全員くたばれぇ!!」
「何この人。訳分かんないことばっかり言ってる……指揮官は私に肉まんチョコを作ってくれるんだよ。この前だって、おっきな肉まん買ってくれたし……！」
「……」
「姉に勝る妹はいないのっ!!　指揮官の専属メイドだか何だか知らないけど、ベルには……ベルにだけは指揮官のチョコは渡さないッ!!」
「これは少々困りましたね。私としては姉さんと仲良くしたのですが……ご主人様のチョコレートを私から奪おうというのなら容赦致しません。出来の悪い姉の矯正もメイドの、いえ、妹の務めです」
「」ブチッ★
　うん、キレたね。もう堪忍袋の緒が切れちゃったね。これは一発ガツンと言わないと分からないみたいだな……スゥ～ッ！
「いい加減俺の話を聞けやああぁぁぁぁぁーーーーーーーーッ!!」
「「「「「「「「「「ッ!?」」」」」」」」」」
　シーン……
　よし、ようやく静かになったか。部屋中の壁という壁が無くなってるし三百六十度全

方向から外の景色が見えるしＫＡＮ―ＳＥＮ達はズタボロで満身創痍だし全力で現実から目を背けたいけどここは踏ん張る。多分いや確実に俺が元凶っぽいし。

「……とりあえず、まず言いたいのは母港内でガチバトルするやつがあるか！　仲間割れしたいならせめて海でやれよ!!」

「「「「「「「「ごめんなさいッ!!」」」」」」」」

俺が怒鳴るとその場にいた全員が土下座した。それはもう綺麗で完璧な土下座をしてみせた。それこそクイーン・エリザベスやドイッチュラント、エイジャックスや他の気が強いＫＡＮ―ＳＥＮ達でさえ頭を地面に擦り付けている。これは元の世界では絶対に見られないレアな光景だな……ってそんなこと考えてる場合じゃない。

「はぁ……でもまぁ、俺がお前達にワザと顔を見せなかったのも原因だし、それについてはすまなかった。その、なんだ。母港の修理費は割り勘ということで」

「いや私達が全額出すわ！　むしろ出させてッ!!」

「そ、そうよ！　私達が大暴れしたのが原因だし、指揮官は何も悪くないわ!!」

割り勘という言葉を聞いた瞬間、ウォースパイトとクイーンエリザベスが顔を上げて全額払うと言い出した。しかし相変わらずクイーンエリザベスは「指揮官」呼びのままか……この世界に来て半年くらい経つけど、未だに慣れないな。

「その提案はありがたいけど、俺にも原因がある訳だしな……流石に全額支払ってもら

うってのは」
「何言ってるんですか！　いくら責任者とはいえ、私達女性陣がみっともない理由で引き起こした問題の後始末を、男性である指揮官にしていただく訳にはいきません！」
「そ、そそそそうですわ！　指揮官様には一切の責任がございません！　全て私達のせいですから!!」
今度はＺ２３（ニーミ）と赤城が顔を上げて俺の提案を否定してきた。こんなところでも貞操逆転の影響が現れるのか……う～ん、これ以上言い合っても平行線になりそうだし、ここは俺が引くしかないか。
「……分かった。じゃあ、お願いしても良いか？」
「「「「「「「「もちろんです！」」」」」」」」
少し心が痛むがＫＡＮ―ＳＥＮ達の好意に甘えることにする。というか今の台詞全員がハモっただろ。なんでそのチームワークの良さをさっきのガチバトルで発揮出来なかったんだよ。これほどの団結具合だったらバト○ワなんて起こらなかっただろうに。
「ところで、指揮官はどうしてこの部屋に来たの？」
「マジで俺の言葉聞いてなかったんだな……」
サンディエゴの気の抜けた質問で俺は肩を落とす。このままチョコを持って帰って

やろうか……いやダメだ。折角大金をはたいて買ったんだ。この量を俺一人で消費出来る訳がないし捨てるなんてもってのほかだ。

「だからさ、その……サプライズ的な感じで、今からバレンタインチョコを皆に配ろうかなと……」

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

「……どうした？」

「「「「「「「「「あの、今何とおっしゃいましたか？」」」」」」」」」

「だからチョコを配るって」

「「「「「「「「「……全員に？」」」」」」」」」

「あぁ。いつも皆には世話になってるからな。買って来たチョコで悪いが、気持ちは込めたつもりだ。受け取ってもらえると嬉し」

「「「「「「「「「いよっしゃああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!」」」」」」」」」

「うおぉっ!?」

全員が一斉に大声を上げたせいで爆音となって俺の耳に突き刺さる。み、耳がぁ……っ！

「お、おおっ、お兄ちゃんのチョコを皆で貰えるなんて……イラストリアス姉ちゃん！これって夢じゃないよね!?」

「もちろんよ。私だって今、感激し過ぎて目〝ど鼻〝が〝ら〝涙〝が溢〝れ〝出〝じでる〝も〝の〝……」
「……気持ちは痛いほど理解出来ますが、流石にはしたないですわよイラストリアス姉さん。ハンカチで拭いて下さい」
「あ〝、あ〝り〝がどう〝……ズズーッ！」
（思いっきり鼻をかまれましたわ……）
「し、指揮官さんからのチョコ……はぅっ」
「お、おいオクラホマ！　しっかりしろ！　気絶するほど嬉しいのは分かるがここでぶっ倒れてたらチョコが食えないぞ！」
「ヒッ……ヒッ……♡」
「あぁっ！　大鳳が嬉し過ぎて見るに堪えないアヘ顔で過呼吸起こして死にかけてる!?　ヴェスタルー！　ヴェスタルはどこー!?」
「うふふ……♡　いつも健康チェックと言いつつセクハラゲフンゲフンッ！　日頃から指揮官の身の回りのお世話をしてきて正解でした……お陰でこうして私までチョコレートを頂けるなんて……♡」
「ダメだこっちも嬉しさでクネクネしながらトリップしてる！」
「……えーっと、喜んでくれてるのは嬉しいが、そろそろ配って良いか？」

「「「「「「「「「是非ッ!!」」」」」」」」」

「ぎゃあっ!?　だから一斉に叫ぶな！　鼓膜がぁっ!!」

当初の予定と随分……いや凄まじくズレまくってしまったが、ようやくＫＡＮ―ＳＥＮ達にチョコを渡すことになった。ある者は感激のあまり軽く五十メートルは飛び上がり、ある者はチョコに頬擦りしまくっていたり、ある者は即食べてヤクでも決めたかのような顔で蕩けていたり……

うん。ここまで喜んでもらえると用意した甲斐があったというものだが、それにしてももう少しまともな喜び方は出来ないものだろうか。だってどいつもこいつも集団薬物でもやらかしたかのようなエグい顔付きや行動で喜んでるし……ぶっちゃけ軽く引いてるんだけど。

「しきっ、指揮官のチョコッ！　バリバリムシャムシャ!!　美味いッ！　これなら毎食食べても飽きないな!!」

「ちょっと先輩それチョコじゃなくて包装ですよ！　はむっ！　でも確かに美味しい！」

「そういう瑞鶴だってチョコをくくったリボンを貪ってるじゃない……ガリガリッ！　だけど錯乱する気持ちは分かるわ。男の方から頂けるチョコが、これほど心に染み渡る味だったなんて……♡」

「プラスチックケースを噛み砕きながら何を言っているの翔鶴。指揮官からの気持ちを全て頂く為には、こうするのが最も効率的よ？　はむっ！　ガリュガリュッ！　ムシャムシャムシャッ！　ゴリゴリッ！」

（全部って、チョコもケースも包装もリボンも食べるってことか……姉様にしては先走った考え方だなぁ。僕なら冷凍保存して家宝にするのに……）

いくら女の方が盛ってる世界だからってこれはないわ。俺だって元の世界でもここまでやべー行動には……いや、確かに美少女揃いのＫＡＮ―ＳＥＮ達からチョコを貰えれば、童貞だった頃の俺ならこれくらいトチ狂った行動を……いやいやいやいや。流石にそれは……

そんなこんなでＫＡＮ―ＳＥＮ達の狂喜乱舞っぷりを見ていたら、あっという間に夜になった。部屋の半分を占領するほどに大量のチョコ（皆にはバレないよう当日まで倉庫に突っ込んでおいた）も、今では全部配り終えたお陰でスッカラカンだ。

だがしかし、俺が用意した本当のバレンタインチョコは、これから一部のＫＡＮ―ＳＥＮに振舞うことになる。この日の為に色々と準備したんだ……ドン引きされないことを祈るしかない。

コンコンコン……

「……入ってくれ」

ガチャ……

「指揮官。どうしてこんな夜遅くに呼び出し……なッ!?」

「指揮官！　もしかしてエッチのお誘い……わぁっ♡」

「明石も最初はそう思ったけど、だったら何でわざわざ全員に連絡を……にゃっ!?」

「でも今までだって散々３Ｐとかヤってきたし珍しい話でもないのだ！　今回もそれが目的で……ふえっ!?」

「卿？　昨夜は我と散々熱い夜を過ごしたではないか。いや、我としては連日セックスは大歓迎だが……ほう♡」

（本当なら明日指揮官を誘ってセックスしようと思ってたんだけど、指揮官から呼んでもらえるなんて……おぉっ！）

ドアを開いて入って来たのは、エンタープライズ、伊１９、明石、雪風、グラーフ・ツェッペリン、アキリーズ、他にもいるが、全員俺と肉体関係を持ったＫＡＮ―ＳＥＮ達だ。

そして彼女達は俺の姿を見て絶句していた。それもそうだろうな。俺だって逆の立場なら言葉を失うわ。だが、もちろんこの反応も想定内。皆からドン引きさえされなければ、俺のとっておきのプレゼントは大成功となる。

「し、ししし指揮官!?　その恰好は……はぁはぁ♡」

「……なるほど。理解したぞ……♡　相変わらず卿は我の股間を刺激してくれる♡」

「ま、まさかっ、まさかまさかまさか……ｐｉ○ｉｖのイラストでしか見たことなかったシチュエーションが、目の前に広がってるなんて……ごくっ♡」

エンプラと雪風は困惑しているが、にくすべはどうやら俺の意図を読み取ってくれたらしい。

「指揮官……♡　もしかして、私達の為に……？」

「あぁ。あのチョコはあくまでも皆に向けての物だが、セフレ達には一歩進んだプレゼントを贈ろうと思ってな」

伊１９が恍惚な表情をしながら質問をしてきたので、俺は出来るだけ魅惑の表情……自分で言ってて気持ち悪いなコレ。とにかく、最大限エロそうな表情を浮かべながらビッチ丸出しの台詞を言う。

（や、やっと分かったにゃ……♡　指揮官が急に個人風呂を作って欲しいとお願いしてきた理由が……♡）

「指揮官ってば大胆っ♡　アキリーズ達の為に、そこまでしてくれるなんて……♡」

エンプラ達が獲物を狙うような目で俺を凝視し、今にも飛び掛かろうとする勢いで性欲を漲らせている。それもそのはず、今の俺の格好は……

（（（（（チョコレート風呂に入る指揮官……エロ過ぎる……ッ!!））））））

チョコレート風呂に入って全身チョコ塗れだからな（もちろん事前に入浴して体は洗っておいた）！　だって男なら一度は考えるだろ？　女の子がチョコ風呂に入ってチョコ塗れになってるクッソエロい光景を!!　それを俺が再現したんだ！　どうせこの世界のＫＡＮ―ＳＥＮ達も考えることは同じだろうからな！

この日の為に明石には個人風呂を作ってもらったんだ！　表向きの理由は「いつでも風呂に入れるようにしたい」ということにして、ダメ元で割引交渉しようとしたら明石から「無料（タダ）でいいにゃ！　いつも明石とセックスしてくれてるお礼にゃ！」と言ってくれた。

　そのお陰で、このプレゼントを準備するのにかかった費用はチョコを余分に買い足す分だけで済んだ。持つべきものはセフレ……流石にそれは失礼か。とにかく、明石にはエロ方面でお世話になりっぱなしだな。だからこそ今日のチョコ塗れセックスでは出来るだけ明石を優遇するつもりだ。
「……明石に作って貰った精力剤兼媚薬と副作用無しアフターピル、その他諸々はたっぷり用意しておいた。だから……一晩中、いや、朝まで俺を貪り食ってくれ」
「「「「「」」」」」」
　チョコ塗れの両手を広げてウェルカムの姿勢を取る。するとエンプラ達の瞳がハートで埋め尽くされた……ような気がして、全員が服に手をかける。そして……
「「「「しきかあああああああああんッ!!」」」」
「けいいいいいいいいいいいいッ!!」
　一瞬の内に全裸になり、ル○ンの如くダイブしてくる。俺はそのまま全員の性欲を受け止め、お互いにチョコ塗れになりながら……時にはチョコをホワイトチョコ（意味深）にしちゃったりして、朝まで獣のようにセックスしまくった。

※良い子も悪い子も真似しないでね※

「へっくし！　う〝ぅ〝……風邪ひいた……」

「大丈夫かにゃ？」
「これが大丈夫に見えるか……ゲホッ！　この寒い時期に長時間全裸でいたのがまずかったか……」
「多分それだけじゃないにゃ。私が作った精力剤を飲めば性欲は回復するけど、体力までは回復しないにゃ。だから私達全員とあれだけセックスしちゃったら……」
「無理が祟ったって訳か……ゴホッゴホッ！」
「今度は疲労回復薬も作っておくにゃ。だから今はゆっくり休んで？　はい、新しい冷え〇タにゃ」
「悪い……冷てっ！　でも気持ち良い……チョコ風呂、来年はやめとこうかな……」
「えっ……」
「と思ったけどやっぱりヤるわ。一年に一回の行事だしな」
「……♡」
（……あんな絶望に染まった表情を見せられたら前言撤回せざるを得ないだろ。はぁ……来年は明石の疲労回復薬に期待するか……あ、暖房も忘れずに入れないと……）
（昨夜の指揮官、クッソエロかったにゃ。それに指揮官の体中のチョコを舐めまくったから、まだ口の中が甘ったるい感じがするにゃ。でも凄く良かったにゃ……♡　あぁ、来年が待ち遠しいにゃ……♡）